ジキア

露露

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ジキア

【Ｎコード】
Ｎ４８４０Ｄ

【作者名】
露露

【あらすじ】
魔術師アシュディアーナ＝ルーヴィンは、仲間のジュニア、キキと共に魔物退治屋（バスターズ）をしている。楽しく平穏な（？）日々を過ごしていた彼はある日、ふと立ち寄った場所で初恋の女の子ではないかという人に出会う。気持ちが揺れ動く中、その陰でうごめくものは、彼を驚愕させる残酷な事実だった。魔術師たちが繰り広げる、長編恋愛ファンタジーです。０８／０６／１３完結。

プロローグ

キラキラ……キラキラキラ……

暗闇の中、月光が水面にゆらめき、輝いている。
それはまるでどこか違う空間にいるような気にさせた。
静まりかえった中に、ときどきちゃぽん、と何者かが水音をたてる以外に音はない。

「キレイだね」

ため息をつくような声で、少女が言った。

「うん」

そのすぐ隣で、少年が答える。
二人は、毎日一緒に遊ぶほど仲が良かった。
いつものタイムリミットは夕方。日が沈む前。
しかし、少年はこの日、真夜中に家をぬけだし、森の中の湖に行こうと少女を誘ったのだ。
少年は、その大好きな少女に、どうしても見せたいものがあったからである。

「僕、リっちゃんに見せたいものがあるんだ。見てて」

そう言うと、少年は立ち上がり、何事かつぶやく。
そして両手を空に向け、少し大きな声で唱えた。

「ホアール」
呪文と同時に両手を両脇に振り下ろす。
すると、湖畔の花という花のつぼみがいっせいに咲いた。
「わぁ！」
少女は立ち上がって感嘆の声を上げた。
「これ、明るい時に見たらもっとキレイね！」
その言葉に少年は待ってましたとばかりにパチン、と一つ、指を鳴らした。
次の瞬間、パッと暗闇にまばゆいくらいの光が灯った。
しかも、花それぞれの色の光。
色とりどりの光の波。
「すっ……ごーい！　スゴイスゴイ！　うわあーっ！！」
少女は嬉しそうに、その波の中を歩いた。
きゃっきゃっとはしゃぐ少女の笑顔が、その光に照らし出される。
少年は満足そうに微笑み、目を細めた。
少年にとってその光よりも、少女の笑顔の方がまぶしく見える。
しばらくして、二人はまた並んで座った。
ゆらゆらと揺れる光の波を見つめながら、少年は静かにきり出した。
「もしも、の話だけど……」
「なあに？」

少女が少年に向きなおる。

「もしも僕たち、もう会えなくなったら、リっちゃんは悲しい？」

少年はドキドキしながら、少女の反応を待った。

すると見つめる少女の大きな瞳がくもる。

「……アっくんどっか行っちゃうの？　ヤだよ私……また独りぼっちになっちゃう」

少女はこの町一番のお金持ちのお嬢様で、しかも一人っ子だった。

学校に通わず家庭教師に勉強やいろいろな事を習い、自由に外出も出来ないほど大切にされていた。

そのため遊び友達は一人もおらず、ただ窓から、同年代の子供たちが楽しそうに遊んでいるのを見ているしかなかったのだ。

かつてはそーっと外に出て、その子達の輪に行き、「何してるの？」　と尋ねてみた事もあったが、仲間に入れてくれるどころか「あんただれ？」　と、冷ややかな視線を返されてしまった。

それからは、せめてその様子だけでも見ていたいという思いと、いつか誰かが見つけてくれて、「一緒に遊ぼう！」　と声をかけてくれないかという期待を込めて、窓からそうっと眺める日々が始まったのだった。

そんなある日、少年が少女を見つけた。

少年は魔術師である両親と共に魔物退治をしながら旅をしていた。

少年自身も魔術師の卵であり、両親から教わっていた。

物心ついた頃から接していたこともあってか、少年は稀にみる才能の持ち主であった。

少年もまた、一所に長くいなかったため、もっぱら遊びといえば魔術の練習だった。

ただ少女と違ったのは、そんな状況に不満も何もなかったこと。
そんな彼が、ある日ふと少女を見つけた。
来たばかりの町を探検していて見つけた大きなお屋敷を見上げた時、窓にひじをつき、ぼーっと外を眺める少女を、めずらしげに見つめていたら、視線をずらした少女と目が合った。
少女は飛び上がるほど驚いて隠れてしまったが、それでも少年が見つめ続けていると、そーっと少女が頭を出した。
その状態でしばらくの間見つめ合ったが、突然少年が笑い出した。
少女の様子があまりにおかしかったのだ。
少年は少女に向かって叫んだ。

「僕はアシュディアーナ！　君の名前は？」

少女は戸惑いつつも、身を乗り出して叫んだ。

「リ……リゼ！」
「ふーん、じゃあ“リっちゃん”　だ！」

少年はうきうきしながら会話をしていた。
久しぶりに同年代の子と話をしたせいかもしれない。

「ねぇ、そこで何してるの？　外に出て遊ばないの？」

何気ない疑問を口にしてみただけだったが、思いがけず少女は悲しそうに目を細めた。

「……友達、いないから……」
「……そっか……じゃあ、今から出ておいでよ！　僕と遊ぼう！！」
「！！」

少女が待ち望んでいた言葉を、少年がさらっと言ってのけた。
少女はしかし、断った。
「今日はもうダメなの。太陽が沈んじゃう時間だから……」
少年はまだ十分に明るい空を何となく見上げる。
「そう、かな？」
沈黙。
すると突然少女が叫んだ。
「あ、あのっ……アシュ、ア？　えっと……っ」
少年はくすっと笑い、言う。
「アッシュ！」
「じゃあアッシュ　“さん”　！」
ずるっと少年がこける。
「“さん”　なんていらないよ！　大人じゃあるまいし！」
「でも……呼び捨てなんてしたらパパとママに怒られるもの」
少年は半ばあきれて、両腕を組んだ。
「それじゃあ、んー、そうだな……あ、“アっくん”　てのどう？　“アッシュ”　にくんとかさんはつけてほしくないからさ」
「ア……“アっくん”　……？」
「うん！　何？」

恥ずかしそうに頬を紅潮させ、少女は言った。

「あ、明日っ、なら、その……っ……あ、明日もくるっ！？」

少年は少女の必死そうな顔に微笑みながら、

「明日また来るよ！」

大きく答えてきびすを返した。

その時、背後からさらに「あのっ！」と呼び止める声。

振り向くと、窓から落ちそうなほど身を乗り出して、少女が叫んだ。

「アっくん！　さようなら！！」

またもずるっとこけそうになりながら、少年も大きく手を振って、

「バイバイ！」と言った。

すると、それまでカチカチだった少女の表情がゆるみ、にっこりと少年に笑顔が返った。

「！」

思えばその時から、少年の心には小さな、しかし決して消えることのない灯火（ひ）が灯ったのかもしれない。

これが二人の始まりだった。

そして今、二人には別れが近づいている。

「また独りぼっちはイヤ。どこにも行かないでアっくん！」

嬉しい反応だが、しかし悲しい現実は、二人にはどうしようもなかった。

（もしも、の話にしようと思ったけど……）

少年は近々、また別の町に移ると両親から告げられていたのだ。
今まで移動したくないと思った事はない。
でも今は、初めてそう思った。少女と離れたくない。ないけれど……。

「リっちゃん、僕もうすぐまた別の町に行くことになったんだ……。ホラ、前に言ってた伝説のでっかい魔物が、北の方の町を襲ったんだって！　だからそいつを追っかけて、やっつけに行くんだ！！　そうさ！　僕がそいつを倒すぞ！！　倒して、そしたらリっちゃんに見せっ――……」

二人見つめ合い、そして沈黙がおりる。
明るく振舞おうとする少年の、どうすることもできないという気持ちを察しているのか、少女ももう「行かないで」とは言わなかった。
見つめる少女の瞳が光に照らされ、ゆらゆらと揺れているのが見えた。
今にもこぼれ落ちそうな涙を、必死にこらえている。
少年はそう気づくと、たまらず少女の手を取った。
かたく握りしめる。

「僕がどこにいても、リっちゃんがどこにいても、絶対に僕はリっちゃんを見つける！！　約束する！！」

少女はその言葉をかみしめるようにこくりと頷き、そして少年の大好きな笑顔を見せた。

光の波間にひときわ輝く少女の笑顔は、その時少年の胸に焼きついた。

それから数日後、あの夢のようなひと時がまるで幻だったかのようなあっけなさで、二人は別れた。

お互いにさよならも言わず、いや、あるいは言えなかったのかも知れないが、それから一度も、連絡さえ取れないまま、十年の時が経った。

二人はもう、大人になった。

第一章：魔物退治屋1

浅いまどろみの中、フワフワしたような気持ちの良い感覚の中で、懐かしい声が聞こえる。
≪アっくん――・・・・・・・≫
（リっちゃん・・・・・・・・！）
太陽のような笑顔がどんどん近づいてくる。
≪アっくん・・・・・・・アっくん・・・・・・・≫
「・・・・・・――シュ・・・・・・・」
≪アっくん・・・・・・・≫
「・・・・・・――ッシュ！」
≪会いたかった、アっくん！！≫
「――アッシュ！！」
「リっちゃん！！」
がばっと、アッシュは夢の中の少女――リっちゃんに抱きついた――はずだった。
しっかりと感触もある。きつくきつく抱きしめ、アッシュは言った。
「オレも会いたかったよぉーリっちゃ～ん！」
「ちょっ・・・・・・はなしてアッシュ！コラ！！」
ぐいぐいと、その女はアッシュの頭を押し返すが、すごい力だった。ビクともしない。格闘しつつ、女は叫んだ。
「たすけてーっジュニア！！また寝ボケてんのよ、アッシュのやつっ！！」
と、女が言い終わるが早いか、すごい形相でエプロン姿の一人の男がスタスタと2人に近づき、右手に持っていたフライパンで、思いっきりアッシュを殴りつけた。
ガンッ！！
と、いい音が響き、アッシュはバタリ、とベッドに倒れこんだ。「・

・・・・・なな?！」と、しばらく目をぱちくりさせていたアッシュだったが、殴った男の顔を見て、ようやく意識がはっきりしたようだ。
男はにっこりと言った。
「お・は・よー」
アッシュは半目で、「目がすわってるぞ・・・・・・」とつぶやくが、殴られた衝撃が今頃になって襲ってきたため、反撃するのはあきらめ頭を抱えた。
「いてぇ～・・・・・・」
「もお、毎朝毎朝寝ボケんだから。たまにはフツーに起きなさいよ！」
「てか目覚まし使って一人で起きろよ」
男――ジュニアと、女が交互に説教をする。アッシュは「はいはい」といいかげんに返事をしつつ、まだズキズキと痛む頭を押さえながら起き上がり、2人の間を通って共同の部屋――ダイニングへ行こうとし、ふと立ち止まり、振り返った。
「ちょっときいてんのアッシュ！・・・・・・何よ？」
アッシュが真剣なまなざしで女を見つめる。
そして言った。
「キキ、おまえけっこうムネでかいな！」
バコッ！！
言い終わるやいなやジュニアの鉄拳を浴び、
「ッ―てめえメシぬきッ！！！」
と、キキに最悪のお仕置きをくらってしまった。
くらくらしながら、アッシュは「ジョーダンじゃんよー」とつぶやくが、もう遅い。今日の朝食は、サラダとフレンチトースト。アッシュは2人がおいしそうに食べるのを、おなかを鳴らしながら見つめていた。
「ん～おいしい！かわいそうねぇアッシュくんてば。ばかなこと言わなきゃいいのに、ねぇジュニア？」

キキがいかにもおいしそうに、アッシュの目の前でトーストにかぶりついている。
「“くん”つけんな！だいたいメシ作ってんのジュニアなのに何でおめーが食っていいとかダメとかいう決定権持ってんだよ料理作れねーくせにえらそうにだいたいオレはぜんぜん悪くねーよなはっきし言ってこんな食べ盛りの子をメシぬきにして飢え死にでもしたらどーしてくれんだよ・・・・・・ブツブツ・・・・・・」
「何か言った？」
心なしかでっかくなったキキがギラッとアッシュを睨みつけた。
ブツブツ文句を言っていたアッシュだったが、コロッと態度を変え、笑顔で「いーえー、なんでもゴザイマセンですぅー」と、びくびく答える。
ガタッと席を立ち、しらじらしく腕を回し始めた。
「いやあ～今日の依頼は数が多くて大変そうだからなあ～準備運動でもしよーっと・・・」
1，2，3，4・・・・・・と運動し始めるアッシュをキキは半目で見つめ、「バーカ」と吐きすてる。いくらもしないうちにぐぅ～とおなかを鳴らし、アッシュは「あーハラヘッた！！」と大の字に転がった。
その横で「ごちそうさま」とつぶやいて、ジュニアが食器を流しに運び、それから仰向けになっているアッシュをのぞき込んだ。
「そんなとこ転がってたらジャマだ。もういいから早く食えよ、メシ」
そう言って親指をくいっとテーブルの方に向けた。
ガバッとすばやく立ち上がり席につくアッシュ。
「さすがジュニア～！やっぱキキとは違うよなー！」
流し目でキキを見、にやっとする。
「何よ！」
「だまって食え、アッシュ！あと5分で出発するぞ」
「いただきまーす！」

勢いよく食べるアッシュに苦笑し、ジュニアは依頼内容の書いてある紙を広げた。
その背後で皿を運ぶキキが、まだ不満そうに眉をしかめていた。
「んもう！ジュニアってばアッシュに甘いんだから！こんな頑丈なヤツ１食食べなくたって死なないわよ、ったく・・・・・・」
「んまいっ！！」
だいたい、これが彼ら3人の日常である。
アッシュ――本名アシュディアーナ＝ルーヴィンは、有名な魔術師を親に持つ、これまた魔術師で、しかも魔術学校をダントツの主席で卒業するという、これまでに類を見ない天才魔術師なのだった。
同業者（魔術師達）の間では名が知られているが、名前さえ出さなければ誰もその人と気づかないほど、普段はその辺の若者、という感じである。術薬で抜いた髪の色はキラキラの金髪で、長さは短く切ってある。左耳には２つのピアスをつけており、１つは小さめのリングピアス、どちらもシルバーである。
身長は１８０ｃｍに少し足りないくらい、筋肉はあるが、どちらかというと痩せているので、服を着ると全体的にひょろっとした印象を受ける。が、スタイルは悪くない。アッシュはかなりのマイペースで少々口が悪いのが難点だったが、女の子にやけにモテてしまうのは、その整った顔だちからだった。
しかし、周りからもてはやされるのとは裏腹に、意外にもアッシュの弱点は恋愛であった。２０才（はたち）のこの年まで幾度となく告白され、何人もの女性と付き合ったが、どうしてもうまくいかないのだ。その要因はさまざまだったが、１つだけ共通することはアッシュ自身の気持ちである。
言い換えれば“恋愛感情”というやつが、いつも欠けていた。実際アッシュの方から告白したことはなく、告白されて付き合う理由も、「嫌いじゃないから」という、女の敵のようなヤツなのだが、こんなアッシュでも根本的にはやさしくいい奴だったので、未だ“女の敵”になり得ていないのである。

ただ、フラれるのはいつもアッシュの方だった。そしてアッシュ自身その理由がわからない、というケースが殆どだった。
つまり、一口に言ってしまえば本気で人を好きになったことがない、いや、アッシュの場合、なぜか本気になれないのだ。
しかし、厳密に言えばただ一人を除いて、である。
いつも記憶の奥底に、どれだけ年月が経とうと消えることなくいつづける“リっちゃん”という少女が、これまでの人生２０年の中で本当に大好きだったたった一人の女の子だった。
といっても、子供の頃の話である。あの時の気持ちが本当に“恋”であったのかどうかさえ、今のアッシュには判別できなくなっていた。
何を恋と呼ぶのか、どういう気持ちが“好き”という感情と言えるのか、これまで人に聞いたり自分で考えてみたりしたが、自身がそんな気持ちになれないので、結局いまだに曖昧なままであった。
だから“リっちゃん”の存在はアッシュにとって不思議であり、しばしば夢を見ることも、はじめは「まさかひきずってる？」と悩んだりしたが、忘れることのないあの“約束”を信じてみたところで結局は子供の頃の話である。“リっちゃん”自身がもう忘れてしまっているに違いない、自分だけ思い続けるなんてバカらしいんじゃないか、と、自覚はなかったが、アッシュの中ではそう結論づけられていた。
不確かで形のないものほど人は信じにくい。“リっちゃん”のことは“約束”を果たしたくても果たせないまま、あまりに長すぎる時間が経ってしまった。大人になるにつれて直面する現実が、そんな甘い夢をいつしか「あきらめ」させた・・・・・・。それはしょうがない事なのかもしれなかった。
しかし、そんな“リっちゃん”の夢をこのところ毎日のように見ている。今朝も“リっちゃん”とキキを間違えて抱きついてしまい、大変な目に遭ってしまった。
とにもかくにも、こんなアッシュではあったが、彼は現在何をし

ているかといえば、魔術師としてオーソドックスな、しかし魔術師が憧れてやまない『魔物退治屋』――バスターズである。
同業者はあふれるほどいるが、それだけで食べていける者は少なかった。なぜならすべては能力に尽きるからだ。魔術師としてその腕が一流ならば専業でやっていける。名を揚げれば揚げるほど依頼も増え、それだけ金も入ってくるのだ。アッシュ達はそんな少数派の、しかもトップレベルに位置するチームだった。
仲間の一人、本名カーサ＝クラウプ＝ジュニアは、魔術学校時代からの親友であり、アッシュの相棒（パートナー）である。ジュニアは魔術で作り出す剣のスペシャリストで、天才といわれるアッシュでさえこの分野では3回やれば2回は負けるほど、一流の使い手なのだ。魔術師として総合的に見ても、かなりのレベルと言える。アッシュが本能的天才だとすれば、ジュニアは努力的天才と言えるだろう。
つまりはかなり最強な退治屋、ということだ。
もう一人、2人と同い年の女の子キキがいる。本名をキキ＝メインという。彼女もまた魔術師だが、能力から言えばいわゆる“フツウ”レベルだ。基本的な魔術なら使えるが、とうてい実戦に及ばない程度である。
しかし、そんなキキが秀でているものは、術薬だった。魔術師の必須条件、必修分野であるのでアッシュもジュニアも相当なレベルだが、キキのすごいところはその発想だった。
例えばアッシュが使っている“術薬染髪剤”はキキが作り出したものである。一般の染髪剤は髪が伸びてくると根元は地毛の色になるが、キキの開発したものはまるで地毛だったかのように、伸びても伸びても染めた色のままでいることができる。もちろん元の色に戻すこともできるし、全く髪が痛まないのも利点だった。
キキの作り出すものはセンスが良く、一般にも売り出してみたところ若者を中心に話題を集め、キキ一人なら十分生活していけるお金は稼いでいた。
そんな彼女も立派な退治屋のメンバーである。主に裏方を仕切っ

ていて、このチームの窓口は彼女だった。
また、かなり前からジュニアとは相思相愛の恋人同士である。
そうしたメンバーで構成される、アッシュをリーダーとするこのチームは、チームネームを『ジキア』という。古代言語で『最強』という意味を持つと知ったのは、命名してしばらく経ってからだった。もともと3人の頭文字をもじったものだったにしてはあり得ない偶然に、一番喜んだのはアッシュだった。その頃好きこのんで“ジキアのアッシュだ！”と叫んでいたのは言うまでもない。
チーム・ジキアは結成してまだ2年足らずの新生チームだったが、失敗を知らないパーフェクト・ワークで瞬く間に名は世界を駆け抜けた。
現在では3人が十分に生活できるそれ以上の金額を稼げるトップクラスに名を連ねている。
彼らは今日も依頼を受けた仕事に出る。
「ごちそうさまでしたっと！」
満足げにアッシュが立ち上がり、大きく伸びをした。
「よおっし！行くかぁーっ！！」
そう一声上げると元気良く玄関を出、階段を飛び降りた。
ジュニアも後に続くが、玄関で振り返るとキキの頬に軽くキスした。
「行ってきます」
「うん、気をつけてね！」
見送るキキは、階段の上から手を振る。もうすでに車の助手席に乗り込んでいるアッシュにも、キキは声をかけた。
「アッシュ！無茶だけはしないのよ！」
「まかしとけって！失敗しねーよ！じゃなっ」
エンジンがかかり、車は急発進した。
「ちょっ・・・・・・もお！わかってないじゃないの！」
ふう、とため息をつき、キキは“ジキア”の依頼を開始するため家の中へ戻っていった。

今日もまた、いつもの一日が始まった。

つづく

第一章：魔物退治屋２

車の中。
依頼内容の書かれた紙を広げ、アッシュはうーんと唸っていた。
「なになに～？『弱っていた魔物の子供が可愛かったので拾ってきて飼っていたら、１日ごとに数が増え、今や１００匹以上。よく食べるのでメシ代がかさみ、このままだと破産するのでメシをやるのを止めたら今度は一家を襲うようになり、今では家を乗っ取られてますます増え続けている。どうか退治して欲しい。』・・・・・・・・うへー、バカだなこいつ！魔物が人間の言う事聞くわけねぇのに。こりゃアレだな、“ピグモ”！分裂して数が増える」
「ああ。小型だが、そう数が多いと厄介だ。しかも家の中・・・・・・・派手にはやれない」
キキーッと右にハンドルをきり、車はきれいに横滑りをする。アッシュが必死に座席にしがみつきながら言った。
「曲がり角ぐらいブレーキ使えよおまえ」
「ん？ブレーキ？あったっけ？」
しらじらしくジュニアがとぼける。
アッシュは「あほ」と吐くと、ふと、キキはこの悪い癖を知っているのか気になった。
「あ、言っとくが、キキ乗せてる時はちゃんと安全運転だ」
心を読んだかのようなタイミングでジュニアが付け加えた。
「あっそ・・・・・・」
何となく疲れてそれだけ呟くと、すでにアッシュの手の中でぐしゃぐしゃになった依頼内容の書かれた紙を、無造作に後部座席へ放り投げた。
「で、どうするアッシュ？」
横目でジュニアが促した。
アッシュはにやり、と勝ち気に笑う。

「いつものアレで！！」
「・・・・・・どれだ？」
アハハッと笑い出すアッシュの横で、（つまりは考えてないってことだな）と、ひそかに思うジュニアであった。アッシュに作戦などいらない。状況を見てから、あるいは戦いながら方法を思いつく。アッシュはそんな本能的な戦い方をする。
車は町を抜け郊外にやってきた。そこをもう少し行くと農村の風景が広がる。そんな一見平和そうな中に、依頼主の家はあった。
車が甲高くブレーキの音を響かせ、急停止する。２人は車を降りて、本日の仕事場となる家を見上げた。その外観はほとんど他の家と大差なかったが、強いて言えば窓という窓、戸という戸は全て閉め切ってあり、彼らなりの対策なのかもしれなかった。
２人は家の前に立ったまま、しばらく無言でいた。両腕を組んで観察していたアッシュが、突然ジュニアにきり出す。
「この家全体張っとくか。一発でしとめる」
その表情は一変していた。集中している時の、獲物を捉えて逃がさない、野生のような鋭さがアッシュの目に宿る。ジュニアはその瞬間が気に入っていた。
「そうだな。ピグモは小型だが案外凶暴だ。一たん敵と認識すれば群で襲ってくる。外に追いやるまでが至難の技だが・・・・・」
そう言いつつも、すでに術で作り出した剣を片手に微笑を浮かべている。アッシュも鋭利に光る目をジュニアに向け、にやりと一笑した。アッシュは真っ直ぐ依頼主の家の玄関に行き、くすんだ茶色の木製扉を３回ノックした。――――返事はない。
「じゃまするよ」
とって付けたように言うと、そのまま戸を開け入っていく。後ろ手に戸が閉められるのを見届けたジュニアは、すっと目の前に剣を持ち上げ、ブツブツと呪文を唱え始める。握られた剣が淡く発光し出した。後は発動するだけ。
そして大きく剣を振り上げた。

「イギ＝シールド」
発動呪文と同時に、地面めがけて勢いよく剣を直下させた。
ザンッと、地面に突き刺さった次の瞬間、その地点から溢れるように術の網が現れ、あっという間に家全体を飲み込んだ。人間には影響のない、魔物専用の“トラップ”である。ここにひっかかれば、どんなにもがいても逃げられない。
「こっちはいいぞ、アッシュ」
何かを待つように、ジュニアが一人ごちた。

＊　＊　＊

「おーい、留守ですかぁー？」
踏み込んだ依頼主の家は、外の光が一切遮断してあるため薄暗い。そして何故か、奇妙なほど静まり返っていた。何度か呼びかけてみるが結果は同じだった。奥に進みつつ舌打ちする。
「依頼もらったジキアのアッシュだ！ほんとにいねぇのかぁ？！」
だめ押しに叫んでみる。が、やはり反応はなかった。
「よし！！じゃあもうやっちまうからぬあーっっ？！！」
突如、アッシュは足首を掴まれ、横にあったテーブルの下に引きずり込まれた。不意をつかれたアッシュは床に思いっきり頭をぶつける。
「いってえな！！ッ誰だ！！」
「シィィィィィィッ！！！！」
アッシュが顔を上げると、数センチしか離れていない距離にすさまじい形相で口に人差し指を当てて迫る、人間（？）がいた。声にならない悲鳴を上げる。
この人間（らしい）は、よく見ると3人もいる。彼らは鬼気迫る表情のまま、しかし極めて小声で、さらにアッシュに訴えかけた。
「（静かにして下さい！やつらを刺激してしまいます！）」
まだ動悸のおさまらない心臓に手を当てて、アッシュはまじまじ

とこの3人を見つめた。
彼らが今回の依頼者なのだろう。見たところ父、母、娘という家族構成のようだ。
（・・・・・・にしても）
アッシュが言葉を失った理由は、この家族の姿が、あまりにも奇妙だったからに他ならない。3人とも鍋やらボールやらを頭にかぶり、手にはこれまたおたまだのフライパンだのと、キッチン用品を持っている。娘に至っては何のつもりかリコーダーなどを携帯していた。そんな状態でテーブルの下に身を隠し、一体どうしようというのか。アッシュにはとうてい理解できない姿だ。
しかし、3人とも至って真剣そのものである。アッシュは徐々に見慣れてきたのか、やっと声を発する事が出来た。
「なにやってんだよ、あんたらわっ！」
アッシュの叫びに、3人がまたも揃って「シーッ」とアッシュをいさめると、こわごわ父親が口を開いた。
「やつらは腹が減ると襲ってくるんですよ。そろそろそんな時間だから隠れてるんです。じっとしてれば何もしてきません。だから早くあなたもコレかぶって！」
「なんでそーなるんだっ」
強引に鍋をかぶらされそうになり、アッシュはものすごくイヤな顔をして鍋をよけた。信じられないっ！と言うように3人が揃って目を見開くが、アッシュはそれを半目で見ていた。
「あのなあ、俺が隠れてちゃ何しに来たかわかんねぇだろ！」
そう言うと、アッシュはするりとテーブルの下を抜け出し、一瞬で全身の神経を張り詰める。そして奥の方にある1つの扉に視線をやった。
（あそこだ）
居場所を確信すると、テーブルの下から恐る恐るのぞいている依頼者に声だけ投げかけておく。
「そこ動くなよ！」

まっすぐにその扉へ向かって歩き出しながら、アッシュは口の中で呪文を呟く。扉の前に立つと、両こぶしを固く握り、大きく息を吸い込んだ。

「炸！！」

アッシュが叫んだ。と同時に、彼の全身から衝撃波が発される。

それは確実に狙いを定められた、アッシュならではの神技――ふっとんだのは家中の戸という戸、窓という窓“だけ”だった。今が昼間だということを思い出させるように、いっせいに明るい光が差し込んでくる。

見る影もなく消失したアッシュの眼前の扉の奥には、動揺を隠せないのか、乱れた波動が交錯していた。

「ありゃー、こいつは・・・・・・増えすぎだっつの！」

雪のように白いフワフワの毛を逆立て、鮮やかな赤をぎらぎらと燃えたぎらせた無数の瞳が、全てアッシュへ向けられていた。これがピグモの戦闘体制だ。

しかし、臆することなくそのピグモの群に足を踏み入れる。アッシュの右手にいつでも発動可能な魔術があるのを恐れているのか、睨みつける瞳はそのままにじっと機会（チャンス）を窺っているようだった。緊迫した睨み合い。

アッシュはゆっくりと瞳だけ動かし、何かを探していた。

（さあ、命令を下せよ、オリジナル・・・・・・！）

第一章：魔物退治屋3

ピグモが短期間で、一部屋にひしめき合うほど増殖していくのは、ある特徴的な習性に原因がある。それは、ピグモは満腹になると分身を産む、という厄介なものだった。分身が分身を生み増殖していくが、それらは個々では動けない。一番初めの分身を産んだオリジナルの意のままに行動しているのである。ただし、オリジナルが死んでしまえば、分身たちは全てオリジナルになる。そういう仕組みになっているのだ。だからこういう場合、絶対にオリジナルを殺してしまってはいけない。

アッシュの作戦は、オリジナルを捕まえて一番にトラップへかける事だった。オリジナルがいなければどうする事も出来ない分身たちは、オリジナルが生きている限り必ずその後を追う。そんなピグモの習性を利用して一気に片付けようというのだ。

しかしそのオリジナルを見つけ出すのが至難の技だった。どこかに分身との違いがあるというのならまだ簡単だが、分身とはつまり、クローン。目では判別ができない。アッシュは、オリジナルが分身に命令を下す一瞬の変化を見極めようとしていた。

今だ動かないピグモに、アッシュはあおるように右手の魔術を大きく揺らした。

（どうしたボス―――俺がこわいか？）

次の一瞬だった。微かな波動のぶれ。

アッシュは部屋の左片隅へ鋭い視線を向ける。僅かに生じたたった一つの異なる波動を、アッシュは完全に捉えた。刹那、何百というピグモがアッシュに襲いかかる。オリジナルの姿はアッシュには見えていない。しかし、一たん捉えたその微かな波動で居場所は鮮明に理解できた。

ピグモの攻撃を受けるコンマ何秒かの差ですばやくシールドを張ると、アッシュは間をおかず右手の魔術をオリジナルに向けて放っ

ていた。
「ラバス！！」
白く輝く光球が僅かな間隙を縫って、まっすぐに目的の一匹に命中した。それと同時に分身たちの動きがぴたっと静止する。アッシュが腕を振り上げると、光球に捕獲された、他のピグモと何ら変わりのない一匹が空中に浮かび上がった。
「ビンゴ」
生け捕られたオリジナルは、真っ赤な目を光らせて必死に命令しようともがいているが、アッシュの魔術球は魔力を消滅させてしまう。にやりと笑って、アッシュは一番近くの窓へ視線を移した。
「これで、終わりだっ！」
言葉と同時に窓の外めがけて全力で腕を振った。その方向に光球が飛び出し、勢いよくジュニアの仕掛けたトラップにぶつかった。それはくもの糸のように、光球ごと捕まえた。
そしてピグモの習性通り、オリジナルの向かった方向へ全ての分身が一斉に飛び出した。トラップめがけて飛び込んだのだ。意思を無くしたピグモは一種の混乱状態である。オリジナルの向かった方向、それはつまり“外”。その程度にしか認識されないのである。それはアッシュが事前に作っておいた戸という戸、窓という窓からひしめき合って溢れ出す白い波となって表れた。
家の中を占拠していた全てのピグモがトラップを埋め尽くしてしまうと、待ち構えていたジュニアが声を上げる。
「イギ＝ダナン！」
ジュニアの握る剣が炎に包まれたかと思うと、刹那、トラップが一瞬にして燃え上がり、罠にかかって身動きの出来ないピグモをあっという間に飲み込んだ。次々とピグモが消滅していく。
術が解かれると、後にはピグモの数だけ「核（かく）」が積みあがっていた。家をぐるりと取り囲んでいる。
「わんだほー！すっげぇ数だなっ、これ」
今までの緊迫感を根こそぎかき消すかのような、あっけらかんと

した声がジュニアに向けられる。
よっ、と窓を飛び越えて、任務を果たしたアッシュが外に出て来た。ジュニアの様子も実に淡々としている。核に手をかけながら、ジュニアは声を上げた。
「アッシュ、オリジナルの核はどれだ？」
言われるまでもなく、すでに積み上げられた核を眺めやっていたアッシュが、んー、と曖昧に返事らしきものを返した。オリジナルを投げ飛ばした辺りでじっとしていたが、まもなく見つけだす事が出来た。アッシュが歓声を上げる。
「おーあったあった、こいつだ」
探り当てたオリジナルの核をしげしげと見つめる。
「こいつはけっこうな値になるぜ♪中級（ミドル）あたりいけんじゃねぇ？」
「これだけ分裂してるのを見ると、妥当だな」
ここで、はじめてジュニアが笑顔を見せた。
魔物には必ず「核」がある。どういう形であれ、魔物は命尽きると姿形が消滅する変わりにこの「核」が残される。「核」にはその魔物についての全ての情報が刻み込んであり、それがどんな性質で、どういう種類なのかといった事が色々と分かるのだ。外見は単なる石ころのようで、しかし「核」についての知識がないと判別は難しい。
退治屋にとってこの「核」が主な収入源になっていた。換金するのに「核」は重要な証拠になる。もしもそれが賞金つきの魔物であれば、「核」を渡して賞金と引き換えてもらう。賞金つきでないものに関しては、魔物のレベルによって金額が決められ、各自自由に取引ができた。
「核」は様々な使い道があるため、その筋の商人などには換金よりも数倍もの高値で売れたりもする。また、アッシュ達は時々キキへの土産に「核」を持ち帰ったりしていた。術薬の貴重な材料にもなるからである。
今回のように、標的の数が多い時は気兼ねなく持ち帰ることが出

来る。ジュニアはキキのためにもうすでに２０個近くを袋に詰め込んでいた。残りの何百という「核」は、それを全部足してもオリジナルのものには勝らないため、２人は手をつけずに置いて行く事にした。
騒ぎが収まった頃を見はからったのか、家の中から依頼者の家族３人が出てきた。びっくりしたやら嬉しいやら、という表情で２人に頭を下げた。
「あ、ありがとうございました。これでまた安心して生活が出来ます」
依頼主である父が鍋を片手に言う。
ジュニアは３人がなぜ鍋やらリコーダーやらを持っているのか奇妙に感じて、思わず顔が引きつる。アッシュは慣れたもので、その姿にもう動じもせず、３人に忠告した。
「おっさん、もう魔物を飼おうなんて考えるんじゃねぇぞ。可愛くても魔物は魔物だ。魔物は人間がどうこうしようと思ったって、決して意のままにならねぇんだ。今回の事でよく分かったろ？」
「はい。もうこりごりです。飼うのは犬か猫にかぎりますね」
あははと笑って父親が言った。
その時、「あ！」と何かを思い出したようにアッシュが声を上げた。
「そういやちょっとだけ家壊しちまった。魔術で直せるけどちょっと時間かかるな・・・・・・」
そう言って、アッシュはジュニアに意見を求めた。
ジュニアは少し笑って、家の周りに積み上げられている「核」を指差す。
「この大量の核を置いていきます。これだけあれば修理しても余るくらいの金になりますから」
残りの「核」はもともとどちらでも良かったが、ジュニアはそれらしくこの家族に告げた。アッシュもナルホド、と１人頷いている。
それを聞いて驚いたのはこの家族の方だった。

「ええっ！？本当にいいんですか、こんなに？退治してもらっておいてそんな・・・・・・」
ジキアにとってはたいした金額でなくても、一介の農民にはけっこうな大金だ。父親が戸惑うのも無理からぬ事だった。
そんな3人に笑顔を向けると、
「そいじゃ」
と言って去ろうとした。
その時パシャッと音がして、小さく光がはじける。
そちらに目をやると、娘がカメラで2人の写真を撮っていた。2、3枚撮り終わるとレンズから顔を上げ、2人に笑いかける。少し照れた様子がなにげに可愛い。娘の行動に戸惑いつつも、2人が苦笑していると、娘が突然叫んだ。
「ありがとうございました！私お2人の大ファンになりました！！」
車に乗り込む2人にぶんぶんと手を振る。それには手を上げて答えておいて、アッシュとジュニアはこの少し風変わりな依頼者の家を後にした。
彼らジキアは、今日もまた無敗記録を更新し、毎回確実にファンも増やしているのであった。

第二章：リゼ＝ルクローム１

「あッ、アッシュじゃない！偶然ねぇ！」
一人の女が、街を歩いていたアッシュに走り寄った。アッシュは特に感情の変化も見せず、淡々とした態度で立ち止まる。
「エレナ。こんなとこで何してんの？」
「何って、友達とショッピングに行くのよ。ホラ」
エレナの指差す方向に、きゃぴきゃぴとした感じの女２人がにやにやとこちらを見つめていた。アッシュは顔見知りではなかったため、ふぅーんと気のなさそうに呟く。
エレナがそんなアッシュの態度に少しむっとした様子で腕を組み、アッシュを見上げた。
「もう！会うの１週間ぶりなのに相変わらず素っ気無いのね！それが“彼女”に対する態度なの？」
「変わんないだろいつもと。・・・・・あれ？お前髪型変わったんじゃない？」
ふと、アッシュが言った。確か以前はストレートボブだったのが、今はくるくるのパーマがかかっている。
そんな言葉にエレナはさらに顔をしかめた。
「バカ！これにしたの１ヶ月も前よ！！この間も言わなかった？！」
彼女の剣幕に焦る様子もなく、「そうだったっけ？」などと首を傾げる。エレナは、はあ、と一つため息を吐くと、待たせている友人を気にするように時計を見やった。
「アッシュはこれから何かあるの？」
「メシ食う」
「ああ、そうなんだ。私らもう食べちゃったのよね。じゃあ、明日は何かある？」
「んー、明日？今んとこ何も依頼入ってないはず・・・・・多分」
「多分て何よ。じゃ、明日デートしましょ！朝１０時にフラワー公

園で待ち合わせね！分かった？忘れないでよ？絶対よ？――――はい、復唱ぉ！！」
「えーと・・・・・・１０時にフラワー公園？」
「あ・し・た！！明日が重要でしょ！もおっ！絶対約束よ？！じゃあ友達待ってるから行くね」
　気圧されるような勢いでデートの約束まで取り付けられ、去り際アッシュに唇を軽く合わせて走り去って行った。頭を掻きつつその姿を見送る。とたん、おなかが悲鳴を上げた。
「あーハラへった。メシ食いてー」
　彼女と久しぶりに会った感情すらいつもと変わらないアッシュに、別れの余韻などないのであった。そのまま真っ直ぐに歩き出す。
　エレナとは、何だかんだありつつ半年ほど付き合っている。出会いはアッシュの行きつけのバーで、新しくアルバイトとして入ってきたエレナがアッシュに一目惚れし、１週間もしないうちにアッシュに告白をした。その時のアッシュは前の彼女と別れて３ヶ月で、エレナを嫌いなわけでもなかったのでＯＫしたのだった。
　しかしエレナに対しても、相変わらず恋愛と呼べるような感情が湧かないまま、気付けば半年という年月が過ぎていた。デートの約束はいつもエレナから。しかもアッシュがその約束通りに待ち合わせに現れた事はない。
　２人の関係は一般的に言えば深い関係にあるが、アッシュは体の求めるままにエレナを抱いた。ただアッシュも、そうして「好き」というものを探していたのかもしれなかった。現に、彼女以外は絶対に抱いたりしない。彼女がいない期間があまり多くないという事を除けば、誠実だと言えてしまうのだろう。いずれにしろこの様な状態で半年も続いたという事は、エレナの辛抱強さに尽きた。
　しかし、そんなエレナも最近ちょっとした事でアッシュに食ってかかるようになった。そんな不穏な空気が漂っているのを気にするわけもなく、アッシュは今日もマイペースなのだった。
「どこ行きゃいいかな・・・・・・あんまりこっちの方までメシ食

いに来ねぇもんなー、わかんねぇな。エレナに聞いとけば良かった」
アッシュは午前中にピグモ退治を終えたばかりで、死にそうにお腹がすいていた。途中までジュニアと一緒だったが珍しく道が渋滞しており、アパートまではもう少しかかると言うのでアッシュだけ車を降りて食べに行く事にしたのだった。しかし降りた場所が悪かったようで、なかなか店が見つからずにいた。
この辺りは街の繁華街から少し離れた郊外にあたり、人も車も比較的穏やかな感じである。エレナはこの近くに住んでいるようだ。
———もちろん、アッシュには覚えがなかったが。
歩きつつ、さらに大きくお腹が鳴った。アッシュは限界だ、と言うようにお腹の辺りを押さえて顔をしかめる。そしてきょろきょろと辺りを見回し、一人の中年男に声をかけた。
「あのー、この辺にメシ屋ってないですか？」
「ああ？あるぞいっぱい」
「え！？うそっ！！全然ないじゃん！」
意外な答えに戸惑っているアッシュを見て男は笑った。
「まあ土地のモンじゃない奴にゃあ分かりにくいがな。こっから一番近くてしかもうまい店教えてやろう」
気のいい男は簡単に行き方を説明し終わると、意味ありげに、にやっと笑う。
「この店は味以外でも評判でなあ！」
ポン、とアッシュの背中を軽く叩いて、男は去って行った。
「？？なんだー？何かパフォーマンスでもしてくれる店なのか？」
考えたが思いつくはずもなく、とにかくこの空腹を何とかしたい一心でアッシュは走って店を目指した。
５０ｍほど真っ直ぐ行くと、左に曲がって右手側の３軒目。角を曲がった時点でアッシュはどれだかすぐに分かった。店の前には４、５人ほど人が並んで順番待ちをしていたからだ。その様子を見たとたん、がっくりと肩を落とす。とりあえずは並んでみるが、いつ入れるのかは皆目見当がつかなかった。

そわそわと店の中の様子をのぞこうとしたアッシュは、前に並ぶ男たちが突然ガラス張りのドアにへばりつく勢いに押し戻され、軽く体制を崩した。アッシュは驚いて順番待ちの客の行動に目を見張る。

「な、何だ？・・・・・・は！さっきのオヤジが言ってた評判のパフォーマンスか！？」

アッシュの中ではもうパフォーマンスと決めつけられているようで、頭の中でアクロバットな様子を思い浮かべつつ同じ様に覗こうとするが、前列の男たちで大きな壁が出来上がっていた。

後方でうろうろしているうちに男たちがもとの列をなし始めた。どうやらアクロバット・パフォーマンスは終わってしまったようだ。後味の悪いアッシュは前列の男に話しかけた。

「あの、中で何があるんですか？」

男はしまりのない顔で振り返り、親指で店の方を指し示した。

「知らねぇのか？“リゼちゃん”だよ！ここいらじゃ有名な美人で、しかも良い子なんだこれが！ここの看板娘さ！」

「“リゼちゃん”？？アクロバットじゃねぇの・・・・・・」

明らかに興味を無くしつつも、ふーんと頷いておく。

男はうきうきと話を続けた。

「俺もこの店に来るのは2回目なんだ。なかなか外で食わしてくんねぇからな、うちの母ちゃん。俺も常連になって“リゼちゃん”に覚えてもらいてぇなあ！あの子はこんなオヤジでも笑顔でやさしく接してくれる、本当に良い子なんだ！俺がもう２０くらい若けりゃ嫁さんにしてぇよ！」

「・・・・・・」

中年オヤジにここまで言わせる“リゼちゃん”はただ者ではないと感じつつも、やはりアッシュのもっぱらの関心事は、早く空腹を満たす事であった。

それから待つこと約１５分。

食べ終わった客が５、６人連れ立って店を出て来た。入れ替わる

ようにアッシュ達は店に入る。すぐさまアッシュは店の右隅の2人がけのテーブルに、入り口を背にして座った。
店の中はそれほど広くなく、しかし狭苦しい感じはしない。店の一番奥にはカウンター席があり、その奥が厨房のようだ。カウンター席は常連だらけなのか、盛り上がっている。
そんな周囲の様子に特に気を止めるふうもなく、アッシュはテーブルのメニューにかじりついていた。
「う～一番早くてうまいのってどれだ？」
一人呟きながらも迷っているアッシュに、かけられた声があった。
「もうご注文はお決まりですか？」
女の声。
そしてそれは明らかに店の者の声。
アッシュは無意識にそれだけ理解すると、「ええと」と続けた。
「俺ハラへってんだ・・・・・とにかく早く食いてぇんだけど、どれがいいかな？」
メニューとにらめっこしながら逆に質問するアッシュ。
注文をとる店の女はちょっと笑ったようだった。
「じゃあこの“スタ丼”どうですか？うちのお勧めですよ！それに一番早いと思います」
女は細くて長いキレイな指で、アッシュの眺めるメニューの一番上にある文字を示しながら言った。
アッシュは“早い”という言葉に満足し、メニューから顔を上げた。
「じゃあそれ！」
そう言って女の方をはじめて振り返り、女の顔を見た。
とたん、アッシュは固まってしまった。
女はそんな客（アッシュ）の変化に気付く風もなく、手もとの用紙にさらさらと注文らしきものを書き込んでいる。
「――――・・・・・・」
アッシュはそんな女をまじまじと見つめていた。

（似てる・・・・・・似てるよな？）
女はアッシュと同じくらいか年下かと思われる若い子で、栗色の髪は軽くウェーブし背中の真ん中辺りまで伸ばされている。くりっとした大きな瞳が、今はふせられており、長いまつげが色っぽさを加えた。全身細身ですらっとしているが背はそれほど高くない。腕などはアッシュが力を入れて握ればすぐにでも折れてしまいそうな、そんなか弱さを感じさせた。
ここまでで、アッシュはこの女が評判の娘“リゼちゃん”だと分かった。しかし、それだから驚いているのではない。アッシュが言葉を発せずに見つめていると、“リゼちゃん”が顔を上げ、当然ながら視線がぶつかった。
（！！似てる・・・・・・“リっちゃん”に・・・・・・！！）

第二章：リゼ＝ルクローム2

そうなのだ。
最近毎日のように夢に見る初恋の女の子“リっちゃん”に似ているのだ。
確かに夢の中では、記憶にある姿はまだ幼い少女である。何が似ているのかと具体的に聞かれれば困ってしまうが、いわゆるアッシュのは直感だった。心の奥底が叫んでいる――――言葉では言い表せない胸騒ぎだ。
アッシュは、きょとんとしている“リゼちゃん”から目が離せないまま、一つ息を呑んだ。
「リ・・・・・・・リっちゃん・・・・・・・・？」
ざわざわと心が波うつ中、しぼり出すようにアッシュがそう呼びかけた。「はい？」と、“リゼちゃん”は意外にもすんなりと返事をしてみせる。
それにはじかれるように、アッシュはガタッと椅子から立ち上がるとその細い手首を掴んだ。
「本当にリっちゃん？本物？何でここにいるの？――――」
「あの・・・・・・・あなた・・・・・・・・？」
“リゼちゃん”は浴びせられる質問にも、アッシュ自身の事さえ何だか分からないといった様子で、戸惑いつつも笑みを浮かべている。
この2人の変化に店の中も少しざわつきだしたが、皆様子を窺っているのか、仲裁は入ってこないでいた。
しかしアッシュにはそんな周囲の様子など一切気になりはしなかった。ただただ目の前のもしかして“リっちゃん”であるかもしれない女だけしか見えていない。
「あの・・・・・・・どこかでお会いしました？」
「俺・・・・・・・覚えてないかな？俺ッ・・・・・・・――――」

名前を口にしようとしたアッシュは、しかし一つの声に遮られてしまった。
「リっちゃん！」
それはアッシュの背後――――店の入り口からかけられた男の声だった。
半分叫ぶような音量に、店中の意識がそちらに向けられる。アッシュも驚き、初めて周囲の様子に意識が戻った。
その次の瞬間、アッシュが掴んでいた女の手がするりと抜ける。
「アっくん！！」
（――――え？）
アッシュは男の声のした方――そして“リっちゃん”の向かった方――背後を振り返った。
すると、“リっちゃん”はその男に抱きついて、しかもその男を「アっくん」と呼んでいるではないか。
「――――」
あまりの事に再び声をなくし、アッシュはそんな2人の様子を呆然と見つめていた。
（あれ・・・・・・？）
それまで確信だった思いがアッシュの中で音を立てて崩れ落ちていく。しかしどこかで腑に落ちないまま、人違いだったのかもしれないと戸惑うアッシュに、“アっくん”なる男が突如鋭い眼光を向けた。
“アっくん”が“リっちゃん”の肩を抱いたまま、2人でアッシュの前に立つ。
「お前何者だ？リゼに何をしようとした！？」
今にも掴みかかられそうな形相に、アッシュは慌てて首を横に振る。
「いやっ・・・・・・ごめん！人違いだったみたいで・・・・・・」
アッシュの言葉を疑うように睨んだままの“アっくん”をリゼがなだめるようにして2人の間に立った。

「アっくん、私何もされてないわ。ほら、もしかしたら本当に会った事あって、私が忘れてるだけかもしれないし」
そう言うと今度はアッシュに向き直る。
「あの、あなたのお名前は？」
アッシュは真っ直ぐな瞳になぜか視線を合わすことが出来ず、おずおずと答える。
「えっと・・・・・・アシュディアーナ、ってゆーんだけど・・・・・・」
その名を聞いたとたん、店中がざわっとざわめきだした。
“アっくん”なる男は、その中の誰よりも驚き、絶句していた。見開かれた瞳が複雑に揺れている。
しばらく3人とも沈黙した後、一番はじめにリゼが口を開いた。
「アシュ、ア？えーと、長い名前ね・・・・・・でも、ごめんなさい、やっぱり知らないみた――――」
「アシュディアーナ＝ルーヴィン！！お前が――――！！」
リゼの言葉をさえぎり、半ば叫ぶように男が言った。
アッシュ自身は、よくあることなのでそれほど男の反応に驚きはしなかったが、リゼが目を丸くして男に振り向く。
「アっくん知ってるの！？知り合いの人？」
問いかけには答えず男は微かに体を震わせる。その表情は青ざめているようにも見えた。
そんな男の様子にさすがのアッシュも怪しく思うが、いくら考えてみても男の方には一片の記憶のかけらさえ見当たらない。疑問符を浮かべつつ無言でいると、男はゆっくりと話し出した。口の端がぎこちなく歪められている。
「・・・・・・いや、ほら・・・・・・・・あの有名な天才魔術師だよ、チームジキアの・・・・・・。前に話してただろう？」
その言葉にいち早くリゼが反応し、花が咲いたかのような笑顔をアッシュに向けた。その頬は少し紅潮しており、はた目にもミーハー的反応だとすぐに分かる様子である。

そんなリゼを見つめ、男が一つ息をつくと、もう一度アッシュに顔が向けられた。しかし、その表情のどこにも、先程までの恐怖ともとれる戸惑いはもうなかった。代わりに、アッシュには意味のとりにくい不敵な笑みが浮かべられている。

アッシュは今だどう言っていいのかも、そのタイミングさえ掴めないまま無言で立ち尽くしていた。

すると男が大仰な動作で突如リゼを抱きしめる。

「リっちゃん、それじゃまた後で」

男の動作に店がざわつく中、言い終るが早いか男はリゼに熱くキスをした。

「！」（リゼ）

「！」（アッシュ）

「！！！」（客）

途端、店中が2人をはやし立てるように大騒ぎになった。黄色い声が飛び交う中、リゼはもう魂を抜かれたようにボーッとしている。アッシュの目の前でのキスを終えると、男はまた、にやりとアッシュを一瞥し、店を出ていった。

「？？？」

アッシュはもう何が何だか訳が分からず、ただ立ち尽くしていた。混乱する頭の中で、それでも分かった事は、この目の前の女の子はリゼという名前で“リっちゃん”と呼ばれていること。

それからあの男は“アっくん”と呼ばれていて、“リっちゃん”とは恋人であること。

それから、この“リっちゃん”は、自分の知っている“リっちゃん”ではなかったということ――――

「アっくん～」

今だ夢の中にいる状態のリゼが、呟くように言った。

アッシュは、過去の自分の体験があるだけに、第三者として2人のあの呼び名を聞くのは妙な感じだった。しかし、この広い世の中“ア”のつく男と“リ”のつく女などは数え切れないほどいる事を

思えば、これはあり得ない事でもないのだ。
（あるんだなぁ・・・・・こんなことって・・・・・）
そう納得しておくが、今のアッシュにはなんと言ってもタイミングが良すぎた。心の奥の奥底で引っかかっている思いを、このごろ毎日夢で見ているところだったのだから。
（こんな偶然あるんだなぁ・・・・・）
店の中が元のようなざわめきに落ち着いた事に気付いたアッシュは、さらにたとえ様のない空腹である事にも気がついた。
へなへなと、色んな意味で椅子に座り込むと、頭からテーブルにふせってしばらく唸っていた。

＊　＊　＊

店を出て大通りに控えていた真紅の高級車に体を滑り込ませ、勢いよくそのドアを閉じる。　運転席には一人女が座っている。
「戻るの早すぎない？食べて来なかったの？」
その質問には答えずに、嘲笑じみた笑みを浮かべ女を見た。
「何かあったの？」
女は多少気味が悪いといったように目を細める。
「あいつだ、アッシュ・・・・・・まさかこんな所で会おうとは！」

第二章：リゼ＝ルクローム２（後書き）

作者・露露より。
読んで頂いている方々、本当にどうもありがとうございます！もしも何か感じるところがありましたら評価と一緒に感想なぞ頂けると、作者が奇妙な小躍りで喜びを表現します（迷惑っすか、そうですか笑）
あ、勿論、誤字脱字・文章のおかしなところの指摘も頂ければ有難いです。
このジキア、どうぞ楽しんで頂けていますよーに！

第二章：リゼ＝ルクローム3

「アッシュ？てそれ誰よ？ちゃんと話してくれないと掴(つか)めないわ」
女は、肩で切り揃えられたストレートの黒髪を揺らし、濃い赤で彩られた唇に煙草(タバコ)を押し当てる。高級そうなバッグからライターを取り出し火を点けた。ふぅっと煙を吐き出す。
「前に話したあの胸くそ悪い魔術師だよ、マリータ」
「ああ、人気を奪われたっていうあの昔話の？ホント、くだらない事に根を持つのね、“アルバ”」
マリータが呆れ顔でアルバを横目で見た。
幼い頃の話だ。当時近所の子どものリーダー的存在として仰(の)け反(ぞ)り返っていたアルバは子ども間権力の絶頂にいた。命令は絶対。何でも自分の思う通りになった。その、胸くそ悪い魔術師が現れるまでは。
ある日、突如やって来た少年は、アルバから見れば飄々（ひょうひょう）として気に入らなかった。当然自分の立場を理解させるため、決闘をしなければならない。そして勝てる自信がアルバにはあった。負けることなど考えもしなかった。
そんな自信の塊のようなアルバの決闘を受けたばかりか、飄々とした少年はいともあっさりと勝利し、計らずもアルバを地の底へと突き落としたのだ。
これまでアルバの横暴に耐えてきたいわゆる子分たちは、一人残らずアルバを見捨てた。見た目もそう悪くなかったアルバへ好意を寄せていた女の子たちも、もっと見た目の良いその少年へと例外なく心変わりをした。
これまでのものが友情だと思い込んでいたアルバには皆の態度は信じ難かった。だから、確信したのだ。　これは全てその少年の策略に違いないと。
復讐を心に誓い、その禍々（まがまが）しい名前を記憶にやき付

ける―――アシュディアーナ＝ルーヴィンという長ったらしい名を。
マリータも何度聞かされたか分からない、アルバ曰く人生最大の屈辱というくだらない話のオチは、その少年がしばらく後にまたどこかへ引っ越して行き、権力が戻る、というどちらかといえばハッピーエンディングで決着していた。
しっかりと耳を傾けている“ように見える”マリータが、思いのほか冷めた態度でいることには話の主人公殿は気がついていない。
「で？“お嬢様”には会って来たわけ？」
「ああ、いつもの抱擁と、紳士の笑顔でね。そこに奴がいたのさ。かつて、俺から全て奪っていきやがった、憎々しいアッシュが！俺は目を疑ったよ」
「おおげさねぇ・・・・・・ま、出会ったのは分かったけど、それがどうしたって言うのよ」
アルバは口の端を歪め笑うと、マリータに向き直った。
「あいつはリゼの事忘れちゃいない。リゼがあそこまで信じてた奴だ、アッシュも同じさ、あの表情はそうだった。だから俺はあいつの前で見せ付けてやったのさ、“リゼは俺のものだ”ってな！はっ！！爽快だ！！ざまぁみろアッシュ！！」
仰け反って勝ちを誇るアルバにさほど興味もなさそうに、マリータは短くなった煙草を灰皿に押し付けた。
「どうでもいいけど、お嬢がその彼と会った事で記憶が戻ったりしないでしょうね？彼が本当の“アっくん”なんでしょ？バレる前に早く決着つけてちょうだい。私はお嬢の財産さえ手に入ればそれでいいんだから」
マリータは車のキーを挿し込み、エンジンをかけた。心地よい振動が体を伝わる。
「それもそうだな・・・・・・そろそろお遊びは終わりにするか。君とも、早く結婚したいし・・・・・・マリータ」
アルバはマリータに顔を近づけ、唇を重ねた。何度も口づける。
しばらくして、二人を乗せた赤い高級車が真っ直ぐ走り去って行

った

＊　＊　＊

もう日も落ちる頃、アッシュは家にたどり着いた。昼食をとったあの町からはある程度距離があるが、何となく歩いて帰って来てしまった。道に迷ったりもしたので必要以上に疲れていた。

キキとジュニアはアッシュの帰宅を心待ちにしていたのか、扉が開くなり「お帰り！！」と出迎えた。そしてすぐにダイニングにアッシュを連れて行くと、三人は向かい合って座る。

「待ってたのよアッシュ！朗報よ！！」

いの一番にキキが口を開いた。仕事の話という事はアッシュにも見当はついた。

「朗報ってことは、伝説の魔物でも現れたのか？」

「ビンゴッ！！現れたのよ。今日隣町で目撃されたらしいわ」

キキの言葉にアッシュは眉をしかめる。

「目撃された？それだけ？」

期待外れな反応だった。キキはつまらなそうにアッシュを軽く睨む。

「それだけって・・・・・・すごい情報じゃない！もっと驚いてくれてもっ――――」

「伝説の魔物は町を襲わなかったのか――――という事だろう、アッシュ」

ジュニアが口を挟んだ。

「？」

キキは言葉の意味を掴めず首を傾げる。

続けてアッシュが口を開いた。

「伝説の魔物は気まぐれに出てきては町を、人間を襲う。それが頻発し出したのが七年前だ。一年間にいくつもの町や村がやられた、それは知ってるだろ？」

「うん、覚えてる。私たち魔術学校の三年生の時よね？教授たちが大騒ぎだったもの」
「だけど、ある町を壊滅状態にしてまたぱったりと姿を見せなくなったのもその時だ。以来七年間、姿を現さなかった。そして今回の目撃証言。でも魔物は町を襲わなかった。もしもその目撃証言が本当だとしたら、魔物は何のために姿を現したんだ？町を襲わないなんて、あり得ない」
「・・・・・・同感だ」
ジュニアが答えた。キキは腕組みをして、眉にしわを寄せている。
「そう言われるとその通りなんだけど・・・・・・う～ん、でもでも、今回の情報結構しっかりした筋から直接仕入れたし、それにここ最近伝説の魔物が目撃された近辺でやたらに中級の魔物が換金されてんのよ。偶然にしてはちょっと出来すぎてるでしょ？」
「・・・・・・そうだなぁ」
アッシュは大きく息を吐くとソファの背に全身をあずけた。
伝説の魔物はその強大な魔力ゆえに自然と中級以上の魔物を引き寄せてしまう。それらの魔物の所在が伝説の魔物の居場所を教えてくれるのだ。そして中級以上の魔物だけではなく魔物全体が影響を受け、凶暴化する。それが一般的な伝説の魔物に関するバロメータとなっているのだった。
今回はキキの言うように信憑性は高い。しかし、伝説の魔物が町を襲わなかったという事がアッシュの中で引っかかっていた。
ジュニアはいつになく神妙な表情のアッシュを見つめていたが、ふと、キキに向き直る。
「キキ、コーヒー淹(い)れて来てくれないか？」
「え？うん、そうね。ちょっと落ち着くのもいいわね」
そう言って、キキはキッチンに向かった。
一瞬の沈黙の後、ジュニアが静かに口を開く。
「アッシュ、“リシュディル”の事か？伝説の魔物が町を襲わなかった事が気になってるんだろう」

「・・・・・・ん、ちょっとな。今回キキの情報は信頼性がありそうだし、だとしたら、町を襲わなかった魔物の目的は一体何なんだ。あり得ないのはそこだ。魔物の意思じゃない――――第三者がいる」
「伝説の魔物を使ってるって言うのか？それこそあり得ないだろう？」
魔物を自分の思い通りには絶対に出来ない。そう言ったのは他でもない、アッシュだった。　今日のピグモ退治で、アッシュが依頼者の家族に念を押したのだ。
「あり得ないさ、普通なら。だけどディルは・・・・・・あいつは特別だった。前に話しただろ？あいつは魔物の感情を読み取る事が出来る。それぞれの魔物に合わせて自分の波動を変えていく事で上手く魔物を利用していた。そんな能力を持っていたんだ。ディルは伝説の魔物を追うと言って消えた。今回の情報が本当なら、ディルが背後にいる――――そんな気がする」
「まぁ、そう考えれば今回の奇妙な行動も説明がつく、か。目的は分からないままだが・・・・・・」
ため息まじりにジュニアが呟いた。
アッシュは落としていた視線を今度は天に向け、嘲笑を浮かべて「嬉しいんだか悲しいんだか・・・・・・複雑だな」と零した。その時、コーヒーを持って返ってきたキキがすかさず聞き返す。
「何が“嬉しいんだか悲しいんだか”なの？何の話？」
興味津々と言った感じで食いついてくるキキに、アッシュとジュニアは顔を見合わせた。そして目の前に出されたコーヒーを一口飲んだアッシュが顔を上げる。
「苦(にが)っ！ほらジュニア、言っただろー？淹れてきてくれんのは有難いけど、キキのはいっつも苦過ぎんだ――ってことを話して――だっ！！」
「いっぺん死ね！！」
キキの鉄拳を浴びたアッシュは、頭を抱えてソファに沈み込んだ。一部始終を見届けたジュニアが、一言「バカ」と呆れ顔で呟いたそ

の声は、どうやらもう届かなかったようだ。
「で？伝説の魔物情報に対する結論は？」
まだ収まらないキキの上ずった声に、珍しく考えあぐねたジュニアの答えは。
「・・・・・・様子見、かな」
「ふぅーん、まぁいいけどっ」
「・・・・・・」
すっかり日の落ちきった窓の外は、静かな夜の闇が広がろうとしていた。

第二章：リゼ＝ルクローム４

（アっくん・・・・・・）
（リっちゃん！）

あどけない少女はアッシュの大好きな笑顔を浮かべ、そこにたたずんでいる。
（リっちゃん、もう離れないでいよう！ずっと一緒にいよう！）
なぜかアッシュは必死に叫んでいる。二十歳の自分が幼い少女には不釣合いだ。アッシュは手を握ろうとした。しかし、意外にも少女はそれを拒んだ。戸惑うアッシュに少女は悲しく微笑む。
（あなたは、だれ？）
アッシュが瞬きをした瞬間、そこにはもう少女の姿はなかった。
（アっくん！）
その声にはじかれるように振り返ると、そこには“リゼ”がいた。アッシュは自分を呼んだのだと思ったが、リゼは隣にいる男を見つめていた。
（リっちゃん？リっちゃんなんだろ？）
アッシュの呼びかけにリゼが振り向いた。しかし、そこに笑顔はない。
（そうよ、私よ。そして彼が“アっくん”・・・・・私の大好きな人）
（何言ってるんだよ・・・・・“アっくん”は俺じゃないか。俺が“アっくん”だよ！リっちゃん！！）
必死に訴えかけるが、リゼは表情一つ変えずに男の腕に自分の腕を絡ませ、どこかへ去ろうとする。アッシュはさらに必死に叫んだ。
（リっちゃん！待ってくれよ、俺だよ！思い出して！リっちゃんっ――――！！）
アッシュの叫ぶ声もむなしく、リゼは振り返ることなく遠ざかっ

ていく。アッシュはとにかく必死だった。
（――――っ行くなっ！！）
「――――っ！！」
闇に腕を伸ばし、アッシュは飛び起きた。呼吸が激しく乱れて、額には汗がじんわりと滲んでいる。しばらく夢の余韻（よいん）に意識が混同していたが、そこが自分の部屋だと分かるとやっと現実を認識する。
「・・・・・・ゆめ、・・・・・・・」
一気に体の力が抜け、背中からベッドに倒れこんだ。大きく息を吐く。
「なんて夢見てんだ」
自分自身に毒づく。夢のせいなのだろう、未だ心の中は不安と焦りと切なさが広がっている。余裕のない表情でアッシュは手の届かない位置に置かれた目覚し時計に視線を移した。短針が４の数字を指しているのが目に入る。
「四時か・・・・・・」
すっきりしない気持ちのまま、アッシュは体を起こした。ベッドから抜け出し窓を開けると、朝のひんやりとした空気が流れ込んでくる。アッシュは気持ちの悪い気分をいくらか回復し、そのまま外に出る事にした。ジャージを着込み、静かにアパートを出る。
夜明け前の暗い道をゆっくりと歩き出す。歩きながら、アッシュは先程の夢について考えた。
「だいたい、“リゼちゃん”が何で出てくるんだ・・・・・・昨日人違いだって分かったはずだろ」
まるで自分に言い聞かせるかのように呟く。
「世の中自分に似た奴が三人いるって言うしな。そっくりさんに決まってる」
昨日の“リっちゃん”“アっくん”事件を説明するには、そう思うしかない。それにいくら似ていると思ったところで、アッシュが知っているのは十年も前の彼女である。どのように成長したかは想像でしかないのだ。昨日のも単なる直感でしかない。それよりも一

番問題なのは――――

「俺なんであんな必死んなってんだ。叫んだりとか、かっこわりー」

夢とはいえ無意識下の自分を見せられているようで、アッシュは強引に否定できるような言い訳を考えている。

「まず間違ってるのは、“リゼちゃん”は俺の知ってる“リっちゃん”じゃあないこと。それに俺は別にリっちゃんが好きってわけでもないし、あれはもう昔の事なんだから今さら！」

アッシュの独り言は徐々にテンションが上がっていき、はたから見れば十分に怪しい人である。といっても、まだ薄暗い夜明け前の道を出歩いている人はアッシュ以外に見当たらない。　アッシュの声は更にボリュームを増す。

「――――というわけで結論！俺があんな夢を見るのは間違っている！！」

やけに力を込めて言ってみるが、何故かむなしさしか残らない。アッシュはため息をついた。

（つっても、実際そんな夢見たんだよ、この俺はぁぁ）

素直に考えればすぐに答は見つかりそうなものだ。しかし、アッシュはどうしても自分を守ってしまうのか、自分の直感を信じたくはなかった。期待するのが苦手なのだ。それは裏を返せばそうあって欲しいという強い願望に他ならない。昨日出会った“リゼちゃん”が“リっちゃん”であると。

それを認めたくないのは、これもまた昨日目撃した現実だった。“リゼ”には恋人がいた。しかも、自分のことは知らないと言う。アッシュにとってそれは彼女が“リっちゃん”だった場合、受け入れがたい現実であり一種の裏切りなのである。だから根本を否定すれば傷つかずにすむ。今朝の夢はそんなアッシュの心の葛藤から生まれたものだった。

――――というような事は、あくまで本人は気付いていないのだが。

「しっかりしろー、“ジキア”のアッシュ！！」

パンパン、と自らの頬を両手で叩いた。「おしっ」と気合を入れ

なおし、はた、と歩みを止める。
「あれ？ここどこだ？」
気付けば見慣れない場所である。どうやら考え事をしながら歩いていたため、散歩という距離ではなくなっているようだ。しばらく辺りを見回していたアッシュは、何とそこはリゼのいる店がある小さな路地の入り口である、ということに気付き、愕然とした。
「こんなとこまで・・・・・・ていうか何でここ！？」
グッドタイミングなのかどうなのか、ある意味アッシュは自分が恐ろしかった。路地の入り口から、寝静まっているリゼの店を見つめる。
「リっちゃん、か・・・・・・」
アッシュがそう呟いた時、ガチャッと店のドアが開き、何と中からリゼが現れた。アッシュは飛び上がるほど驚き、そのまま凍り付いてしまう。リゼは黒いゴミ袋を抱え、あろう事かアッシュのいる大通りへと歩いて来る。当然のように二人の視線がぶつかった。
「あっ、びっくりした・・・・・・おはようございます。・・・・・・あ、え？ええ？あの、昨日の魔術師さんじゃありませんか？」
アッシュの目の前まで来るとゴミ袋を地面においた。
アッシュはどうしようもなくなり、ぎこちなく笑う。
「お、おはようございます」
「こんなに朝早くから、トレーニングですか？」
「え？あ、まぁ」
「じゃあこの近くに住んでらっしゃるんですね！」
「えーと、まぁ、そんな感じです」
アッシュは話をしながら、やはり彼女が“リっちゃん”ではないかという気がしてならない。話し方や仕草、それに何より、笑顔がアッシュの記憶をくすぐるのだ。
リゼはよいしょ、とゴミ袋を持ち上げると、大通りをはさんだ対面にあるゴミ置き場に向かって歩き出した。ゴミが重いのか、足取りがふらついている。

（あぶなっかしいな）
アッシュはとっさに何事か呟き、右手をパチン、と鳴らした。
「！」
するとゴミ袋はリゼの手を離れ宙を飛び、対面にあるゴミ置き場にストン、と収まる。リゼは呆然とその様子を見つめていたが、はっとアッシュを振り返った。
「もしかして、今の魔術師さんが？」
「普段はこんなことに使うと仲間がさ、体動かせってうるさいんだ。秘密な」
アッシュは舌を出して笑ってみせた。つられてリゼも笑い声をたてる。
「すごいわ！本当に魔法みたいなの、使えるんですね！ゴミ出し手伝って頂いてありがとうございました」
笑顔でアッシュに答える。アッシュはその笑顔に、一瞬あの大好きだった少女が重なって見え、どきっとする。何となく視線をはずし動揺を隠そうとした。何か他の話題をと、アッシュは思考回路をフル回転させる。
「あー、あの、昨日のあの人は、彼氏？」
アッシュは言ってしまってから何て事聞いてるんだと後悔した。しかし、リゼは顔色一つ変えず首肯する。
「はい。彼は、私の救世主なんです」
「救世主？」
「そうです。私は、彼がいなかったらどうなってたか・・・・・・彼が――――アっくんが救けてくれたんです」
リゼの瞳はどこか遠くを見つめているかのようだった。悲しい色で溢れている。アッシュにはリゼの言っている意味は理解出来なかったが、何故か、居た堪れない気持ちになった。
「ごめん・・・・・・」
思わず、そう呟いていた。「え？」と、リゼが不思議そうにアッシュを見上げる。

「あ、いや、俺何言って・・・・・・ごめんっ、何でもないんだっ」
アッシュの挙動不審ぶりに、くすくすとリゼが笑い声をたてる。
「おもしろい人！」
「はは・・・・・・」
二人の間にはいつしか穏やかな空気が流れていた。ふうっ、とアッシュは息を吐く。
「君の彼氏、名前何ていうの？」
「アルバです。だから“アっくん”」
「そっか。ん～・・・・・・じゃ俺も“アっくん”だな。アシュディアーナだから」
「あは、本当！」
（・・・・・だめか）
無邪気に笑うリゼを見て、アッシュは苦笑いを浮かべた。やはり人違いなのだろうか？

第二章：リゼ＝ルクローム5

「魔術師さんて、他にどんな事が出来るんですか？」
「ん？魔術の事？う～ん、いろいろ出来るけど」
改めて言われるとなかなか列挙しにくいものである。アッシュが悩んでいると、答えるよりも先にリゼが口を開いた。
「“アっくん”も、」
「え？」
突然の呼び名にどきっと胸が高鳴る。構わずリゼは続けた。
「“アっくん”もね、昔、魔法みたいなの出来たんですよ」
「彼も魔術師なんだ？」
「いえ、今はもう違います。前は多分、そうだったんじゃないかな・・・・・忘れちゃいました。でも、最後に“アっくん”が見せてくれた魔法は、今もずっと覚えてるんです。とっても綺麗だったから」
「へぇ・・・・・・」
やさしく微笑むリゼの目の前には、きっとその光景が浮かんでいるのだろう。眩しそうに目を細めている。
「どんな魔法だったの？」
「・・・・・・場所は、小さな湖のほとり。二人の秘密の場所だったんです・・・・・・」
「へ・・・・ぇ・・・」
アッシュの鼓動が脈打ち始める。自分の一番大切な記憶が一瞬フラッシュバックした。
「そこに一面色とりどりのお花畑が現れて、夢のようだった・・・・・・」
「・・・・・・・」
そう、アッシュの記憶の中の少女も、その花の波間を嬉しそうに歩いた。その笑顔が見たかったから。

アッシュの鼓動はますます大きく高鳴る。
「でも“アっくん”はもうその魔法は使えないんですって。ちょっと残念だけど、でもいいんです。“アっくん”の側にいられるだけで私は幸せだから。・・・・・・て、私ったら、何言ってんだろ――」
がっ、とアッシュがリゼの両腕を掴んだ。突然の事にリゼは言葉もなく固まっている。構わずアッシュはリゼに問いかけた。
「――――呪文、」
「あの・・・・・・魔術師さん？」
「呪文覚えてる？花を咲かせた、呪文・・・・・・・ええと、その時彼が呟いてた言葉・・・・・・っ」
「ことば・・・・・・？え、と・・・・・・確か、」
アッシュは息を飲む。リゼの唇がゆっくりと動いた。
「“ホアール”」
心が震えた。
アッシュは今にも抱きしめたい衝動を押さえてうつむく。それはもう確信だった。この、今目の前にいるリゼが“リっちゃん”だ。間違いない。
（だって、その呪文。そのちょっとふざけた呪文は）
「あの・・・・・・どうしたんですか？どこか具合でも？」
「俺の母が・・・・・・付けたんだ・・・・・・それ」
「え？」
アッシュは顔を上げリゼを見つめる。視線が重なった。
「俺、その魔法できるよ。忘れるはずがない」
「――――」
アッシュの瞳を、リゼもじっと見つめていた。
「俺は――――俺が、“アっ――――」
その時だった。
「！！」
殺気を感じ、アッシュは辺りを振り返った。何の姿も見当たらな

い。
（魔物だ）
「・・・・・・魔術師さん？」
リゼが言葉を発した次の瞬間、屋根から人型の魔物が二人に襲いかかって来た。
「あぶない！」
不意をつかれたアッシュは間一髪、リゼをかばって攻撃をよける。体制を崩し、二人は地面に転がった。
「くそっ、上か！大丈夫かリっちゃん！」
振り返らずに返事を求めるが反応がない。しかし、触れる体から微(かす)かに伝わる震えが全て物語っていた。
対峙(たいじ)する魔物は人型。上級の獲物だ。まるく大きな瞳が不気味にこちらを見つめていた。手はだらりと垂れ、異常に長い。
（レーウェイ！・・・・・・長引けばやっかいだな）
レーウェイ――素早い動きが特徴で、狙われれば最後、仕留めるまで執拗(しつよう)に追ってくる。上級の中でも人型は凶悪なものが多く、故(ゆえ)に賞金ランクも高額である。アッシュ自身初めて出会う魔物なので知識とカンによる勝負だった。
アッシュは体制を立て直すと、レーウェイを睨んだまま背後にいるリゼに話しかけた。
「リっちゃんいいか、よく聞いて。俺が合図したら後ろに、大通りまで走るんだ、いいな？」
アッシュの問いかけにやはり返る声はなかった。じりじりと敵が間合いを詰めてくる。もう待っている時間はない。アッシュは舌打ちをした。
（くそっ！しょうがねぇ！）
「しっかりつかまってろよ！」
言いながらアッシュはリゼを抱え、左手を敵に向けた。
「爆(ばく)！！」
アッシュの左手から魔術が放たれた。しかし魔物は素早く攻撃を

よける。が、アッシュもそれは読んでいた。大きく後方に飛び大通りに出る。同時に魔物が大きく口を開き、魔術で応戦してきた。アッシュは瞬時にシールドを張り、何とか攻撃を防ぐ。魔術と魔術のぶつかり合いで大きな爆発が生じる。そして間をおかず敵がアッシュに飛びかかって来た。

「っ！！」

レーウェイの長い右腕がアッシュめがけて振り下ろされるが、それは宙を切った。上に跳んだアッシュは同時に敵めがけて魔術を放った。

「爆っ！！」

どんっと大きな爆発音が鳴る。レーウェイの左腕が吹き飛んだ。

「ちっ、よけやがった。すばしっこい奴・・・・・・！」

着地するが少しよろけた。体力の消耗が思ったより激しいのか、息も上がってきている。

「ギ・・ギギ」

レーウェイが不気味に声を発した。まるい濁った緑色の目が赤みを帯び始めている。

（まずい・・・・・・次で仕留めないと、犠牲者が出る）

ちらっ、とアッシュは二回の爆発音で目を覚まし、何事かと通りに集まって来ている住民たちを見た。いずれも一目見ては怯えて物陰に隠れ、様子を窺っている。レーウェイは怒りが頂点に達すると見境がなくなり、無差別に攻撃し始めるという特性があった。それだけは避けなければならない。

（一発で決めるぞ）

アッシュは左手に全身全霊を込める。と、すがり付いているリゼが呟いた。

「アっくん・・・・・・たすけて・・・・・・ッ」

「！」

リゼの白い腕が、細い体が小刻みに震えている。アッシュは内心、どっちの？と問いかけたが声には出さず、リゼの体にかける右腕に

ぐっと力を込めた。
「大丈夫、俺が守る」
その呟きはリゼに届いただろうか？「ギィーッッ！！」と叫び声を上げて飛びかかって来るレーウェイを真っ直ぐに見据え、アッシュは腰を落とした。左拳が光を帯びる。
（もう――――少しっ）
敵が腕を振り上げ、あと数センチと迫った時、アッシュは左拳をレーウェイに突き出し叫んだ。
「――――リ＝ヴァス！！」
まぶしい光がレーウェイを飲み込んだ瞬間、どおんっ！と爆発した。すさまじい爆風の中、アッシュは攻撃した魔術とほぼ同時に張ったシールドでそれを防ぐ。見物人は何が起こったのか分からず大規模な爆発に悲鳴を上げていた。

第二章：リゼ＝ルクローム6

もんもんと巻き上がった煙が徐々にはれていく。そこには緑色をしたきれいな石が転がっていた。すでにへたり込んでいたリゼから離れ、アッシュはその石を拾い上げた。レーウェイの核である。

「とんだ臨時収入だぜ・・・・・・すっげぇ高額」

上級の、しかも人型は、賞金がピグモの数十倍にも設定されていた。アッシュのその様子を見て住民は安心したのか、わっ、とアッシュとリゼの二人を取り囲んだ。気付けばもう辺りはさわやかな朝焼けに包まれている。

住民たちは心配と安堵（あんど）の混じった表情でリゼに声をかけた。しかし、青ざめたままリゼは声一つ出せずにただうずくまっている。アッシュはレーウェイの核を手にリゼの所へ戻り「ほら」と核を目の前に差し出し、言った。

「もう大丈夫。ここに核があるだろ？」

やはりリゼからの返答はなく、その怯（おび）え様をアッシュは少し奇妙に感じた。しゃがみ込んでリゼに視線を合わせる。そしてぽんぽんとリゼの頭を軽くなでた。

「・・・・・・もう大丈夫だ。安心していいよ」

自分でも驚くほどやさしい声音で話しかけていた。その気持ちが通じたのか、リゼが小さく呟く。

「・・・・・・っくん・・・・・・・アっくん」

「！」

リゼの口から繰り返しその名は呼ばれた。聞いて動揺しないといえば嘘になる。しかしそれはきっと、自分ではない。今のリゼの恋人――アルバという男の事だ。アッシュの心が複雑に揺れた。

（でも、“アっくん”は俺だ）

ここにいる、と叫んでしまいたい。“リっちゃん”だと確信はしている。しかし、当の“リっちゃん”は自分の事を覚えていないの

だ。アシュディアーナと聞いても、魔術師と聞いても、リゼの反応は変わらなかった。まるで記憶が無くなってしまったかのような不自然ささえ感じてしまう。それほどアッシュにとって信じたくない現実でもあった。

「リゼ！大丈夫かい！？」

そこへ突然、人垣を押しのけて一人の老婦人がリゼに駆け寄った。年齢は五十代後半だろうか。騒ぎを聞きつけて慌てて飛び出て来たのだろう。寝間着にカーディガンを羽織った姿である。リゼの体を抱き、必死になだめた。リゼは相変わらず彼の名を呟いている。

「リゼ、もう大丈夫よー、落ち着いて・・・・・・ゆっくり顔を上げてごらん、ほら、お前の目の前には誰がいるの？」

老婦人はやさしく、ゆっくりとリゼに話しかけた。顔を上げたリゼの目はうつろで、どこかを見ている様でも見ていない様でもあった。老婦人の言葉にだんだんと落ち着きを取り戻したのか、リゼが何度か瞬(まばた)きをした。

「大丈夫よ、リゼ。私はだぁれ？」

「・・・・・・ミンおばさん」

「ええそうよ。・・・・・・アルバさんは今日もいらっしゃるって言ってたでしょう？」

「そう・・・・・・アっくんが・・・・・・あ・・・・・・あぁ、おばさん・・・・・・ごめんなさい。私、もう大丈夫だわ・・・・・・」

夢から覚めたかのように、リゼは無理に微笑んで見せたが、きちんと笑顔にはならなかった。

ミンおばさんと呼ばれた老婦人が、立ち上がれないリゼに代わってアッシュに笑顔を向ける。

「どうもありがとうございます、この子を守って頂いて。私この子の伯母です。あなたは昨日お店にいらしてた魔術師さんでしょう？」

思いがけない事を言われ、アッシュはしばし記憶を辿った。

「・・・・・・あー、この店の」

「本当に何とお礼申し上げたらいいのか。ああ、そうだわ。またいつでもお店にいらして下さいな。ご馳走しますわ」
「あ、いや、そんなにたいした事したわけでは・・・・・・気を遣わないで下さい」
丁寧な婦人の態度に、少々困惑気味にアッシュが首を振る。
「遠慮なさらずに、是非いらして下さいな。改めてお礼がしたいのは私達の方ですのよ」
ここまで言われては断る方が非礼になってしまいかねない。アッシュは勢いに負け、ありがとうございます、と答えた。
婦人は再度リゼに顔を向けると、相変わらず穏やかな表情でリゼの手を取った。
「さあリゼ、立てる？今日はゆっくり休みなさい。ね？」
リゼも頷いて立ち上がった、その時だった。
「リっちゃん！！リっちゃんは無事か！？」
息を切らし走ってやって来たのはアルバだった。噂を聞きつけたのか、表情は青ざめている。リゼを見つけるやいなや駆け寄り、リゼを抱きしめた。
「――――ッ良かった！良かったリっちゃん、よく無事で！！」
「アっくん？どうして、こんなに朝早く・・・・・・」
熱い抱擁（ほうよう）に喜ぶよりも、リゼはそんな疑問をまず口にした。聞いていたアッシュも同様に首を傾げる。何気ない言葉だったが何かが引っかかった。
アルバはリゼを離すと彼女の肩に手を置き、じっと視線を合わせた。
「どこも怪我はないようだね。本当に良かった。悪い予感がして来てみたら案の定だ」
その言葉にリゼはもうすっかり安心したようである。表情がいくらか和んだ。
「ああ、君。アシュディアーナ君。君がリゼを守ってくれたんだろう、僕からも礼を言うよ。こんな所でレーウェイに出くわすなんて、

本当に君がいてくれて良かった」
「・・・・・・あんた、たった今来たんだろ。見てもいないのになぜレーウェイだと分かる？」
アッシュの言葉に一瞬、アルバの表情が固まった、ように見えた。アッシュは構わず続ける。
「魔物の名前が分かるのも同業者かその筋の奴くらいだし、それに、こんな朝早くにタイミング良く現れるのも偶然にしちゃ出来すぎてないか？」
アッシュが言い終わるや否や、アルバが笑い出した。
「君は一体何が言いたいんだ？全く分からないな。レーウェイを知っていたのも偶然だよ、昔何かの本で読んだ事がある。ここへ来る途中で聞いた話からそれだと判断したんだ。疑われる要素なんてどこにも無い。それにいつリゼに会いに来ようと君には関係のない話だろう」
いけ好かない話し方に少々うんざりしつつ、アッシュはため息をつく。これ以上何を言ってもきっと「全く分からないな」の一点張りだろう。そう判断して深く追及するのはやめた。
「悪かった」
リゼの不安そうな瞳が気になって、一応謝っておく。その時、やり取りを静かに見守っていたミン婦人が小さく息をつくのをアッシュは見逃さなかった。初めアッシュは自分の疑いに対するものだと思っていたが、その視線はずっとアルバに向けられていた。
「さ、リゼ、アルバさん、私達もそろそろ戻りましょう」
何かを断ち切るように、婦人は明るい声で二人を促した。そしてアッシュに振り向くと、穏やかな笑顔を湛(たた)えて一礼をする。
アッシュも慌てて一礼を返した。三人の後姿を見送っていると、ふと、リゼが振り返った。驚いて何も言えずにいるアッシュに、リゼがアルバの手を離れ、一歩アッシュに歩み寄り立ち止まる。
「あのっ・・・・・・ア、アシュ、えっと・・・・・・あれ？なんだっけ・・・・・・」

様子を見守っていたアッシュの脳裏に“リっちゃん”との一場面が蘇る。覚えにくい名前だよな、と心で思って微笑み返した。
「“アッシュ”でいいよ。みんなそう呼んでる」
「じゃあ、えと、アッシュ“さん”！あの・・・・・・あ、ありがとうっ！」
ぎこちなく、しかし精一杯の気持ちがこめられた言葉に、再度思い出の中の少女の面影を見る。
アッシュも精一杯笑顔でそれに答えると、リゼの表情が変わった。にっこりと、それまで見せた事のなかったとびきりの笑顔をアッシュに向けたのだ。
それはアッシュにとって何よりのだめ押しであった。心臓が突如ばくばく音を立てるのが聞こえた気がした。
リゼはそのまま後ろを向き、再び歩き出す。今度は振り向かずに。
その場に残されたアッシュは、しばらく動けないでいた。

第二章：リゼ＝ルクローム7

アッシュが我が家にたどり着く頃、とっくに夜は明けきっていた。時間で言うと朝の八時頃だろうか。無言で扉を開けて入ったアッシュをキキとジュニアの二人が出迎えた。

「アッシュ！おかえり。どこ行ってたのよ」

「上級の魔物が出たという情報が流れてる。しかも今回はこの町だ」

立て続けに言われるが、アッシュはもちろん自分の事なので何も動じる事は無かった。さすがに情報が早いなと、人ごとのように思ってみる。

「まだ魔物の名前は分かってないんだけど、どうやらどっかの魔術師が料理したみたいよ。偶然にしてもその人ついてないわよねぇ！上級魔物よ？始末したのはすごいけど、絶ぇ～対ッ病院送りになってるわ！」

キキが大きく息を吐いて言った。

一つ間を置いて、アッシュがぽつり呟く。

「・・・・・・俺」

「ん？何？」

「いや・・・・・・だから、それ俺」

“それ”って何のこと――」

「魔術師」

「――ってお前かっ！！」

すかさずキキがつっこみを入れた。ジュニアも同じくため息をつく。

「運が悪いというか、アッシュ、そういうの多いよな・・・・・・」

「大丈夫なの！？む、無傷よね？さすがアッシュ・・・・・・じゃなくて！ほんと、トラブルに巻き込まれるわよね！」

「俺は別に普通に生きてるだけなんだけどな」

そういうのを運命と呼ぶ、とは、誰もあえて口にしなかった。

アッシュは椅子に座り込むと大きくため息をつく。ジュニアが敏感にアッシュの変化に気付いた。
「どうした？」
「・・・・・・・べつに、なんもないよ」
「・・・・・・」
ジュニアはそれがおかしいんだと内心思うが、それ以上の追求はやめた。言うべきことなら必ず言ってくれるという信頼に基づく無意識の決定である。
「アッシュ、説明してよ。ワケが分かんないわ！」
キキの言葉に、それもそうだとアッシュは頷いた。
「俺もよくわかんねーんだけど、散歩してたら知り合いに会って、で話してたらいきなりレーウェイが襲ってきてさ――」
「ち、ちょっと待って！魔物って“レーウェイ”！？・・・・・・・・“レーウェイ”っっ！？」
「・・・・・・よく一人で片付けたな」
ジュニアもさすがに驚きを隠せなかった。
レーウェイは一般に大型の魔物の使い魔とされており、俊敏な動きで狙った獲物は仕留めるまで追いかける、という死神のような魔物だからだ。
「きつかったよ実際。ねらいがもしも俺だったら、こんな無傷じゃすまないだろうな」
自分でそう言って、はたと、気付いた。
（そうだ。狙いが俺じゃなかったら、じゃあ一体誰を・・・・・・）
あの場にいたのは二人だけだ。
まさかな、とアッシュは自分の発想に首を振る。リっちゃんであるはずがないと。
（狙われる理由がどこにある？）
アッシュはこの事に関して今は考えるのをやめた。少々頭の中が混乱している。
「どうしたの？」

キキが不思議そうにアッシュをのぞき込んでいた。アッシュは「いや・・・・・・」と、また首を振って言う。
「とにかく、これで伝説の魔物が近くにいるという事がほぼ裏付けられたわけだ。奴の目的は何なのか、それを早く付きとめなきゃな」
「そうね。こっちからも情報流しておくわ。相手が伝説の魔物となれば一つのチームじゃどうにもならないし」
愛用のパソコンを開く手が心なしか楽しそうである。とうとう手の届きそうな所に来たという喜びなのかもしれない。ジキアを始めとする退治屋にとって、伝説の魔物はそれこそ伝説の獲物なのである。
何かを考えるように天を仰いでいたアッシュの視線が二人を通り過ぎた。そして掛け声なんかを発して立ち上がる。
「ごめん、俺もう一回寝直すわ・・・・・・」
「え、うん。どっか体調悪いの？そういえば顔色冴えないけど」
「いや、眠いだけ。もし依頼入ったら起こしてな」
「はーい。おやすみー・・・・・・」
アッシュの後姿を見送り部屋に入った事を確認するまで、二人は何となくアッシュの部屋の方を見つめていた。
「何かヘンよね、アッシュ？元気がないというか、ね？」
小声でキキが言った。同意を求めるように向けられた視線に軽く頷いて返すと、ジュニアは時計を見やった。八時三十分。
「魔物が出たというのは何時ごろだった？」
時計を見ながらジュニアがキキに訊ねた。キキは急な質問に首を傾げながら、
「えーとぉ、六時頃かな？それがどうしたの？」
「いや、何でまたそんなに朝早く出てったんだろうなと思って」
二人は顔を見合わせ、首を傾げた。

＊　＊　＊

後ろ手にドアを閉め、そのまま真っ直ぐ歩き、アッシュは目の前のベッドに勢いよく倒れこんだ。朝から色々な事があり過ぎて何だかよく分からない。脳裏には“リゼ”のあの笑顔が焼きついて離れなかった。

（ちょっと整理しようゼ・・・・・・）

アッシュは一つ息を吐くと、今分かっている事を一つずつ追っていってみる事にした。

彼女は“リゼ”。そしてアッシュの思い出の中の少女“リっちゃん”である可能性が高い。可能性といってもアッシュの中では確信に近いが、決定的なものがない限り断定をするのは危険だという考えがある。アッシュは大抵そういう風に物事を見る。

今は仮に本物の“リっちゃん”だとして、しかし彼女には“アルバ”という恋人がいる。しかも彼のことを“アっくん”と呼んでいる。

（そもそも何でリっちゃんは、この町にいるんだ？）

考えてみれば分からない事だらけだ。なぜこの中央の町にいるのか。いつから？一番分からないのは“アっくん”のことだ。リっちゃんは自分の事を忘れてしまったと思っていたが、あの思い出のひと時をあんなにも鮮明に覚えていた。まるで忘れるはずが無いのだとでもいいたげな・・・・・・。それなのにどうしてアルバをその思い出の“アっくん”だと思い込んでいるのだろうか？

リっちゃんよりもやっかいなのはその“アっくん”ことアルバである。こう考えていくと明らかにアルバは“アっくん”を演じている、という事になる。つまりは良くも悪くもリゼを騙しているのだ。理由は全く分からないが、どうやらこの一連の出来事の鍵を握っているのはアルバであるようだ。

「アルバ、ね。どっかで会った事あるっけなー？覚えてねーなー・・・・・」

アルバに関しては深く考えなくとも会ったことがあるという覚えは全くなかった。
アッシュはため息を吐き、目を閉じる。頭の中に浮かぶリゼの姿を見つめた。
とびきりの、笑顔。
しかしふと思ってみる。あの後、背を向けて去って行った後の表情は？
（リっちゃん・・・・・君は、今しあわせ・・・・・？）
まどろみの中、アッシュはリゼの背中に向かってそんな風に問いかけていた。

第三章：disguise1

「今日はリゼちゃんは店に出ないのかい？」
店の常連客にそう聞かれて、ミンジアは微笑みを返す。もう何度同じやり取りをしただろうか、とふと思う。
「あの子働いてばっかりだから、今日は強制的におやすみにしたんですわ」
「そうかい、そりゃいい。無理すると体に良くねぇからな！じゃあ、ごちそうさん！」
「ありがとうございました」
客を見送ると、ミンジアは深く息をつく。カウンターの奥にいる夫が声をかけた。
「おつかれさん。やっぱりリゼがいないと、きついか？」
「いいえ、違うの。あんまりリゼの事聞かれるからいっそ『本日リゼは休業』とでも張り紙しとこうかしらと思って」
「はっはっは！人気もんだなリゼは！」
「ええ、本当にいい子ですよ」
目を細めて、ミンジアも微笑(わら)った。
朝の忙しい時間帯が過ぎて、昼までのつかの間の落ち着いた時間が流れていた。客も今は一人もいない。
「ところで、リゼはどんな様子だ？」
カウンターまで出て来た夫が心配そうに言う。
「今は落ち着いています。まさかこんな所で魔物に会うなんて、発作が出てもおかしくないわ」
「もうずっと出てなかったのになぁ。良くなったと思っていたが・・・・・。まあでも、命が助かっただけで俺は充分だよ」
「ほんとに。偶然にしても、あの魔術師さんには感謝してもしきれないですわ。・・・・・・・それに・・・・・・・」
「ん？」

「いえ、」
ミンジアは口をついて出そうになった言葉をのみ込み、首を振る。
夫婦の一番の願い。
それはいつでもリゼの幸せだった。

＊　＊　＊

リゼの店からそう遠くない場所に、この中央の町で二番目に大きい森がある。
木々が青々と生い茂り、昼間でもあまり光の届かないひんやりとしたところである。町の外れに位置するため、あまり人の行き来は無かった。
そんなこの森に、地面を踏みしめる音が一つあった。枯れ木や落ち葉の乾いた音が響く。足早に森の奥へと進むが、ふと、くもの巣にかかり、小さくうめいた後、うざったそうに右手でくもの巣を取り払った。
「ちっ！気味の悪い森め！」
そう毒づき、また歩き出す。
彼がこの森に入るのはこれで二回目である。何故こんな場所、とぼやきながらもひたすら前進する。
しばらく歩くと、目の前に半径一メートルはあろうかという大木が現れ、彼は立ち止まった。ここが、約束の場所だった。少し上がった呼吸を整えて大きく息をつくと、彼は大木を見上げた。木々の伸ばす枝が重なり合って、一つの大きな屋根を作っている。
「・・・・・・俺だ！」
彼は一言、そう叫んだ。
一瞬の静寂。
「・・・・・・あまり大きな声を出すな。魔物たちが目を覚ます。」

「！」
背後からの声に、彼ははっと振り返った。その刺すような空気が瞬時に辺りを支配する。
男は彼の真後ろ、二メートルの位置に立っていた。全身黒尽（くろづ）くめのいでたちに、光の加減では銀色のように輝く髪がやけに目を引いた。そして男の右肩には、何かがいた。動物のようであるが、残念ながら彼にはそれが何なのかを判別する知識は持ち合わされていなかった。もっとも、知識があったとしてもそれが役に立つかどうかは定かではないが。
彼はごくり、と唾を飲み込む。
「アルバ＝オートバース・・・・・・決めたのか」
彼――アルバは、ふっと顔を歪め笑った。しかしうまく笑えず、ただ引きつったような表情になる。
「あ、ああ・・・・・・そろそろアッシュの奴が感づき始めてるからな・・・・・・今朝のレーウェイで完全に俺を疑っている。リゼとも繋がりを持ってしまった以上、先延ばしにすればするほど厄介になる」
「・・・・・・」
一陣（いちじん）の風が木々を揺らし、ざわめく。
幾分か場に慣れてきたアルバが更に言葉を続けた。
「しかし今朝は誤算だった。リゼを襲わせて怪我を負わすはずが、まさかあんな早朝にアッシュの奴がいるなんてな！」
「・・・・・・どう誤解しているのかは知らんが、お前は幸運だったな。レーウェイは手加減を知らない。アッシュが来なければ――他の魔術師が来ていたとしても女は死んでいた」
アルバは思わず言葉をなくした。つまり、この男は、あの時点でリゼを殺してしまうつもりだったのか？
（約束が違う）
リゼにはまだやってもらわなければならない事があるのだ。
「魔物のする事だ。俺は誰がどうなろうと知った事ではない。勘違

いするな」
　まるで心を読んだかのように無表情に男が言った。アルバはその冷酷な瞳に背筋が凍りつく気がした。一つ息を飲む。
「もう、これで終わりだ。二日後・・・・・・二日後の深夜、リゼを、殺して欲しい」
「・・・・・・いいだろう」
　この時、アルバにはこの男が少し笑ったような気がしたが、実際にはその表情には何の変化も見られなかった。
　いずれにしろこれでもうこの男とも縁が切れると思うと、なぜかほっと胸を撫で下ろした気分だった。そして、その先には自分の思い描く完璧な未来が待っている。リゼの突然の死により莫大な財産を手にした自分は、周囲から慰められつつマリータと結婚し、幸せで何不自由ない日々を送る。
　ついでに、アッシュはリゼの死にとてつもないダメージを受け、復讐までも達成するというおまけつきだった。
　こんな完璧な、思わず笑い出してしまいそうな人生が他にあるだろうか？それがもうすぐ手に入るのである。アルバは高揚した気分のまま男を一瞥し、その場を後にした。
　男はしばらくアルバの背中を見つめていたが、その姿が消えると、静かに大木の木の根元まで歩き、木を背にして座り込んだ。微かに入り込む光がちらちらと風に揺れ、ときどき男の右耳のピアスを反射させた。
「・・・・・・愚かだな」
　青い瞳を伏せて、男は呟いた。
「お前もそう思うだろ・・・・・・アッシュ」

＊　＊　＊

アッシュは深い眠りの中にいた。この頃眠りを苦しめるあの夢さえも届かない所まで。開け放してある窓からは昼の少しきつい光が、白いカーテンの隙間から差し込んでいる。
昼食の準備が整ったので、キキがアッシュの部屋の戸を叩くが、当然返事はない。
「入るわよー」
と一応声をかけて戸を開けると、穏やかな寝顔がそこにあった。キキはあまりの爆睡ぶりに思わず苦笑するが、もう昼である。とりあえず起こす事にした。
アッシュのベッドに歩み寄ろうとして、ふと、考え込む。いつもこのパターンで寝ぼけたアッシュに飛びつかれている事を思い出したのだ。そこでキキは呪文を口にした。
次の瞬間、腕の部分が以上に長い一本の手が現れた。くすくすと笑って、キキはその手をアッシュの肩に伸ばし、ぽんぽんと軽く叩く。戸口でキキが声をかけた。
「アッシュ！もうお昼よー、起きなさい！」
まず、ぴくりともしない。キキはもう少し力を込めてアッシュの肩を揺すった。
「起きなさい！ご飯出来てるわよー！」
「・・・・・・ん〝・・・・・・」
少し反応があったが目を覚ました気配はなかった。思ったよりも深い眠りに、キキは叩いたり揺すったりつねったりと、あらゆる刺激を与えてみる。
「おーーきーーろーー！！ご飯片付けちゃうよー！こらー！おっ、きっ、ろーーー！！」
身じろぎはするものの、やはり起きる気配は無かった。キキはため息をつき、とりあえず長い手でリズムを刻むように叩きつづける事にした。
そこへ、昼食を食べ終えたジュニアが様子を窺(うかが)いに来た。
「起きた？」

「起きない！」
「ていうか、何してんの・・・・・・」
「色々考えた結果よ。学習しなきゃね。こらー起きろー」
結構なげやりになってきたキキは、全くの無反応であるアッシュを一回ばんっと叩くと、長い手を消去した。
「あーもー、だめだ！起きない！」
「俺が起こそうか？」
「もういいわよ。疲れてんのかもしれないし。何か起こすのが忍びなくなってきたわ」
「そう」
そこへ、ピンポーン、とインターホンが鳴った。キキが「はーい」と小走りに玄関へ向かう。
ジュニアは眠るアッシュをちらと見てから戸を閉め、玄関とつながっているキッチンに戻った。

第三章：disguise2

「はーい、どなたですかー？」
言いつつドアを開けると、そこにはアッシュの彼女であるエレナが立っていた。アッシュにしては長い付き合いだったので、エレナの事はジュニアもキキもよく知っていた。
「エレナさんじゃない、いらっしゃい。どうしたの？」
エレナはにこやかにこんにちは、と言った。
「アッシュいます？」
「ええ、いることはいるんだけど」
キキはタイミング悪そうに苦笑する。
「今寝てるのよー」
その瞬間、エレナから殺気を感じ、キキは顔を引きつらせた。
「寝てる・・・・・・？」
笑顔だが目が笑っておらず、ジュニアとキキはその怒りの程を知る。
「あの・・・・・・エレナさ――」
「ちょっとおじゃまさせて貰います」
キキの言葉をさえぎり、エレナがつかつかと家の中へ入ってきた。笑顔というかある意味恐ろしい表情で、エレナはジュニアをゆっくり見上げた。
一秒の沈黙の後、ジュニアが無言でアッシュの部屋を指し示す。
「――どうも」
そのまま真っ直ぐアッシュの部屋に向かったエレナは立ち止まる事もせずに、戸を思いっきり叩き開けた。
「！！」
思わず縮み上がったのはキキとジュニアだった。二人はこっそりと成り行きを見守っている。
エレナはアッシュに歩み寄ると、すやすやと眠るアッシュの胸倉（むなぐら）

を掴(つか)み上げ、大声で怒鳴った。
「起きやがれ！！！」
「！？」
突然の事にさすがのアッシュも驚いて目を覚ます。寝ぼけているのか何も言葉が出てこない。視点さえも合わない。
ぱっとエレナが手を離すと、アッシュは一たんベッドに沈み、すぐさま体を起こすとベッドの端に座り直す。動き出した思考回路を最大限に回転させて、アッシュは状況を把握しようと目の前に仁王立ちするエレナをじっと見上げた。
「・・・・・・？エレナ？何でここ――」
「デートよね？」
見間違いでなければ青筋が三本くらい立っている。アッシュはまたしばらくぼーっとしていたかと思うと、ああ、と声を上げた。
「忘れてた！ごめんっ」
悪気のなさそうなアッシュにキキとジュニアは「またか・・・・・・」とため息をついた。エレナに同情の念を禁じ得ない。
この言葉に憤慨(ふんがい)したエレナが、だんっ！と右足を鳴らした。
「この際はっきり言って！！私の事本当に好きなの！？どうなの！？」
「え・・・・・・好きだよ」
「うそつけーっ！！」
けろっと言うアッシュに、しかしエレナは容赦なく平手打ちを喰らわせた。予想外だったためアッシュはもろに受けてしまい、ピリピリと傷(いた)む左頬を押さえてうめいた。
「い〝・・・・・・って・・・・・・！」
「あんたの好きって何よ！？いっつもそんな簡単に言うじゃない！好きだったらねぇっ、毎回毎回デート忘れたりなんかしないわよ！今日だってっ・・・・・・あんなに言ったでしょおっ！？バカーっ！！」
気持ちが治まらないのかエレナはまた手を挙げた。しかし右手は

空を切る。今度はアッシュがよけたのだ。しかし、エレナの怒りは半端では無かった。
「よけんな！」
と、今度は足を蹴られた。それがすねに入り、アッシュは声にならない悲鳴を上げて飛び上がった。
「てめっ・・・・・・！」
さすがにカチンときたアッシュが言い返そうとエレナを見上げると、俯(うつむ)いてはあはあと肩で息をしていたエレナが、急にその場にへたり込んだ。
「？」
アッシュが面食らっていると、エレナは震える声で、
「・・・・・・ほんとに、あんたには疲れたわよ。もういいわ」
と言って泣き出してしまった。途端に、アッシュは焦りだす。
戸口で様子を見守っていた二人が、「泣ーかしたー泣ーかしたー♪」と歌ったりしている。　ますます焦るアッシュは、あたふたとエレナに近づく。
「おい、ごめんって。泣くなよー・・・・・・」
そう言ってしゃがみ込み、顔を覗き込もうとした瞬間、すっくとエレナが突然立ち上がった。アッシュも「お、」と動きに合わせて視線を動かし、エレナを見上げた。
エレナは少し赤くなった目を細めて、アッシュに視線をやり、そして言った。
「別れましょ、アッシュ。さよなら！」
アッシュに有無をも言わさず、エレナはすぐさま踵(きびす)を返すと、振り返りもせず玄関まで行き、無言でドアを閉めた。かつかつと階段を下りて行く足音だけが響いてくる。
あっけにとられたアッシュは、しゃがみ込んだままでいた。戸口に立っていたキキとジュニアがそんなアッシュに声をかける。
「いいのか？アッシュ」
「まだ追いかけたら間に合うわよ？」

しかしアッシュはため息をつくと首を横に振った。
「いいよ、もう」
その時、外から「エレナ！」と叫ぶ男の声が三人の耳に飛び込んできた。「え？」という顔で三人は顔を見合わせると、揃って窓の外を見やる。
すると真っ青なオープンカーに男が一人乗っており、そこへエレナが嬉しそうに駆け寄り乗り込んだ。そして二人を乗せたオープンカーは大量の排気ガスを吐き出し走り去って行った。
一部始終を見ていた三人は、半眼で沈黙するしかなかった。
（何でいっつもこうなるんだか・・・・・・）
アッシュは心の中でそう呟くと、また一つため息をついた。

＊　＊　＊

「元気出しなさいよ、アッシュ。はい、コーヒー」
「ん」
午後の昼下がり、依頼のない日はこうしてまったりと過ごす事も多い。目の前に差し出された白いカップを横目で見つめ、アッシュは気のない返事をした。
アッシュの横にはジュニアが座っている。キキがアッシュの向かいのソファに座り込み、まったり体制の完成である。
キキは早速コーヒーを口に運び、ふう、と息をついた。
「あんまり考えすぎちゃだめよ。ショックなのは分かるけど・・・・・・」
一応心配そうにキキが言った。しかしアッシュはその言葉に首を傾げる。
（ショック？なのか？）
自問してみるが、そんな感情ではない。エレナには悪い事をした

という気持ちの方が大きい。
「ほら、世の中には女も男と同じくらいの数いるんだし、きっとこの先もっといい出会いがあるわよ！」
意外とアッシュが落ち込んでいると見て取ったのか、キキは結構必死に慰めようとしてくれている。が、アッシュの耳には届いていないようだ。
思えばもう何度も繰り返してきた事である。エレナに言われた言葉も耳にタコだった。
エレナに対して“好き”という感情を見つけようと努力はしてきたつもりだ。しかし、見つからない果てにいつも同じ結論にたどり着く。こういうのは努力して見つけ出すものだろうか、と。そしてその内努力する事も止めてしまうと、大抵その付き合いは終わるのだった。
最低だな、と、ときどき自分で思ったりもする。それでも“好き”という感情が、ますます分からなくなっていくのだ。
「なぁ、一つ聞いてもいいか？」
「うん！なに？」
ここぞとばかりにキキが反応した。アッシュがやっとしゃべったので、何となく嬉しそうだった。
アッシュは視線を宙に泳がせたまま呟くように言った。
「異性をさ、“好き”って、どんな感情？」
「“好き”？ＬＯＶＥの“好き”？」
「そう」
「何でそんな事聞くのよ？」
「いいから」
「んー・・・・・・」
突然の問いかけにキキとジュニアの視線がぶつかった。お互いを目の前にしてはとても言いづらい。ちょっとした間があいた。
アッシュはキキとジュニアを交互に見つめ、答えを促す。
仕方なく、キキが口を開いた。

「ええと・・・・・・たとえば、自然にその人に視線がいったり、気付いたらその人の事ばかり考えてたり、悩んだり、夢までみたり、ちょっとした事で一喜一憂するの。とにかく気になるっていうか。それが“好き”って事じゃないかなぁ。言い換えれば、それが“恋”だと思う」

キキの言葉にアッシュは自分を重ね合わせた。エレナに対してそんな感情は持った事がない。という事は、それは“好き”ではない――“恋”ではなかったという事になる。

「そうか・・・・・・」

と、アッシュは小さくひとりごちた。

そして同時に、そんな感情に思い当たりがある事に自身驚いていた。言うまでもなく、あの“リっちゃん”に対してである。

彼女には彼氏がいて、自分の入る隙間など少しもない、という事も痛いほど分かっているのに、それでも夢に見てしまう。リゼの事が気になってしょうがないのだ。傷つきたくないが故に目を逸らしていたこの感情が・・・・・・“好き”なのか？

「！」

そう思ってみると、急に鼓動が脈打ちだした。変に意識をする事で感情だけが先走りを始める。アッシュはやはりそこに踏み込めずに急ブレーキを踏む。「そうじゃない」「彼女には彼氏がいる」などと、必死に自分に言い聞かせるのだった。

アッシュは、もう冷めてしまったコーヒーを一気に飲み干すと、呆気に取られている二人に顔を向けて言った。

「さてと！明日の依頼について話し合おうか！」

「え、う、うん、いいけど・・・・・・」

「・・・・・・」

キキとジュニアは顔を見合わせる。

キキが「大丈夫かな、」といったように眉をしかめるが、ジュニアが苦笑したので、幾分安心したキキは明日の依頼書を取りにソファから立ち上がった。

番外編：afterimage

確かに私はもういいと思ったんだ。

もうやめてやるって。一番いい方法だと占い本にも書いてあったし。

だって、ウンザリしてたじゃない？どんなに頑張っても報われないんだもの。

酷すぎるよ。私だってこれ以上譲れなかった。自分を見失いかけてた。

危なかったの！

そう、それでいい・・・・・・・・・・・

「えーっ！あんた、別れちゃったんだ？勿体無ぃ！」

「どこが！？男は見かけじゃないっ！」

「見かけだけじゃなかったじゃない、あの人」

「それ以外に何があるの？あるなら言ってみなさいよ！」

「顔よし、スタイルよし、性格よし、」

「ちょぉっと待った！性格、最悪でしょーが！！」

「んなことなかったよ、あんたも言ってたじゃん、いい人～ってさ」

「言ってない絶対！勘違い！空耳！気のせい！」

「て、あんた・・・・・。はぁ。重症だね、こりゃ」

「何でもいいわよ、ほっといてくれる！？あんな奴の事二度と話題にもしないでくれる！？いい！？」

「あーはいはい・・・・・マスター、もぅ何とかしてよぉ」

「ほらほら、二人とも、あんまり飲み過ぎないようにね」

「あいつはさ！もぅ馬鹿なのよ！異常よ、異常！それに変だし！それから・・・・えーと・・・・・あっ鈍感で！そう！子ども過ぎんのよ！人の気持ちなんて考えてないしっ、だってっ・・・・

・そりゃ、最初のうちは・・・・・・・・っ・・・・・・・・・！あーもっ！大ッ嫌い！！」
「・・・・・・よしよし」

後悔なんてしてないもの。
だって、あいつに私への感情なんてこれっぽっちも無かった。
私が感じてるくらいのどきどきも、あいつは少しも感じていなかったに違いない。そうよ、間違いない。
・・・・・・私は全力で好きな気持ちぶつけたよ、そうしたら、いつかは、て思ってた。

「どこのどいつよ！！“努力は必ず報われる”なんて言ったバカヤローわッッ！！うそつきッ！！」
「こらこら、そんな言葉遣いしちゃだめですよー、いい男も逃げちゃうよー？」
「もう逃げたもん！！」
「あれ、認めるんだ？いい男って？」
「最悪男！でも逃げたんだもん！当然っ・・・・・・・！」
「マスター！通訳してっ、何言ってんのかわからん、」
「本当に飲みすぎちゃだけだよ。水、飲むかい？」
「なによっ・・・・・・ばかばか！・・・・・・ほんっと、大馬鹿ヤローよっ・・・・・・ッ」

あ、だめだ。
もう苦しくなってきた。
結構平気だと思ってたけど、あれ？やっぱり、こういう時、涙出るんだぁ。

やだな・・・・・・・

「う～・・・・・・」
「あぁ、泣かない泣かない・・・・・・じゃないか。そう、泣け！泣くんだ！もっと泣いて泣いてすっきりしちゃえ！」
「うえ～～～っ！」
「ひぃ。か、顔は伏せた方がいいかもね、うん、そうそう・・・・・・よしよし。あんたさ、こんなに好きだったんだから、それは押し込めちゃだめだよ、引きずっちゃうよ？自分に嘘つかないで、まず本当の気持ち吐き出しちゃって、ね？」
「うえ～～～っ！」

苦しい、な。
こんなにつらいなら、もっと頑張れば良かった？ううん、これで良かったはず。きっと、間違ってない。
だって、好きで好きでどうしようもなくても、どうにもならない事だってある。
人の気持ちは自由に操作出来ないから。だから、こんなにも愛しくて。本当に胸が苦しくて。
やっぱり、大好き・・・・・・？

「いっつも、何か、一緒にいたらさっ・・・・・・私、笑ってたよ。楽しかったんだ、すっごく。・・・・・・あんなびっくりな告白しといて、付き合ってくれんのも、あいつくらいかな！先入観とかそういうの、全くないから、変な人よね・・・・・・」
「あんた一目惚れだったもんね、スピード告白。確かにねぇ、あの人くらいかもネ」

「その後もあいつ頑張って合わせてくれたりとか、努力してくれてる事知ってた。ちゃんと向き合ってくれてる時間も、確かにあったよ。その時が一番、嬉しかった、け・・・・・・ッ」

ああ、涙が止まらない。想えば想うほどきりきりと心が痛む。
こんなにも、私、溜めてた？知らなかったよ、ごめんね、エレナ。
ごめんね・・・・・・

「そうやって思いっきり悲しんで、心を楽にしてあげなね？専門家も言ってるじゃん？“失恋したら三日間とことん悲しみなさい”って。そしたら嘆く事に飽きちゃって、前向きに進めるようになるんだって」
「・・・・・・ほんと？」
「たぶん。説得力あるから騙されたと思ってやってみたら？ベートーベンの『運命』とかバックミュージックにじめじめ過ごしてみる？」
「は、あははッ、なにそれ、」
「・・・・・・そしたら、次にはもっともっといい男、待ってるって。その人のためだよ、この経験も、今のエレナの全部が」
「・・・・・・そだね・・・・・・いーこと言うじゃん、たまには」
「おいっ。たまには？」
「そーだよっ、ふふ」

“エレナ”

ふと、耳元で、あの愛しい声が囁いた気がした。

さよなら。
酷い奴だったけど、最悪でもなかったよ。ううん、結構、いい奴だった。
素敵な時間をありがとう。色んな試練も、ついでにありがと。ちょっとは大人になった気がしてる。
私いい女になるから。またいつか出会って私に惚れても、手の届かないような、かっこいい女に。

「もぅ、あんな見栄張って、別の男の車乗ったりとかしない、」
「は？何か言った？」
「・・・・・わたくしエレナ、世界制覇します！！」
「はぁ？なにそれ」

今はもう少しだけ、あなたの残像を追いかけていてもいいでしょ？
きっと思い出にしてみせるから。
この谷を登るための命綱として利用させてね。登り切って必要なくなるまで。
これですべてゼロにしてあげるわ。あのことも、このことも。

さよなら、私の・・・・

～fin.～

番外編：afterimage（後書き）

エレナさんのヤケ酒でした（笑）エレナにはこれまで主人公殿が泣かしてきたであろう女性の代表としてアッシュのことも罵りつつ（笑）、本編では描けない彼らの細かい恋愛部分を少しだけ暴露して頂いております。

文体もリラックスムードの、本当に番外だなこれっというお話でした。

第三章：ｄｉｓｇｕｉｓｅ３

リゼにとって今という時間はとても幸せに思えた。
温かい伯父夫婦、やさしい近所の人たち、平和な日々・・・・・・そして何より、ずっと心の支えだった“アっくん”が側にいてくれること。
ただ一つの希望で、リゼの王子さまだ。“アっくん”のためならこの命をかける事もできる。何だってできる。
それさえもリゼには幸せに思えるのだ。“あのこと”に比べれば。

リゼはすやすやと眠っていた。寝てしまうには少し早い時間だったが、よほど疲れているのだろう。
様子を伺いにきたミンジアは、小さなランプを片手にそっとベッドの脇に歩み寄り、リゼを見つめた。目の辺りが少し赤くなっている。そうだ、きっと何度もあの“発作”で苦しんで、今やっと眠りにつけたに違いない。
ミンジアはこみ上げてくる涙を必死に飲み込むと、「おやすみ・・・・・・」と小さく呟いてリゼの部屋を後にした。
誰か、あの子を幸せにして下さい、普通の幸せを・・・・・・それだけでいいと、ミンジアは密かに願わずにいられないのだった。

＊　＊　＊

この日は朝から晴天だった。ひとかけらの雲もない、澄み渡った空が広がっていた。
店の開店一時間前に起きてきたリゼは、ほぼ準備の整った店を見

ると慌てて言った。
「ごめんなさい伯父さん伯母さん！私寝過ごしちゃった！」
リゼの元気な様子に二人は顔を見合わせて微笑む。
「いつもが早すぎるくらいなんだから、気にしなくていいのよ」
「よく眠れたか？」
伯父の言葉にリゼが笑顔で頷く。
すると、そこへ店の玄関から「おはようございます」とアルバが顔を出した。
三人が一様に驚く。こんな朝早くにアルバが店に来る事などそう無い事だからだ。
すぐさまリゼがアルバに駆け寄る。
「どうしたの？お仕事は？何かあったの？」
少し心配そうに次々と質問を浴びせるリゼに、アルバは優しく微笑んだ。
「ちょっと大事な話があって。リっちゃん今いいかな？」
「え？うん・・・・・・」
ちら、と伯父夫婦を振り返ると、二人は軽く頷く。リゼも頷き返すと、アルバに促されるまま店の外に出た。
二人の後姿を見送っていたミンジアは、内心気が気でなかった。何か嫌な予感がして、きつく眉を寄せる。
そんなミンジアに気付いた夫が、ミンジアの頭をぽん、となでて言った。
「そんな恐い顔するなよ、大丈夫だ」
「ええ、そうね・・・・・・ありがとう」
いくらか顔をほころばせる。そして大きく息を吐いた。
一方、外に出たアルバとリゼは、並んで近くのベンチに座った。この時間帯ではぽつぽつと人が出歩いていてもおかしくないのだが、まるで仕組んだかのように二人きりの空間が作り出されていた。
「もう調子はいい？元気そうで安心したよ。」
目を細めてアルバが言った。穏やかな風が二人の髪を撫でる。

「うん、ありがとう。平気よ。・・・・・・話って、なぁに？」
少し不安になってきたのか、リゼが待ち切れずに話しを促した。
アルバがふと、表情から笑顔を消した。じっとリゼを見つめる。リゼもその瞳から何故か目を逸らせない。
「リゼ」
「は、はい！」
「結婚しよう」
「は、はい！――・・・・・・・え」
今何と言ったのか。
リゼはアルバを凝視する。何も言葉が出てこない。
「結婚しよう」
「・・・・・・！」
現実なのだろうか？夢ではないのか？
リゼは熱いものが頬を伝うのに気付き、「あ・・・・・・・」と声を発した。
「結婚しよう、リゼ」
何度も繰り返される言葉。真剣な瞳。・・・・・・信じてもいいのだろうか？・・・・・・本当に？
本当は気付いている、どこかが狂った歯車の存在を。
見つめようとすると、絶望に腕を引かれてどこかに行ってしまいそうになった。見てはいけない。ドアを開けてはいけない。この目の前にいる“アっくん”を信じなきゃ、私はどうなるの・・・・・・？
溢れる涙は喜びなのか、悲しみなのか。リゼはもう考えるのを止めた。もう、どこまでも、信じていこう。それしか残されていないのだから・・・・・・。
リゼは、涙で滲むアルバを見つめると微笑んだ。
「はい・・・・・・」
リゼの返事を聞いてホッとした様子のアルバ。指でリゼの涙を拭ってやる。

「良かった。断られたらどうしようかと思ったよ。・・・・・・でも、そんな事はないって分かってるけどね」
いたずらっぽくアルバが笑い、舌を出した。リゼが「ふふ」と笑う。
「あ、じゃあ早速なんだけど、婚姻届に書き込んでくれないかな？後はリっちゃんの分だけだから」
「え・・・・・・でも、伯母さんたちには・・・・・・」
戸惑いながらリゼが言った。その間にもアルバが書類を取り出してリゼの目の前に広げる。
「仕事で今日から出張なんだ。三日後に帰って来る。それから改めて伯母さんたちに挨拶しよう。今書いてもらうのは、単に僕が現実としてこの喜びを噛みしめたいだけなんだ。提出するのはもちろん、挨拶した後さ」
「ふふ、分かったわ」
リゼはさらさらと必要事項を埋めていく。
アルバはリゼの丁寧な筆跡を見つめながら、口の端を歪めて笑った。この婚姻届があれば、リゼが死んだ後夫婦という事が証明される物的証拠となる。現在この地域での法律によれば、財産は全てアルバのものになるのである。
「書けたら、どうすればいいの？」
顔を上げてリゼが訊ねた。アルバはカバンから朱肉を取り出すと、リゼの左手の人差し指をそこに押し付けた。
「ここにそれを」
アルバが紙面の一点を指し示す。リゼがゆっくりと指を押し付けた。
「うん、これで完成！もうすぐ、夫婦だ」
「ん・・・・・・」
夫婦という響きがなんだかくすぐったくて、リゼは頬を赤らめた。書類等を鞄にしまったアルバは、リゼを振り返る。
「それじゃあ僕は行くね。リっちゃん・・・・・・」

リゼを抱き寄せる。リゼもアルバの背中に手を回した。
「三日後に、会おうね」
「うん・・・・・・」
アルバは目を光らせ、笑う。心の中で、「さようなら」と呟いた。

扉を開けてリゼが店に戻ったのは、十五分後の事だった。待ち構えていた伯父夫婦は、リゼがどこか上の空である事に気付き、少し心配そうに歩み寄る。
「どうしたのリゼ？アルバさんのお話は何だったの？」
ミンジアが問い掛けると、リゼは二人に顔を向けた。
「あのね、驚かないで聞いてね。私――」
一瞬の沈黙。そしてリゼが笑った。
「プロポーズされちゃった」
「ま・・・・・・！」
「ほお」
伯父夫婦は驚いて、まずそんな風にしか言葉が出てこなかった。しかし、リゼの幸せそうな表情が、二人には全てだった。ミンジアも軽く息をつくと、微笑む。
「おめでとう、リゼ。良かったわね」
「うん、本当に幸せよ、ミン伯母さん」
目に涙を浮かべ、リゼが頷いた。ミンジアは複雑な感情がぐるぐると心の中を掻き乱していくのを振り払うように笑った。
「そうだわリゼ！パーティを開きましょう！ちょうどあなたを守って下さったあの魔術師さんにお礼をしたいと思っていた所だし、報告も兼ねて、どうかしら？」
「そいつぁいいな！腕を振るうぞ！」
伯父が自慢の力こぶをみせて笑った。リゼも嬉しそうに頷く。
「彼アッシュさんって言うのよ、伯母さん。パーティはいつにする？私が連絡するわ！」

顔を輝かせるリゼを、ミンジアは少し不思議そうに見つめる。久しく見ない、透明な笑顔だ。
「あ、でも、お仕事が忙しいかしら？日にちはアッシュさんに聞いてからの方が・・・・・・どう思う？伯母さん」
「大丈夫よ、パーティは夜にすればいいわ。きっと来て下さるわよ、その、アッシュさん、かしら？あなたは無理しない方がいいわ、私が連絡もしておくから、いいわね？」
「うん、分かったわ。ありがとう」
何となく残念そうにリゼが苦笑した。ミンジアは夫と顔を見合わせると、頷きあう。伯父が声を張り上げた。
「さあ、もうすぐ開店だ！今日も忙しいぞ！」
「はーい！」
空は青く、澄み渡っている。
太陽の光は何物にも遮られることなく、全てを照らし出していた。

第三章：disguise4

「爆っ！！」

どおんっ、ともの凄い爆音と爆風。アッシュの術が魔物に命中した。

しかし魔物は負傷しつつもこちらに向かって来る。

「くそっ！何なんだよ、こいつ！」

アッシュが毒づく。

今日の依頼は“グザ”という獣型の魔物の排除だ。グザは一見熊のようだが、長い尻尾が特徴的である。好物は家畜で、人間を襲う事はあまりない。しかし、依頼人の息子が襲われ、こうしてジキアに声がかかった。

分類上中級（ミドル）に属するが、基本的には争いを極力避ける性質なのでレベル的には下級（ロー）といったところだ。

ただ注意すべきは、身を守るすべとしてグザは魔術を使う。それこそが分類上の中級魔物の条件である。グザは目を介して術を発動する。

今回の依頼で厄介なのは街中であるという事。隠れていたグザを依頼人の庭におびき出したはいいが、術を使われると下手すれば犠牲者を出してしまいかねない。そのためにはいかに早く決着を付けるかがポイントとなる。

しかし、いざグザと対峙（たいじ）した次の瞬間、何とグザは魔術を放ってきたのである。それは戦闘体制を意味している。不意を突かれた二人だが、アッシュが瞬時に魔術を発動して相殺させ事なきを得た。よける訳にもいかないのだ。

さらには、打たれ弱いはずのグザの防御力が格段に違う事に二人は首を傾げるばかりだった。

立て続けにアッシュは術を放つ。

「殺（さつ）っ！！」

右手を銃のように構えて放たれた術は、弾丸のように鋭く速い。グザの左胸を貫いた。
「やったか！？」
グザはのけぞり一たんその動きを止めるが、ぐっと頭を起こすと、また二人と対峙した。
アッシュはちっ、と舌打ちをすると、グザを睨んだまま、ジュニアに声を投げた。
「――ジュニア、交代だ！」
「了解」
ジュニアは一瞬のうちに術で右手に剣を作り出すと、アッシュと入れ替わる。グザはよく立っていられるという程負傷していた。
「ジュニア、奴の攻撃は無視していいから確実に殺ってくれ！」
「――了解！」
ジュニアが右手の剣に術を集中させる。光が大きくなった。
その術力にグザが反応し、吼えた。両目がまるで血のように真っ赤に染まる。魔物が最大限に怒った印だった。赤い目が輝くのと同時にジュニアがグザに向かって走り出した。
グザは真っ直ぐにジュニアめがけて術を放った。瞬時にジュニアは上に飛んでよける。――〇．五秒。
どおおおん、と術と術のぶつかる音が唸りを上げた。もの凄い爆風で土ぼこりが舞っている。
「ナイス」
アッシュが言った。晴れてきた視界にグザの首から下が飛び込んでくる。そしてどさっ、とグザの倒れる音と同時にその頭部がアッシュの足元へ落下した。息絶えたグザはすぐさま一つの核へと姿を変える。
ジュニアが歩み寄ってそれを拾い上げ、アッシュへ手渡した。
「首を一発、か」
「ナイスフォロー」
二人は、ぱんっと手を合わせた。

「俺がよけるタイミングとグザの術のスピード・角度に合わせて奴の今までで一番大きい術を相殺するだけの威力をもった術を放つ――言っててわけがわからない。このバケモンが」
アッシュが舌を出す。
「俺は道具を操るのは得意じゃねぇからさ、攻撃よけて両目を潰してから首をぶった切るなんて芸当、無理。お互いさまだな」
ジュニアが苦笑する。アッシュは手のひらの核を握ると大きく息を吐いた。
「さてと、あのでぶオヤジんとこに報告行きますか」
でぶオヤジとは、依頼人の事である。これだけ騒いでいても一度も顔を出さない表彰ものの図太いおっさんだ。表にある玄関口に回る。そこでふと、ジュニアが疑問を口にした。
「一つ気になってたんだが、魔物の様子がおかしくないか？」
「だよな・・・・・・こいつも本来なら、術を一発打ち込めば倒せるレベルのはずだけどな。それに凶暴化してる」
アッシュは左手の核に視線をやる。赤みがかった石が光を反射し、煌(きらめ)いた。
「これもやはり伝説の魔物の影響かもしれないな」
「そうとしか説明つかないもんなー。正直、ここまでとは思わなかった。全体のレベルが上がってる。いつもの知識で魔物を計れないな・・・・・・」
油断は禁物、と話をまとめたアッシュがふと腕時計に目をやると、すでに昼の十二時を回っていた。
「もうこんな時間か。ジュニア昼飯どうする？」
「ん、午後は依頼ないし、今日はお前について行くよ。いい所紹介してくれ」
「おっけー」
そうと決まると、アッシュのインターホンを押す手がなぜか嬉しそうだった。

＊　＊　＊

アッシュお気に入りのその店は、いつにも増して長い行列を作っていた。入る事が出来たのは三十分後の事である。
「次の方お待たせしました！」
扉が開き、そう言って顔を出したのはリゼだった。アッシュは面食らうが、リゼがすぐにアッシュを認識した。
「アッシュさん！いらっしゃい。今日もお一人ですか？」
何となくいつもと違う雰囲気に戸惑いつつ、アッシュもつられて笑顔になる。
「や、今日は二人。こいつジュニアって言うんだ。俺の相棒で、ジキアのメンバー」
そう言って親指でジュニアを示すと、ジュニアが微笑む。
「こんにちは。アッシュはここによく来るみたいですね？」
「はい」
ふふっと笑って、リゼがテーブルに案内した。店内も多くの人で賑わっている。カウンター近くの四人がけのテーブルに座ると、アッシュはいつもの“スタ丼”を二つ注文した。
「今日もお仕事だったんですか？」
リゼが注文を書き込みながら訊ねた。アッシュが頷く。
「今日はいつもより人が多いね。何かあるの？」
何となく口にした言葉だったが、リゼが瞳を輝かせて二人に向き直った。
「アッシュさんたちは、今日の夜空いてますか？」
「え？今夜？」
「この間のお礼も兼ねて、アッシュさんを招いてパーティしましょうって、ミン伯母さんが。だから早めにお店を閉めるのでいつもより人が多くて。どうですか？」

その言葉に、アッシュはとんでもないと首を振った。
「いいよ、そんなの。そこまでしてもらうアレでもないしっ」
「でも・・・・・・」
リゼはどうしても招きたいようだ。状況の飲み込めないジュニアがここで口をはさんだ。
「あの、俺には何の事か分かりませんが、そのパーティ、お礼も兼ねてって事は他に兼ねる目的があるんですね？」
三人の間に一つの間。
アッシュがリゼを見つめ、「そうなの？」と問いかけた。
するとリゼは言いにくそうに少し俯いた。そこへミンジアが歩み寄って来るなり、嬉しそうにアッシュに挨拶した。そして先程と同様に、ミンジアにもジュニアを紹介した。
「リゼからお聞きになりました？パーティのこと」
「あ、はい・・・・・・あの、何のパーティなんですか？誕生日（バースデー）とか？」
アッシュが最も確率の高い開催理由を述べてみるが、ミンジアはあっさり首を横に振った。
「じゃあ、一体」
ミンジアはリゼの肩に両手を置いて、微笑んだ。
「実はこの子、結婚する事になったんですのよ」
「――――――」
息が止まった。かと思った。
完全なる不意打ち。
（けっこんーーー！？）
恥ずかしそうに顔を赤らめるリゼが、もう視界に入らなくなっていた。
心臓の飛びはねる音を聞きながら、アッシュはなぜかこれ以上ない笑顔を作っていた。
「お、おおおめでとう！！それはすごいな！うん、すごい！良かった・・・・・・よかったね！！いやぁー、びっくりした！」

もう、何を言っているのかもよく分からない。それでもアッシュはこの動揺に気付かれまいと明るくしゃべり続けた。
（ちゃんと笑えてんのかな、おれ）
自分が自分ではないような感覚だった。
（いやぁー・・・・・・まいった）
そんなんありか？信じられない！いやでもコイビトだったんだしな？いやでもこれはちょっとなしだろー？
心の中でわけの分からない言葉が飛び交う。崩壊寸前の思考回路。
それでもアッシュは笑顔でいるしかなかった。この気持ちを、悟られないように。情けない自分を見破られないように。
リゼとミンジアはそんなアッシュの動揺に気付くはずもなく、にこにことパーティについて話し出している。
「・・・・・・」
その中で、ジュニアはじっとアッシュを見ていた。もちろんその動揺も見抜いている。ただそれが何故なのか、ということは分からないままだ。普通に考えれば理由は一つだが。
「それで、今夜は皆さん、どうかしら？」
ミンジアの言葉にアッシュが初めて戸惑いを見せた。
まだ心の準備が出来ていない。正直、嫌だった。しかし今日は午後からフリーである。断る理由が見つからない。
答えあぐねるアッシュの代わりにジュニアが口を開いた。
「すみません、せっかくですが、今日は一日仕事が入っているんです。別の日にしてもらえたら有難いのですが・・・・・・」
「！」
アッシュは驚いてジュニアに目をやる。もちろん、ジュニアが言っていることは嘘である。何のために、というのは、もう一つしかない。
アッシュをフォローしたのだ。
（バレてる・・・・・・）
気まずい思いでジュニアから視線をずらし、アッシュはにこにこ

と相づちを打った。
「じゃあ、明日！ご都合はいかがかしら？」
そうくるか！と、二人内心つっこむ。もう逃げられないと悟ったのか、ジュニアは無言のままだ。アッシュは引きつる笑顔で首を縦に振った。
「分かりました。明日、ですね・・・・・・」
「ありがとうございます！！」
リゼが本当に嬉しそうに笑った。アッシュはその笑顔がますます心を掻き乱していく事に、自身嫌悪感を覚える。素直に祝ってあげれたら、リゼはどんなに喜ぶだろうか。
（まだ、無理）
ごめん、と心の中で呟き、仕事に戻っていく後ろ姿を見送る。そしてアッシュはジュニアを振り返った。
「その・・・・・・ありがとな」
ジュニアは一つ頷いて返すと、近くにあった雑誌を手に取り視線を落とした。それっきり、二人に会話は無かった。
その日珍しく、アッシュは料理を少し残してしまった。

第三章：ｄｉｓｇｕｉｓｅ５

昼食を終えた二人が車に戻ると、タイミング良くキキからの無線が入った。ジュニアがボタンを押して応答すると、上ずった声が車中に響いた。

『緊急依頼よ！今どの辺り？』

「十九番通りの路地」

車に乗り込んで、エンジンをかける。アッシュも助手席に座り込んだ。

『そこから割と近い場所よ。急いで！』

「何番？」

『四十四！』

キキの返答と同時にジュニアが得意のスタートダッシュで車を発進させた。アッシュがしがみつきながらキキに話しかける。

「獲物は何？またミドルか？」

急に入る依頼というのは大抵が中級以上か、凶悪なものが多い。アッシュはある程度の想像をしてキキの回答を待つ。

『ミドルよ。獲物はブリッケン！』

「！・・・・・・こいつも早々にやらねぇと厄介なことになるな」

ブリッケンとは、レーウェイと同じ人型の魔物で、中級の上と言っていいだろう。その強靭（きょうじん）な肉体にはそれなりの威力のある攻撃しか通用しないという。アッシュもジュニアも初めて戦う魔物であった。

ジュニアと視線を合わす。と、幾分か低い声音でキキが無線の奥から話し出した。

『もう厄介なことになってるわ！もともとこの依頼別のチームにきてたんだけど、緊急要請、』

「何かあったな」

すかさずジュニアが言った。キキも頷くように一つ間を置く。

『チーム・ＲＯＢＢＹ（ロビー）のリーダーが殺されたわ』
「！！」
二人に緊張が走った。
チーム・ＲＯＢＢＹ――実力のある名の知れたチームである。結成して十年という経験実力ともに豊富な彼らが、ブリッケン一体にどんなミスを犯したというのだろうか？アッシュもジュニアも信じがたい思いでいた。考えられるとすれば、一つ。
「キキ、ブリッケンは“何体”だ？」
アッシュが言った。
『・・・・・・説明はいらないわね。三体よ。魔物の影響が想像以上に強くて凶暴化してるらしいの。彼らの敗因は、皮肉な事に長年の知識――油断しないで！』
「了解」
ジュニアが呟いた。
ちらとアッシュを見やり、ジュニアが大きくハンドルを切った。
もう、到着する。
「タフな一日だな」
「ああ」
言葉少なにアッシュが答える。ジュニアの気に入っている表情がそこにはあった。深く集中した瞳。
ジュニアは急ブレーキを踏みエンジンを切った。
「いくか！」
車から降りると小さな人だかりが目に入る。人数は五人前後だろうか。その殆どが負傷していた。
ちょうどＲＯＢＢＹとは別のチームがブリッケンと対峙している。そこにアッシュ達は姿を現した。
「ジキア、やっと来たか！」
「・・・・・・」
アッシュはぐるっと腕などを回している。二人はすでに戦闘体制だ。ブリッケンは三体ともほぼ無傷で、今は魔術でその動きを封じ

込まれているのか、膠着状態だった。
「アッシュ、ジュニア、待ってたよ！」
「イチ！？」
腕に傷を負った少年のような男が二人に走り寄り声をかけた。イチは少し笑顔をみせるが、真剣な声音で言った。
「懐かしむのはこいつをやった後だよ。今仲間が術で拘束してるけど、もうもたない。攻撃してもこいつらには効かないし、あとは頼む・・・・・・！」
その時だった。
ブリッケンが術の鎖を破り、目を真っ赤に光らせた。術が弾かれ、術をかけていた男が地面に転がった。
魔術を放つつもりだ。一体のブリッケンが右手をゆっくり掲げた。異常に長い人差し指から眩い光が真っ直ぐにジエンに伸びた。
「逃げろジエン！！」
イチが叫んだ。刹那。
その人差し指から眩い光が真っ直ぐにジエンに伸びた。
「ジ――――ッ」
どおおおおん、と凄まじい音に爆風。魔術師たちは一斉にシールドを張るので精一杯だった。
「ジエン！！」
イチが狂ったように叫んだ。ジエンは負傷していて逃げられない――まともに術をくらった！
駆け出そうとするイチの肩を掴んだのはジュニアだった。
「落ち着け！大丈夫だ！」
「！」
晴れてきた砂埃の中に見えたもの。ジエンの前に立ちはだかるアッシュの姿だった。
「あ！」
ジエンは気を失っている。アッシュは一瞬の内に回りこみ、術に術を放ち相殺させていた。

アッシュはブリッケンを睨みつけたまま微動だにしない。先にブリッケンが、じり、と動いた。
「ジュニア！！」
アッシュは叫ぶと同時にブリッケンめがけて走り出した。ほぼ同時にジュニアの姿も消える。イチが声を発する事も出来ない迅(はや)さで、ジュニアはアッシュが作った空間に飛び込み、ジエンをイチの所まで連れて来た。イチがジエンに飛びつく。
「ジエン！大丈夫！？」
イチの呼びかけには答えないが、術の使いすぎで疲労しているだけのようだ。ひとまず安心する。
が、すぐさまブリッケンに飛び込んだアッシュの戦況に目をやり、イチは息を飲む。
「な・・・・・・何してんの、アッシュ」
アッシュは三体の間を飛び回っていた。ブリッケンも近距離のせいか、攻撃をしあぐねている様だ。腕をぶんぶんと振り回すがアッシュは上手く避けている。
「ジュニア・・・・・・アッシュは何を考えてるの・・・・・・？」
イチの問いかけにジュニアも首を振る。
「俺にも分からない」
「・・・・・・っ」
不安な面持ちでイチは口をつぐむ。ブリッケンはレーウェイと同等の力をもつがレーウェイほど賢くなく、スピードもない。どちらかといえば猪突猛進型でパワーで押し切ってくる。体全体からみて不釣合いなほど太い腕が、パワーファイターを象徴していた。
頑強な体に生半可な攻撃は通用しない。だからこそ、アッシュの動きに首を傾げてしまう。一体何をしようというのか。
業を煮やしたイチが再びジュニアを振り返り、声をかけようとして気付く。ジュニアの右手には最大限まで発動された術の剣があった。いざとなればいつでも飛び込む気でいる。それでもまだ、ジュニアは動かずに耐えていた。イチはぐっと両手を握る。

（そうだ、焦ったってどうにもならない。戦ってるのはあのアッシュだ！信じろ！）
傷の痛みも忘れ、イチはまるで祈るかのようにアッシュの戦況に視線を戻していた。
突如、ブリッケンがアッシュから遠ざかった。アッシュと三体との間に空間ができる。しばしの睨み合い。そして三本の右手が一斉にアッシュへ向けられた。
「やばいぞ！囲まれた！」
チーム・ＲＯＢＢＹの一人が叫んだ。ブリッケンの赤い目がさらに赤く輝いた――次の瞬間。アッシュは叫んだ。
「Ｇッ！！」
どおんっ！！とブリッケンが爆発した。あまりの衝撃の大きさに敵は奇声を上げる。
「じ、自爆か！？」
チーム・ＲＯＢＢＹのもう一人が言った。確かにアッシュから術が放たれた様子はなかった。
「そうか」
突然ジュニアが呟いた。
「さっきの近距離で走り回っていたのは、術を仕掛けていたんだ。体の内部に仕掛ければ、いくら頑強な体といえどひとたまりもない！」
「！」
無数に仕掛けられたいわゆる術の爆弾が、アッシュの発動呪文と同時に爆発したのだ。三体ともダメージが深いのかよろめいていた。間を置かず、アッシュは左手に術を込める。光は数段飛ばしに大きくなっていく。
「ギイイオオオオオオッッ！！」
ブリッケンが三体同時にアッシュに突進した。同時に指から魔術が放たれる。
「アッシュ！！」

イチが叫んだ。直後、衝撃が地面から体に伝わる。しかしすぐに全員の視線が上空に動き、魔術で跳躍したアッシュの姿を捉えた。

「ッリ＝ヴァス！！」

アッシュは自分よりも大きくなった術を、呪文と同時に直下させた。一瞬にして全てを術が飲み込む。ブリッケンの断末魔も掻き消す巨大な爆発音が大きく地面を揺らした。

第三章：ｄｉｓｇｕｉｓｅ６

「――――っ！！」

ジュニアたちはきつく目を閉じ、吹き飛ばされそうな爆風から瞬時に身を守る。砂煙が一面を舞った。

程なく、振動の余韻が残る中でイチがゆっくり目を開けると、砂埃の中から人影が近づいてくる。

イチはその姿にがばっと顔を上げた。

「アッシュ！！」

ぼんやりした姿はしっかりとした足取りでこちらに向かって来るようだ。途中ふと何かを拾い上げるように屈(かが)みこんだがすぐに立ち上がり、姿がはっきりする所までやって来たかと思うとジュニアがアッシュへと駆け寄った。

「アッシュ、右腕を出せ」

「へーき。ちょっと掠(かす)っただけだ」

「いいから」

そう言ってジュニアは血の気を失い少し変色しかかっているアッシュの右腕を掴み、持ち上げた。

「！？」

が、あまりの抵抗のなさに、思わずアッシュを見やる。しかしアッシュには何の変化も無かった。つまり。

「腕が動かない上に痛みを感じないんだな？どこが平気なんだ。細胞が死んでる」

「アッシュ！大丈夫！？」

イチが心配げに駆け寄って来た。アッシュの腕を見て思わず呻く。

「これ痛そう・・・・・・」

「だから、痛くないんだって。・・・・・・でも、ちょっとやばいかな、広がって来た気がする」

アッシュが少し眉を寄せる。しばらくじっと見つめていたイチが、

何事かひらめいたように顔を上げた。
「アッシュ、ちょっといい？」
「おう？」
イチはアッシュの右手をくまなく眺めると、手の甲に目を留めた。
「うん、ここだ。ねえ、見える？これが刺し傷だよ。てんってなってるとこ」
「てんって・・・・・・・おー！てんってなってるな！」
「さっき掠ったって言ってたよね？もしかしたらあの人差し指？」
「そう。避けてたつもりなんだけどな。何か針みたいなもん指に付いてやがった」
言ってアッシュが舌を出した。ジュニアがイチに視線をやる。
「何か分かったのか？」
「・・・・・・多分、これ毒だよ。アッシュ、えーと、これ」
そう言いつつ持っていた袋から黒い小粒を一つ取り出した。
「毒の特効薬。僕が作ったんだ。効くか分からないけど、飲んでみて！」
言い終わらないうちに無理やり口に押し込まれ、アッシュはごくんと飲み込む。ごほごほと咳込むが、イチは真剣な眼差しを向けていた。
「どう？」
「どうって・・・・・・・・――！？」
アッシュは右腕に違和感を感じ、絶句した。恐る恐る右腕を持ち上げてみる。
「動く・・・・・・・！」
「！」
ジュニアも目を見張った。変色し始めていた皮膚の色も回復している。いくら特効薬といってもこんなに即効性のあるものなど見たことが無かった。イチはほっとしたように笑顔になる。
「スゲー・・・・・・・イチ、お前ってホントこの方面に関しちゃ天才だな！もう感覚戻ったぜ！」

「あと数秒もしたら痺れも取れるよ。戦いながら回復できるように作ったんだ」
感心しきって、ジュニアもアッシュの右腕を抓(つね)ったりしている。
「いてぇよ！」とアッシュが声を上げた。
「でもよくこれが毒だって分かったな。ブリッケンが毒を攻撃に使うなんて聞いたことがない」
ジュニアの言葉にアッシュも同感とばかりに頷いた。
「明らかな傷が見あたらないからもしかしたらって。細胞が死んでたのはその毒のせいだけど、薬が効くってことはきっと一時的なものだよ。つまり、仮死状態になってたんだ。一時的に戦闘不能にして襲う、ブリッケンにはそういう能力もあったんだね」
「何でこの能力がマニュアル化されてないんだろうな？いくら一時的でもビビるっての」
アッシュがそう呟いた時だった。チーム・ＲＯＢＢＹのメンバーがうわああッと悲鳴のような叫び声を上げた。
振り向くと、死んでしまったロビーの顔が青ざめ、唇は紫色に変色していた。それを見たイチは、まさか！と叫んでロビーに駆け寄りその体をくまなく探った。血液と砂などで一見しては分からなかったが、体は少し変色しているようだ。そして致命傷に至る傷跡が、もしくはそれに相当すると思える診断も下せなかった。
すぐさま先程の黒い小粒を取り出すと、硬直し始めたロビーの口をこじ開け、魔術でそれを飲み込ませた。
イチの処置を呆然と見守っていたメンバーが、揃ってロビーを凝視した。
「・・・・・・ロビーが！」
先程まで恐ろしいほど人間の色でなくなっていた顔が、みるみるうちにもとのピンク色に戻っていった。体の硬直も解け、体温も戻り、心臓が動き出した。同時に呼吸も始まった。
「うん！もう大丈夫！間に合ったみたいだ！」
「！！」

イチの笑顔に、メンバー二人は顔を見合わせた。
一部始終を見ていたアッシュ達もその場に歩み寄ると、生き返ったロビーを覗き込んだ。本当に見違えるような顔色である。
「なるほどね・・・・・・。マニュアル化されてないのは“仮死状態になるのがおまけ”だったからか」
すでに何事も無かったかのように腕を組んで、アッシュが言う。
イチが頷いた。
「放っておけばある一定の時間が経った時本当に死んでしまう。これまで誰もこのトリックを見破れなかったのか、あるいは、この毒で死に至る訳じゃないかのどちらかかな」
「あ、そうか。これだけ外傷がなかったら今までに検案、解剖にかけられた可能性は高いもんな。そしたらすぐ毒だって分かるはずだよな？」
アッシュが首を傾げた。イチがさらに頷いて言葉を繋ぐ。
「これは僕の推測だけど、この毒、細胞を完全に機能停止させたら消えるんじゃないかな。だから原因は突き止められないままだった、て思うんだ。でもそこまでに至ったらもう細胞が回復することはない。ロビーさんの場合はぎりぎりで間に合ったけど」
「なるほどネ！その線で間違ってなさそうだな！」
感心して言うアッシュにジュニアが振り向く。
「命拾いしたな、アッシュ」
「うわ、ほんとだ！俺もほっといたら死んでたのか！」
アッシュが顔を強張らせた。ここでイチと出会った強運に改めて感じ入ってみる。

第三章：ｄｉｓｇｕｉｓｅ７

そこへ目を覚ましたジエンが仲間に支えられてイチの元へ歩み寄って来た。
「イチ、こいつ軽く手当てしてやってくれ」
「うん。フォート、君もね」
「どおも」
イチの前に座り込んだジエンが、イチを覗き込んで笑った。
「イチ・・・・・・お前大丈夫だったか？怪我してんじゃねぇか・・・・・・早く手当てしろ」
イチの手に柔らかい光が宿ると、あっという間にジエンを包み込む。
「何言ってんの。ジエンの方が重症だよ。僕は大丈夫」
ふっと、ジエンは笑って、もうそれ以上は何も言わなかった。
手当てが終わるとイチはフォートを癒し、チーム・ＲＯＢＢＹにも手当てを施した。自身にも軽くそれを行い、とりあえず怪我人がいなくなると、イチは仲間と共にアッシュに向き直る。チーム・ＲＯＢＢＹのメンバーも同時にアッシュに向き直った。
「アッシュ、天才なのはそっち！命拾いしたのも僕らの方だ。それに、ジュニアとのコンビは最高だね。本当にありがとう！」
イチとアッシュは固く手を握り合った。ジュニアとも握手をする。
「我々からも礼を言う。ロビーを救ってくれたイチ君、そしてあのブリッケンを倒したアッシュ君、ありがとう。その核は君たちで分け合ってくれ」
アッシュは手の平に握っていた三つの核を見つめた。ブリッケン三体分。一体いくらになるのか分からないほど、価値のあるもの。
「それではこれで失礼する」
そう言って去って行く彼らをアッシュが呼び止めた。足を止めて振り向くと、何かが目の前を掠める。とっさに手を出し掴んだもの

は灰色に光る核だった。視線を上げて生意気な少年を瞳に映す。
「それ、あげるよ。ＳＯＳどぉも！」
アッシュはいたずらっぽく笑った。メンバーは苦笑を浮かべる以外に術がない。
「・・・・・・この小僧」
そう呟き、片手を上げて礼代わりにすると踵を返す。掌の核を見つめ、メンバーの一人が口を開いた。
「ジキアか。噂以上のとんでもないルーキーだ」
「少々生意気だがな！・・・・・・ま、末恐ろしいガキにゃ違いねぇ」
くくっと笑い、オンボロジープに乗り込みその場を後にした。
チーム・ＲＯＢＢＹの姿がなくなると、アッシュはイチに向き直る。
「ほら、これ。お前たちの分」
「え」
そう言って受け取ったのはやはり核だった。イチは一瞬考えたようだが、すぐに「ありがとう」と言って素直に受け取る事にした。
「それよりイチ、お前いつ中央に来たんだ？確か東の方に故郷があるんだったよな？」
「ああ、うん。ちょっと宮廷から呼ばれて出て来てたとこなんだ。それで偶然通りかかって、加勢したってとこかな」
何となく言葉を濁すイチが気になりはしたものの、アッシュはふーんと頷く。イチがすぐさま話題を変えた。
「それにしても、また一段と強くなったよね二人とも！卒業して二年しか経ってないのに、やっぱりさすがだよ。ジキアの噂もよく耳にするしね」
「じゃ、久々にいっちょ勝負でもしてみるか？魔術腕相撲～♪」
「やだよ！僕がそれ苦手なの知ってるくせに！――って、あッ、やめッ、離してアッシュ！・・・・・・痛ッ！！痛いって！！」
アッシュはすでに涙目でもがくイチの反応を楽しむかのように、

実に愉快そうに彼の細い腕をがっしりと掴んでいる。悲鳴に近い声を上げるイチに助け舟を出したのはジュニアだった。
「そこまでだアッシュ、彼らに殺されるぞ」
アッシュが言われた方へ視線をやると、確かに表情をひきつらせたイチの仲間の一人がじっと様子を見ていた。
「はは、わりーわりー。おしまいっ♪」
「はぁぁぁぁぁ・・・・・・もぅ、すぐそうやって苛(いじ)めるんだもんな、アッシュは！」
痛む腕を擦ってイチが口を尖らせた。ジュニアは苦笑して「大丈夫か？」とイチを覗き込んでいる。
イチは、このジュニアがいるからこそアッシュがのびのびと力を発揮できるんだなと、密かに思う。イチも笑って顔を上げた。
「あ、そうだ。遅くなったけどこの通り、僕も退治屋やってるんだ、仲間を紹介するよ。背が高くて目つき悪いのがジエン、髪が長いのがフォート。三人で“チーム・レイセヴァ”っていうんだ」
先ほど睨んでいたのはジエンという男だと分かったが、生まれつきそういう目つきらしい。アッシュはそちらを眺めやりながら別の事を聞いた。
「“れいせわ”？って聞き慣れない発音だな？」
「レイセヴァは僕の故郷の言葉だよ」
イチは「ふーん」と頷くアッシュを確認して、そのまま続けてジキアの紹介をする。
「チーム・ジキアは、もう言わなくても分かるよね。アッシュと、ジュニア。あともう一人キキっていう女の子がいるんだ。キキは・・・・・いつも留守番してるの？」
「そうだな、少し前は一緒に退治しに来てた事もあったんだけどさ。まあでも、今回のような依頼を受けたりしてくれてる。あいつ自身商売してるしな」
アッシュが答えた。イチは懐かしそうに目を細めて笑う。
「元気なんだろうなぁ。僕もよく怒られてたっけ。ジュニアとは、

じゃあ結婚したの？」
唐突な質問にジュニアもアッシュも目を丸くした。イチは無垢な瞳で返事を待っている。
「まだだけど・・・・・・いずれ、な」
ぼそっと、珍しく照れた様子でジュニアが呟いた。イチはうんうんと嬉しそうに頷く。
「イチ、そろそろ時間だぜ、行こう」
様子を見守っていたジエンとフォートが声を掛けた。イチも思い出したように腕時計を見やる。
「わ、ほんとだ！ごめんもう行かないと。ジュニア、結婚する時は呼んでね。アッシュも。じゃ、また！」
慌ただしく車に乗り込むと、そのまま走り去った。見送った二人は何となく吐息する。
「変わってないな、イチの奴。あの天然な性格」
ジュニアが言った。
「くそー」
「アッシュ？」
「最後の最後に嫌な事思い出させやがって・・・・・・。せっかくいい気分だったのに」
本当に疲れたような顔で呻くアッシュが、大きくため息をついた。初め何の事だか分からなかったジュニアだが、すぐに「ああ」と思い当たる。
「“結婚”のことか」
「言うなって」
傷をえぐられる様にきりきりと痛む心。
「あの子の事、好きなんだろう？」
ジュニアがうな垂れるアッシュを見て呟いた。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・分からない」
目を逸らしたままやっとそれだけを口にする。
ジュニアがそのまま黙って次の言葉を待っていると、突然アッシュが両手を上げて振り向いた。
「あーはいはい！分かった、全部話す！」
ジュニアは一瞬きょとんとしていたが、しかしすぐに笑顔になった。
「じゃあ、帰りは徐行運転にするよ」
「・・・・・・」
こういう時、ジュニアには到底敵わないアッシュであった。

第四章：欠片1

朝の眩しい光に起こされ目を開ける。時計に視線をやると、時間は七時。朝の苦手なアッシュだったが、この日はなぜか寝起きが良かった。

白いカーテンを引き、窓を押し開ける。爽やかな空気が更にアッシュの神経を鋭敏にさせた。しかしその爽やかさとは対照的なアッシュの心。窓の外を見つめながら早速ため息を一つ落とす。嫌でも朝はやってくるのだと思い知らされていた。

昨日のブリッケン退治の後、帰りの車の中でアッシュはジュニアに、リっちゃんについて正直に心の内を明かした。上手く言えなかったがそれでも少しは心が安らいだ。久しぶりに車の振動が心地良かった事はおまけである。

そうして自分の気持ちを声に出しているうちに、不思議な事にだんだんと頭の中が整理されてきた。そして自覚した事がある。リっちゃんへの気持ちが本気だということ。“失って初めてその大切さを知る”とはよく言ったものだ。

（あぁ・・・・・・ったく・・・・・・・おそいっつーの・・・・・・・・）

考えれば考えるほど、どうにもならない現実が目の前に突きつけられる。今日はリゼの結婚お祝いパーティーがあるというのに気持ちの切り替えが出来ていないどころかますます募る思いに苦しんでいるという有り様である。

（俺のあほー、あほあほあほあほー・・・・・・やめよ）

俺らしくないぞ、と頭を振ってネガティブな考えに走るのを止める。そして無理やりポジティブシンキングを試みた。原点に戻ってみろ！と、自分に言い聞かせる。

（俺はリっちゃんが幸せなら、それで充分なんだ！偶然この町で出会えただけでもすごい確率なんだぞ！）

確かにそうなのだ。どうしてこの町に住んでいるのか理由は知らない。だが、結婚するんだと、嬉しそうに笑った彼女の笑顔が全てを物語っている。彼女の事を本当に好きでその幸せを願うのなら、今日のパーティーは心から祝ってあげるべきである。

（それが男だろ！！）

そう心の中で叫ぶと、アッシュはぐっと背伸びした。

（そうだよな、いつまでもうじうじしてらんねー！決めた！）

「よっしゃ！！」

気合を入れ、アッシュはリビングに向かった。

部屋の戸を開けると、一足先に起きていたキキが珍しく厨房に立っている。物珍しそうにアッシュが厨房を覗くと、キキと目が合った。

「あら、おはようアッシュ。あり得ないくらい早起きじゃない！」

「悪かったな。お前こそ、新しい発明品でも作ってンの？」

「ちょっと！この新鮮な食材たちが目に入らないわけ？頑張って早起きしたのに！」

ちょっとふくれるキキが何となくかわいらしく見え、アッシュは思わず微笑んでいた。

昨日帰宅すると、顔を青くしたキキが飛び出て来た。気丈に振舞ってはいたが不安でしょうがなかったのだろう。ジュニアとアッシュの報告も涙目で聞き入っていた。今朝はそんな彼女の心遣いなのだ。

アッシュは腕を伸ばし、眉にしわを寄せるキキの頭をポンと撫でた。

「冗談だよ。ありがとな」

キキは驚いて顔を赤くする。ぱっとアッシュを振り返ると、去り際にひらひらと手を振って洗面所に向かって行く後ろ姿。それを見送りながら、キキは包丁を落とさないよう、握りなおす。

「・・・・・・なんなのよ、もー・・・・・・。あいつって憎たらしいくせに急に優しかったりするから、どきっとするじゃないの」

あんな奴なのにモテる理由が分かったわ・・・・・と呟く。何となく悔しい気もするが。
キキはすぐに気を取り直すと、野菜に包丁を入れた。
それから十分もするとジュニアが部屋から出て来た。厨房に立つキキの姿を発見し、アッシュと同じ様に動きを止める。目が合うとにっこり微笑んだ。
「おはよう」
「おはようジュニア。ごめん、もうすぐ準備できるから」
「ん」
微笑み返したキキは慌ただしく手を動かしている。ジュニアが見た感じでは、メニューはサラダとパンケーキ。慣れない手つきだがそんなキキが愛しかった。
ジュニアは昨日のイチの言葉を思い出しキキを見つめる。結婚は考えないでもなかったがもっと先の事だと思っていたため、イチに言われるまでそれほど意識をしていなかったのが本音である。しかしそういうのはタイミングなのだろう。来るべき時が来たら、その時はキキと。
ジュニアはふっと吐息するとダイニングに向かった。
「お、ジュニア、おはよー」
「早いなアッシュ。眠れなかったのか？」
ジュニアは冗談でそう返したのだが、アッシュは微妙な表情でもって肯定の意を表した。ジュニアが苦笑する。
「にしては、結構わり切った顔してるな」
「まあな。こうなったら精一杯彼女の事祝ってあげようと思って」
アッシュは切ない笑顔を見せる。
ジュニアも頷く。
実際、そうする事しか出来ない。
「まー、でも、俺ちょっと安心した」
「安心？」
「おう。俺でもちゃんと誰かを本気で好きになれるんだって分かっ

たからさー。・・・・・・って、おいこら。今笑っただろ」
アッシュは自分で言ってて照れくさいのか、少し顔を赤らめている。
「そんなことは決して・・・・・・」
「声が震えてるぞ」
「すまん・・・・・・ただ、アッシュがなんか可愛いなと思ってしまって・・・・・・」
「か！？」
アッシュは思いっきりジュニアを睨みつけると、窓の方へ顔を逸らしてしまった。さらに顔が赤くなっているに違いない。チャンスは少ないが、ジュニアはこうやってアッシュをからかうのが密かな楽しみの一つだった。
しばらくして、はたとアッシュが振り返った。もういつもの表情に戻っている。
「おお、忘れるところだった！俺いいアイディアがあるんだ」
「アイディア？何の？」
急にトーンを上げて言ったアッシュの言葉にジュニアは首を傾げた。
「今日のパーティーだよ！俺たち三人とも招待されて手ぶらで行くわけにいかないだろ？だから、一人一つずつプレゼントを用意するってどうかな？びっくりすると思うんだ！」
「プレゼントか・・・・・・なるほど」
「私は大賛成よ！今日は依頼も入ってないし、パーティーは夕方からだし。準備する時間はたっぷりあるもの！」
厨房から出て来たキキが話に加わる。ジュニアもアッシュも頷いた。
「遅くなってごめんね。朝食出来たから、運ぶの手伝ってもらってもいいかな？」
「オーケー」
三人はとりあえず食事にした。メニューはジュニアの予想通り、

サラダとパンケーキだった。
「お、うまい！」
「うん、おいしい」
「ふふふ。昨日はお疲れさま！」
キキが嬉しそうに笑った。和やかな時間が過ぎていく。
「アッシュはプレゼント決まってるの？」
キキがアッシュに話題を振った。アッシュはサラダを飲み込むと軽く頷く。
「まあ、だいたい・・・・・・。お前は？」
「私はー、思いついたけど今はひみつ！」
意味ありげに笑う。そして次は自然にジュニアに視線がいった。
「俺？俺は・・・・・そうだな、」
二人が注目する中、二人に倣って秘密にすべきか少し迷ったが、そんな大した物でもないなと口を開いた。
「俺はケーキを作るよ」
「おお！」
アッシュが嬉しそうに声を上げた。ウエディングといえばケーキしかない。ジュニアの作るケーキは本当にプロ顔負けの出来栄えなので、リっちゃんがどんなに喜ぶか、想像に難くなかった。
こうして、仕事のない一日を三人はプレゼント作りに時間を費やした。アッシュは町に出かけ、ジュニアはひたすら厨房に、キキは自分の部屋で何やら物作りをした。
アッシュに関しては、ただリっちゃんの笑顔が見たくて他に思いつかなかったプレゼント。自分の気持ちにもこれで決着をつけるつもりでいた。
精一杯の気持ちをそこに託すため、アッシュは何軒もの店を回ったのだった。

第四章：欠片2

「それでは、正式にあなたをこのプロジェクトの一員として登録してもよろしいのですね？」
「・・・・・・はい」
どうやって断れたというのか。その絶大な権限を持ってしてもまだその様に問うのは傲慢としか言い様がない。
「わかりました。では、これを」
「・・・・・・」
一枚の紙切れに書かれているのは桁の大きな数字。無言で手にしたのがせめてもの抵抗だった。まるで自分の意志で、望んで受けたかのような言い方に、腹の底から嫌悪感を覚える。
「それでは隣の部屋にお進み下さい」
「・・・・・・」
豪華な造りの扉が開かれ現れたのは、気品漂う中にも厳しさを含んだ眼差しの婦人。宮廷魔術師の副師隊長である。
背中で扉が閉まった。
「顔を上げて下さい。まずは、あなたに詫びなければなりません。本当に申し訳ないと思っています」
「！」
予想外の言葉にはっと顔を上げる。しばしその言葉の意味を探した。
「今回の召集でどんなに悩まれた事かお察しします。ほぼ強制なのは私も分かっております。でも私にも、まして師隊長にも、この事に関して決定権は存在しないのが現状なのです。どうか許して下さい」
副師隊長が深々と頭を垂れる。
「や、止めて下さい。もったいないです・・・・・・」
ゆっくりと顔を上げた副師隊長が少し微笑んだ。

「あなたは、魔術学校の第八十五期生だそうですね」
「あ、はい」
「あなたにお願いがあります」
「・・・・・・？」
副師隊長が静かに言った言葉に、耳を疑った。間髪入れずに答えていたのは、ＮＯ！
「・・・・・・これはあなたの第一の使命だと言っても？」
「はい。それだけは受けかねます。死んでも出来ません！」
「・・・・・・そうですか」
少しの間があり、副師隊長は突如笑い出した。ふふふと、心地の良い声が耳に届く。
また訳が分からず訝しげに眉根を寄せた。
「安心しました。これであなたにお任せできるわ。今のは嘘です」
「はぁ・・・・・・」
気の抜けた返事を返す。
副師隊長はどこか悲しい色を滲ませた瞳を真っ直ぐこちらに向けて言った。
「ジキアのアシュディアーナ＝ルーヴィンをこれから監視して欲しいのです。伝説の魔物を、引いては“グスト”を追う手がかりになると、宮廷は考えているからです。それは私も同感・・・・・・いつかあの少年は動き出す」
「グスト・・・・・・。動く、それは、何故（なにゆえ）？」
「その事については私の口からは言えません。いずれ分かるでしょう」
「・・・・・・」
いずれ、という言葉にやけに嫌悪感を覚えた。きっとどんな事もすべてその一言に置き換えられてしまう。
「それともう一つ、秘密を守るため、あなたのチームも解散してもらわなければなりません」
「！！」

その言葉を耳にした途端、大きく決心が揺らいだ。そこまで考えが及ばなかった自分の楽観さを呪いたかった。
（何よりも大切な仲間を、切り捨てる？）
そこまでしなければならない価値がこのプロジェクトとやらにあるのかどうかさえ、思考する余地は与えられていないというのに？
「それでも、引き受けて下さるかしら？」
「っ・・・・・・」
優しい言葉だと思った。
同時に、この上なく厳しいとも。
しばしそっと目を閉じ、また、しっかりと見開く。
副師隊長の真直ぐ自分に向けられたブラウンの瞳の中に、形容のし難い薄い笑みを浮かべた自分の姿を見た。
「はい」
きっと、全てのためだと。
こういう運命なのだと。
大きな代償を払ってまでそこに賭ける価値が、いずれ分かるとそう自分には聞こえた気がしたのだ。
（そう、運命なんだ・・・・・・）
見えない未来は瞳を刺すほどの真白い影に覆われ、やはりそこは暗闇に変わっていた。

＊　＊　＊

夕日がきれいに空を彩り始めた頃、アッシュ達三人は車に乗り込む。
運転席に乗り込んだのは珍しくアッシュだった。それにはきちんと理由がある。
キキに手伝ってもらいながら、用心深くジュニアが助手席に進入した。アッシュは小さくため息をつく。
「なんでそんなにでかいの作ったんだよ？」

天井にすでに届いているケーキの箱をがっちりと支えたジュニアが、顔色を変えずに答える。
「喜んでもらうためだ」
あっさりそんな風に言われるとどう返していいのか言葉に詰まる。キキが後部座席の扉を閉めるのを確認したアッシュがエンジンをかけた。
「久しぶりに運転するからなぁ。ちょこっと不安」
頼りなく呟くアッシュにキキが後ろから身を乗り出してすかさず言った。
「なんならあたし代わろっか？」
「それはだめ」
アッシュが即答する。隣で同感とばかりにジュニアが頷いた。キキは納得出来なさそうにふくれている。
「なーんでよ？そんなに距離もないし、少しくらいやらせてくれたって・・・・・・」
「免許ない奴は論外です」
きっぱりと言い放ったアッシュがアクセルを踏み込んだ。不意を突かれたキキは反動で座席に沈み込む。決して上手くはないが穏やかなスピードで進む車の振動に身を任せて、キキは「けちー」と呟いた。
時々アッシュは意外なところで手堅い。普段ならば呆れて何も言えなくなるほど適当にやり過ごすのがアッシュだ。
アッシュの運転する車が大通りから一つ小さな道に入る。それまで目の前に、これでもか、とそびえ立っていた白い建物が視界から消えた。というより、左手側に移動したのだ。
アッシュはちら、と横目にそれを見るが、またすぐに視線を前方へと戻す。それはいわばアッシュの癖であった。
ここ中央の町にいてこの巨大な白い建物が目に入らない場所はない。それは敢えて意図して作られたかのような図々しさで、中央の町のまさに中央に据えられた白い巨塔――“宮廷”である。

アッシュの父と母も今は宮廷内に住む宮廷魔術師である。かつて一度はアッシュも暮らした事があるが、宮廷内の窮屈さは幼い彼にとっても耐え難く、自ら望んで全寮制である魔術師学校への入学を申し出た。父母はそんなアッシュの心理を察知していたのかどうか、二つ返事で諒解した。

在学中は両親のすねをかじるしかなかったが、卒業してすぐにジキアを結成したアッシュはここで完全に独り立ちを決めた。それはすなわち、宮廷魔術師である父母とは道を異にした瞬間だった。血が繋がっていようと簡単に連絡を取れるような場所ではない。お互いに元気なのかどうかさえ、今では知るところではないのである。

再び二本目の大通りに出ると、更に宮廷が近くに見えた。しかし実際は思っているよりも距離がある。

アッシュは百メートルほど進むと右手側に曲がった。宮廷を横目に見、小さい道を真直ぐ進んだ。

出発して二十分も走っただろうか、中央で二番目に大きい森がだんだんと近づいてくる。得体の知れない不気味さを感じるのは、あまり馴染みのない森だからだろう。

細い路地の手前でアッシュが車を停めた。エンジンを切りつつ、ホッと吐息する。

「到着！良かった、特に何もなくて・・・・・・」

意外にも神経を使って運転に集中していたようだ。いささか生気の抜けた感がある表情を二人に向け、アッシュは先に降りるよう指示した。

キキは急いで降りると助手席のジュニアに手を貸してやる。大きさからしてみればここまで奇跡の移動を果たしたケーキの箱が、誇らしげに傾いた夕日を反射させた。願わくば、中身が無事でありますように、と、アッシュはこっそり思ってみる。

「アッシュ、あのお店？」

先に歩き出したキキが、今だ運転席に座るアッシュに向かって尋ねた。アッシュが答えるより早くケーキの箱を両手にしたジュニア

がキキを先導する。
途中、ちら、と車を振り返り、顎の動きで早く降りて来い！と無言の合図を送る。
後部座席に山積みになっている自らが用意したプレゼントを見つめ、そして目を閉じる。大きく深呼吸をすると勢いよく目を開いた。
「よし！！」
車中に気合の一声を響かせ、アッシュは両手に抱えきれないほどの花束を抱えて車を降りた。ばくばくと鳴り止まない心臓の音。
（情けない顔するな、俺！）
言い聞かせつつ、アッシュが戸の前に立とうとするよりも一瞬早く、なんとリゼが中からひょっこり顔を出した。
「アッシュさん？」
抱え込んだプレゼントで視界を遮られていたため不意打ちは免れた。しかし声だけでも充分に驚いて思わず手の中のものを全て落としそうになってしまった。
ゆっくりと角度を変えて、片目でリゼの姿を捉える。
そこにあったのはほんのり化粧をして、少しおしゃれをした、笑顔のリゼだった。
一瞬、心臓が跳ねる。

第四章：欠片3

「・・・・・・なんだか、きれいだね」
「え・・・・・・」
アッシュの突然の言葉にリゼが顔を赤くした。アッシュも、無意識に口走ってしまった自分にはっとする。
気まずい沈黙を持て余したアッシュが、「お、お邪魔します」と、強引に店の中へと足を踏み入れた。
店に入ってプレゼントを床に置き、アッシュの開けた視界に飛び込んできたのは、まず、おいしそうな料理の数々だった。そして昼間の店と同じ場所であるという事を疑いたくなるほどお洒落に飾り付けられた店内。
アッシュは素直に感動していた。ここには柔らかい愛情がたゆたっている。
「ようこそおいで下さいました。さあ皆さん、乾杯しましょう！」
ミンジアがワインを手に取り微笑む。それぞれのグラスが順番に傾き、赤く染まった。
準備が整うと、ミンジアに促された店の主人が一つ咳払いをした。軽くグラスを持ち上げる。
「えー、この度はリゼの結婚が決まり、えー、ちょっとしたお祝いを開こうと、えー、その、・・・・・・まあ、嬉しい事です」
結婚、というところでアッシュはぎくりとするが、皆は主人の冴えない乾杯の挨拶に笑いをこらえるので必死になっていた。
「えー、まあ、後は、アッシュさんが、リゼの事を守って下さった。この事に関しては私たちは本当に何とお礼を申し上げていいのか分かりません。本当にありがとうございました」
突然淀みなく主人がそんな風に言ったので、アッシュはそわそわと落ち着かない気持ちがした。ミンジアといい主人といい、本当にリゼの事を大切に思っているのがひしひしと伝わってくる。

少しの間の後、主人がもう一度咳払いをした。
「それでは、今日は遠慮せず、存分に楽しんで下さい！乾杯！」
六つのワインが大きく波をうった。
「乾杯！！」
かちんっ、と、グラスのぶつかる音。皆の笑顔が弾けた。
「おいし～い！このワイン、どこで？」
キキがワインを眺めて感嘆の声を上げる。ミンジアがふふふと笑った。
「自家製ですのよ、これ」
「ええっ！？ホントに！？すごーい！」
「そこらへんで売ってるのなんかと比べ物にならないな！」
アッシュも感心した様子ですでに飲み干したグラスにワインを注ごうとして瓶を持ち上げた。すると、隣に座っていたリゼが手を伸ばし、瓶に手をかけた。
「だめですよアッシュさん、」
語尾がほんの少しだけ上ずって、そこでもうすでにアッシュに逆らえる術は完全に消え失せていた。
「どぅも・・・・・・」
と呟くと、リゼの手に瓶が渡る。鮮やかに、ワインがグラスの中で踊った。
最後ににっこりと微笑みを添えられて、アッシュにはもうそれは意図的なんじゃないかと思われるほどだった。
いつしか気付けば心地よい音楽がＢＧＭのように流れていた。これも予定されていた演出なのだろう。
アッシュは焼きたてのピザを頬張りながらその音楽に耳を傾けてみる。しかし、何を言っているのか全く分からない。どうやらどこか別の国の音楽らしかった。
「そうだわリゼさん！私たちプレゼントを持ってきたの！」
思い出したようにキキが言った。リゼはちょっと戸惑ったような曖昧な笑みを浮かべる。

「そんな・・・・・・気を遣わせてしまって・・・・・・」
「何を言ってるのよ、結婚するんでしょう？たいしたものが準備できなくてこっちが申し訳ないくらいよ！」
「・・・・・・ありがとうございます」
リゼが笑った。キキの言葉にリラックスしたようだ。
キキが小さく頷くと、あの奇跡（？）のケーキがテーブルの上にお目見えする。
「これは何かしら？ずいぶんと大きい・・・・・・」
ミンジアが色々想像を働かせつつ言った。
「さ、リゼさん、開けてみて」
「はい」
促されたリゼが白い箱を開くと、どよめきが起こった。主人は腕組みをした格好で「ほぉー」と嘆息する。
この大きさでまさかケーキとは思わなかったのか、ミンジアもリゼも一瞬面食らって、しかしすぐに目を輝かせた。
「す、ごーぉい・・・・・・！なんておしゃれなケーキなのかしら！それにこんなに大きいケーキを見るのは初めてだわ。これ、キキさんが？」
嬉しそうにキキに顔を向けるが、キキが苦笑して首を振った。そしてジュニアを指差す。
「え、え？ジュニアさん？これ、ジュニアさんが作られたんですか？ほんとうに？」
「結婚おめでとうございます」
微笑んでジュニアが言った。
主人もケーキに歩み寄ってじろじろと観察している。細部にわたって細かい細工が施してある事に気付き、「たいしたもんだ」と唸った。
リゼが早速ケーキに入刀し人数分切り分けた。一人分には到底思えない大きさだったが、そのように切っても食べきるには数日を要するのではないかと思われた。

「おいしい！！」
一口食べて、リゼは思わず声を上げた。同様に皆頷く。
「本当だわ。おいしい！」
お菓子作りの好きなミンジアも驚いたように目を見開く。すると一口で半分以上食べた主人が本気の形相でジュニアに顔を向けた。
「ジュニアさん、魔術師やめて店開いたらどうです？これは売れる！」
大きさがあるのに大味にならないというのは余程の腕前だとジュニアを賞賛した。褒められて嬉しくないといえば嘘になるが、ジュニアはちょっと困った顔をした。
キキは自分の事のように嬉しそうに微笑んでいる。
「じゃあ、次は私ね！私からのプレゼントは・・・・・・」
少し含みをもたせてキキがにっこり笑った。後ろに隠れていた両手をパッと前に差し出す。掌の上に、可愛らしくラッピングされた小箱があった。
「どうぞ」
「ありがとうございます！何かしら？」
リゼが小箱をそっと受け取ると、くるくると丸まっているピンクのリボンを引いた。包み紙を丁寧に開き小箱を開け、取り出したものはちょうど中指ほどの大きさの小瓶であった。中には透明な液体が入っている。
リゼは目の高さに持ち上げてじっとそれを見つめた。
「これは？」
その言葉を待ってましたとばかりにキキがウインクして人差し指を唇につけた。皆も説明を欲しがるようにキキに視線をやる。
「説明しまーす。それは魔術で作ったお薬。名付けて“ＬＯＶＥ？ウォーター”！真ん中の“？”がポイント！」
「ラブウォーター？」
リゼが呟いた。
キキは一度だけ頷くと、いたずらっぽく笑う。

「使い方はカンタン。友達、恋人もしくは旦那にシュッと一回吹きかければいいの。何回かけても効き目は同じだからね。するとなんと！愛を確かめる事ができちゃうのよ！」
キキは尻上がりに語気を強めて自身たっぷりに言い切った。期待通り、おお～っ！という驚嘆の声が上がる。
しかし当のリゼは何故か言葉を失っていた。その変化にキキは気付く風もなく更に説明を加える。
「どういう事かというと、この液体はもともと無香料なんだけど、一たん吹きかけるとその人の気持ちを現すような匂いが出てくるの。今回設定したのは、好きな気持ちが強ければ強いほど香るのは様々な花の香り。吹きかけた人以外の人に少しでも恋愛感情があれば、レモンの香り。そして吹きかけた人に恋愛感情はなく、それでいて友達のような気持ちなら、コーヒーの香り。それどころか吹きかけた人を嫌ってるなら、バナナの香り。分かりやすいでしょ？」
「何で嫌いなのはバナナにしたんだ？」
イメージにそぐわないのかアッシュが首を傾げた。
キキはうーんと腕組みをしたが考えている素振りは全くない。
「だって、嫌な香りだったら嫌な気持ちに拍車をかけちゃうじゃない？だから無難にフルーツにしたの。ちなみに、この香りはだいたい一分程度で消えるわ。乱用はだめだけど、有効活用してね、リゼさん？」
キキが意味ありげにリゼに微笑みかけた。が、小瓶を見つめたままリゼに反応がない。
キキは聞こえなかったかな、と、もう一度リゼの名を呼んだ。すると、はっとしたようにリゼが顔を上げ、複雑な瞳の色でキキを見る。笑顔ではあるが笑おうとして失敗したような、微妙な表情になっていた。
「あ、は、はい！ありがとう、ございますっ」
慌てて答えてその場をやり過ごしたが、様子のおかしさにミンジアとアッシュは気付いていた。ミンジアは事情を知っているがゆえ

に、はらはらとリゼを心配そうに見つめている。
一方アッシュは、理由は分からないが何か心に引っ掛かりを感じ眉をしかめた。時々見せる苦しそうな表情は一体何を意味しているのか。
（幸せ、なのかな・・・・・）
また、そんな風に心の中で疑問が揺れた。リゼの表情に隠された、何か大きな秘密の予感がふと過る。
拭い去れない矛盾が付き纏いながらもやはり真実は闇の中だった。

第四章：欠片４

「じゃあ、最後はアッシュからのプレゼントね」
キキが明るい声でアッシュにバトンを渡した。アッシュは多少緊張した面持ちで皆の方を流し見、再度一番手前にいるリゼの位置を確認する。
リゼの様子は落ち着いていて、幾分ほっとする。
「えっと、俺からは、これ」
そう言ってアッシュは左手の指をぱちん、と鳴らした。すると、店中にアッシュの抱えてきた花々が花瓶に活けられて配置された。言わずもがなの魔術である。
ただ奇妙なのは、花はすべて蕾であること。しかし誰もその事についてとやかく言うものはいなかった。なぜならアッシュは本当に真剣な表情で、とてもそんな口をはさめる雰囲気ではなかったのである。
「リっちゃ――あ、いや、えと、・・・・・・リゼさん・・・・・・結婚、おめでとう」
そう言ってアッシュは何とか微笑んだ。

これしかないと、思った。
忘れられない記憶。それはリゼも同じ。その事が素直に嬉しくもあり、だが、永遠に失われてしまった幼い頃の幸せは思ったよりも甘く切なすぎた。決して囚われたくはない。しかし手放すにはあまりにも深い傷が残ると、やっと気付いたのだ。
あの時もリっちゃんを喜ばせたくて考えたはずが何故か別れが隣にいて、悲しませてしまった。これはもう避けられない運命なのだろうか。やはりまたアッシュにとっての別れが寄り添っている。
でもこれで最後。本当に最後。ただのひと時でもいい。

（やっぱり俺はリっちゃんに笑っていて欲しいんだ）
願うように目を閉じ、深く息を吸った。

「ホアール」
奇跡的に静まりかえった一瞬に、アッシュの呪文が響いた。と同時にアッシュが軽く右手を振る。
すると店中に配置されていた花々が一斉に蕾を開き始めた。ゆっくりと、まるで録画して何十倍にも早送りして見ているような、思わずため息のもれる光景が目の前に現れた。
「うわぁー・・・・・・」
頬を紅潮させ、キキが呟く。主人とミンジアも顔を見合わせた。
アッシュはちら、とリゼを見た。すると花を見つめながら目を細める横顔が目に映る。リゼは何を思うのかアッシュには見当もつかない。ただ、笑っている。それが単に嬉しかった。
アッシュは指をぱちん、と鳴らした。途端に店の照明が完全にダウンする。当然、皆驚いてまず短い悲鳴を上げた。
「まあ、停電かしら？それとも故障かしらねぇ？」
「この間メンテナンスを受けたばかりだ。そんなはずはねえと思うんだが・・・・・・」
主人は首を傾げたようだ。もちろん、暗くて何も見えないが。
そんなちょっとした混乱の中でジュニアが言った。
「大丈夫です。これもアッシュの演出ですから。そうだろ？」
ジュニアはアッシュに向かって――正確にはアッシュのいる方向に向かって――尋ねた。魔術を使ったら魔術師には分かるものなのだ。
「うん。驚かせてすみません」
そう言ってアッシュはもう一度ぱちん、と指を鳴らした。
瞬間、淡い光が店内を照らし、皆の表情を浮かび上がらせた。
アッシュのプレゼントは花の照明。色とりどりの、幻想的な空間。

「う・・・・・・わぁ・・・・・・・・すご・・・・・・・・」
キキの声。
「まぁ・・・・・・」
ミンジアのため息。
「すごいな・・・・・・」
ジュニアも思わず呟いた。
バックミュージックまでもがタイミングを合わせたように心地の良いバラードだ。
目の前に広がる虹色の花々の照明でまるで透明な音楽を奏でているような、錯覚とも思える不思議な空間がそこにあった。見つめれば見つめるほど淡く光る光明。
その中でアッシュはリゼのいる方向を見つめた。ぼんやりと浮かび上がる細いシルエットをじっと見守っている。
（これが、俺の気持ち・・・・・・）
もしかしたらとんでもなく未練がましく、ずるい行為なのかもしれないという事は重々承知の上だ。それはもう嫌というほど考えた結果だった。
（それでも）
アッシュは切なく目を細め、呟く。
（ずっと、君が好きだった・・・・・・）
それは音になる前に空気に溶けて消えた。消えて、あるいは良かったと、アッシュは思う。何故かホッとした気持ちで微笑んでいる自分がいた。
リゼの背中を見つめながらそろそろ術を解こうとそっと息を吸おうとした、その時。
小さなシルエットが、揺らいだ。
ゆっくりと、そして正確にアッシュの位置を捉えて、リゼが振り返った。アッシュは呪文と共に吐き出そうとした息を一瞬の内に飲み込む。
視線がぶつかった。淡い光明の中に浮かび上がったのは、眉を寄

せ、目を細めたリゼの表情だった。そこにきらきらと輝くもの・・・それは紛れもない涙である。とめどなく溢れ続ける、虹色の涙。
アッシュは言葉を失くし立ち尽くした。リゼは徐々にアッシュへ歩み寄る。濡れる頬は一度も拭われる事はなく、無造作に白い肌へその跡を付けていく。
触れられる位置までリゼが歩み寄り、アッシュを見上げ、そして呟いた。
「・・・・・・ア・・・・・・っく・・・・・・？」
それは消え入りそうなほどか細く、アッシュにもやっと聞き取れる程度の声だった。
アッシュは何も言わない。いや、何も言えない。
耳にした言葉の意味を理解しても、アッシュはぐっと言いたい言葉を飲み込んだ。それは直感だった。
リゼがもう一度呟いた。
「アっくん・・・・・・？」
今度は幾分はっきりとした声音でアッシュにも充分に聞き取れた。少し手を伸ばせば抱きしめられる程側にいるのにそれは出来ない。
これで良かったのか？
微かな後悔も胸を過るが、しかし、彼女は泣いているのだ。
混乱してくる頭の中で、アッシュは必死に考える。涙の理由と、その名を呼ぶ意味を。
（・・・・・・なぜ・・・・・・）
リゼは本当に真実を望んでいるのか、ということ。
自分の存在を認識したとしても何が変わるのか？
じっと見つめる瞳の奥に潜む、深い深い悲しみの色。苦しみ。迷い。
（何も分からない）
アッシュにはそれが何故なのか分からなかった。強く両手の拳を握り締める。静寂の中、リゼの呼吸する音が微かに聞こえた。
「あなたは・・・・・・誰？」

リゼがもう一度、言った。懇願するかのような憐れな表情が、必死に訴えているのは。
畏怖(いふ)。
アッシュはそっと唇を動かした。
「・・・・・・がう・・・・・・」
声が掠れた。リゼの瞳を直視できない。
「違う・・・・・・俺は――」
本当に言いたいのは――？
リゼがきゅっと、唇を結ぶ。アッシュはリゼを見た。
「・・・・・・俺のこと、さん付けじゃなくて・・・・・・“アッシュ”って、いつかは呼んでくれる・・・・・・？」
「・・・・・・」
リゼが何かを言いかけたが、それは言葉にならずに霧散する。そして何となく困ったように笑った。
アッシュは吐息すると、パチンと指を鳴らした。途端、店の照明が復活する。皆揃って目を瞬かせた。その表情はとても和やかなものであった。
「アッシュ、最高に綺麗だったわ！」
キキが言った。アッシュは苦笑して返すとリゼに視線をやる。すると意外にも皆と同じような穏やかな表情で笑っている姿があった。
アッシュは一人、腑に落ちない気持ちでいた。いつまでも合わないパズルをやっているような気分だ。
（・・・・・・足りない）
抜け落ちたピースがどれだけあるのかそれさえ見当がつかない。
（あんな顔・・・・・・幸せなはずがない）
それだけは確かに感じているのに。
苛立ちを掻き消すように、アッシュはグラスのワインを一息に飲み干した。

第四章：欠片5

パーティーはアルコールも手伝ってか夜になっても勢いを失わなかった。楽しいひと時が時間を忘れさせたが、さすがに人間にはアルコール摂取量の限界点がある。深夜近くなって気が付けば、生き残っていたのはアッシュとミンジアの二人だけだった。

「あらあら、皆さん寝てしまいましたわねぇ」

長椅子の上に横たわっているキキに薄手の布を掛けてやりながらミンジアが苦笑した。もう一つの長椅子にはジュニアが窮屈そうに横になっている。店のカウンターにうつ伏せて小さくいびきをかいているのは店の主人だ。

アッシュは首を傾げる。

「リゼさんは・・・・・・」

「ええ、少し前に飲みすぎたからって自分の部屋に行きましたわ。あの子普段は滅多にお酒を飲まないんですよ」

「そう、ですか・・・・・・」

ミンジアはあまり飲んでいないのだろう。顔色も普段通りである。

「アッシュさんはずいぶんお酒が強いんですのねぇ」

空いた皿を片付けつつミンジアが言った。アッシュは曖昧に笑う。

「みたいです。遺伝かな？」

「あら、じゃあ御両親もお強いの？」

「と思いますけど・・・・・・」

簡単に記憶を辿るが、両親が酒を飲んでいる姿はどこにも記憶されていないようだった。アッシュは自分のグラスに残っていたワインを飲んでしまうと、立ち上がる。

「俺も片付け手伝います」

「まあ、お客様なんですからいいんですのよ。気を使わないで下さい。それに少しずつ片付けてましたからそんなに手間はかからないんです」

「じゃあなおさらですよ。二人でやればすぐに終わります」
ミンジアは目をぱちくりとさせていたが、ふと笑い出した。
「それじゃあ、お言葉に甘えて・・・・・・お願いしようかしら」
アッシュとミンジアはキッチンに立って他愛のない話をしつつ、店の片付けをした。きれいになる頃には夜中の一時を回っていた。
静まり返る夜の時間。今夜は本当に空が澄んでいる。穏やかな月夜だ。
アッシュとミンジアはティータイムと称してテーブルに向かい合って座る。温かいアップルティーが甘い香りを漂わせた。
「アッシュさんのおかげでこんなに早く片付きましたわ。本当にありがとうございました」
ミンジアが頭を垂れた。アッシュも微笑みで返す。
「こちらこそ、楽しい時間を過ごせました。キキもジュニアも酔い潰れるまで飲んだのは久しぶりです」
「じゃあ今日は本当に楽しんで下さったのねぇ。私達もこんなにゆっくりパーティをしたのは久しぶりなんですのよ。リゼも本当に楽しそうで・・・・・・良かったわ」
ふと目を細め、紅茶を口に運ぶ。何となく気まずそうにしながらアッシュはミンジアに問い掛けた。
「あの・・・・・・こんな事聞いてもいいのか分からないんですけど・・・・・リゼさんは、以前別の町に住んでませんでしたか？ここから、南の方の町に・・・・・・」
「・・・・・・アッシュさん、もしかしてあなたは、以前からリゼをご存知で？」
「もしかしたら、俺の思い過ごしかも知れないんですけど・・・・・・」
「かまいません。どこでリゼの事を？」
ミンジアの真剣な表情に少し気圧されつつ、遠慮がちに口を開いた。
「・・・・・・約、十年前です。両親の職業の関係上、生まれた時

から街を転々としてて、十歳の時にいたある町に、俺と同い年で“リゼ”という少女がいたんです」
　アッシュは紅茶を喉に通し目を伏せる。
「その子は大きなお屋敷の一人娘で、大事に育てられていたためか友達がいなかったみたいで・・・・・たまたま通りかかった俺がその子を見つけて声をかけたら、本当に嬉しそうに笑ったんです。その町にもそんなに長くはいませんでしたが、その子とは本当に仲が良かった。けど、子供でしたからね・・・・・それっきりです。俺が言いたいのは、リゼさんがその子なんじゃないかと・・・・・」
　ミンジアの顔を見つめた。無表情に、ただじっと見返す真直ぐな視線がそこにある。構わずアッシュは続けた。
「符号する点が多いのも確かなんですけど、分からない事も沢山あって・・・・・なぜこの中央にいるのかとか・・・・・それにこれも俺の憶測ですが、彼女、記憶喪失なんじゃないですか？何かが違うような・・・・・気がするんです・・・・・」
“アっくん”と“リっちゃん”、この二人の関係は。アッシュにはそれが一番のネックだった。
　どこにでもあるような恋人のようで、どこか不自然な二人。アルバは一体誰なのか？なぜリゼを騙しているのか？
「・・・・・リゼさんは、やっぱり俺が知ってるその子なんじゃないですか？ミンジアさん」
「アッシュ、さん・・・・・っ」
　ミンジアが声を上ずらせた。見ればとめどない涙が頬を濡らしている。両手で顔を覆い、肩を震わせた。
「ええ、ええ、あの子です・・・・・あの子に間違いありません！・・・・・リゼを引き取ったのは今から四年前・・・・・そしてあれが起こったのは七年前！ええ、あの子は、リゼは可哀相な子なんです！！ううっ・・・・・」
　嗚咽を漏らしてミンジアが泣き崩れた。アッシュは慌てて椅子か

ら立ち上がるとミンジアの肩を撫でる。アッシュのその手も少し震えていた。
やはり、リゼが“リっちゃん”だった。そしてこれから何が語られようとしているのか。
“引き取った”、“あれが起こった”、そして・・・・・・“七年前”？
心臓が大きく跳ねた。偶然だろうか、その数字には覚えがある。嫌な予感がする。
アッシュが密かに流した癒しの魔術のおかげか、ミンジアは落ち着きを取り戻し笑顔を見せた。ほっと息を吐くとアッシュも椅子に座り込む。
「すみません、思いもかけなかったものですから・・・・・・。アッシュさん。あなたには話しても良さそうだわ・・・・・・あの子――リゼのこと、」
アッシュはゆっくりと頷いた。
「リゼは私の弟夫婦の一人娘です。私たちルクローム家は昔からの名家で、長男であるリゼの父が跡を継ぎました。一人娘のリゼは、それはもう大事に大事に育てられ、無闇に外出させませんでしたから、友達がいないのは弟たちも悩みの種ではあったんです。でも、そう、あなたのお話を聞いて合点がいきました。ある時久しぶりにリゼに会って、その活発な様子に驚いたものです・・・・・・友達が出来たんだと、本当に嬉しそうに私たちに話して聞かせてくれました・・・・・・あなただったのですね」
忘れた事などないリゼとの時間を、アッシュははっきりと思い出していた。一つ一つ、埋められていく空白の時間。欠けていたピースが一つ、ぱちりとはまっていく。
「幸せでした。本当に。・・・・・・あのことさえなければ・・・・・・」
ミンジアのトーンが坂道を転げ落ちるように急落した。アッシュは固く眉を寄せる。

「あのこと・・・・・・・？」
「・・・・・・魔術師さんならご存知かしら・・・・・・七年前、伝説の魔物に襲われたある小さい町の事、」
「――――ま」
さか、と、最後は言葉を呑み込んだ。
それでも充分にアッシュの反応を理解したミンジアが首を縦に振る。
「襲われたのは私の故郷――弟家族が住んでいた町。ほぼ全滅だったそうです。リゼは数少ない生存者の一人、そしてルクローム家でもたった一人の生存者でした――」
「・・・・・・・・・・・・・」
まずは何も、言葉が出てこなかった。
あの魔物が襲った町がリゼの住む町だと、どうして想像できただろうか？この世界に、小さい町はごまんとある。
「それからのリゼは、地獄のような日々です。親戚たちはリゼに残された莫大な財産目当てに群がり、誰が引き取るか、それはもう醜い争いでした。誰もリゼの気持ちなんて考えていなかった・・・・・・ですから何が何でも私たちがリゼを引き取るつもりでしたわ。それなのに、結局裁判で負けてしまい、リゼは母方の親戚に引き取られる事になったんです。でも」
そこで一たん言葉を切り、首を横に振った。大きくため息を吐く。
「引き取られた家で実際にどんな目に遭ったのか、私には分かりません。ただ、あの子は逃げて来たんです。きっとひどい扱いを受けたんでしょう。三年ぶりに会うリゼは、終始怯え、殆ど話さず、笑顔も失われていました。そしてアッシュさんの仰る通り、あの子はその当時、全ての記憶を失っていたんです。私たちのこともちろん覚えていませんでした。・・・・・・ああ、でも、正確には一つだけ、あの子の中に残っていた記憶があります」
「ひとつだけ？」
「はい。それに気付いたのは、暫くしてからです。リゼは逃げて来

たと言いましたが、実際あの子自身にそんな事をする気力などなかった。リゼを、あの引き取られた家から連れ出してくれた人がいるのです。それが、“アルバ”さん・・・・・・。暫くしてリゼに私たちの記憶が戻ってきた頃、あの子が話してくれました。ずっと“彼”を待っていたんだと・・・・・・いつかここにいる自分を見つけ出して、救ってくれる事を信じて、待っていたんだと。つらくて苦しい現実の中であの子には、それだけが光でした。そうやって、どん底の中でも何とか生きていく意味を、持ち続けてきたんです・・・・・・・・・・・っ」

ミンジアはきつく眉を寄せ、俯いた。涙がひとつ、テーブルの上にこぼれ落ちる。

その様子を瞳に捉えながら、アッシュは言い知れぬ怒りが込み上げてくるのを必死に制していた。震える声で口を開く。

「“彼”・・・・・・というのは・・・・・・」

「ええ、アルバさんの事です。“アっくん”と、リゼは呼んでいますが・・・・・・。記憶の中にそれだけが残っていたようで・・・・・・」

アッシュはぐっと、拳を握った。頭の中はさまざまな事がぐちゃぐちゃに駆け巡り、発すべき言葉が見つからない。目の前が揺れた気がした。

「リゼにとって“アっくん”はよっぽど、大切だったんだと思います。私にはどういう事か、分かりませんけど・・・・・・アルバさんには感謝しています。あの人の存在が、確かにリゼを救ってくれているんですもの。アルバさんがいなくなったらリゼはどうなってしまうか・・・・・・」

リゼの太陽のような笑顔を――輝く、笑顔を――アッシュは今でもありありと目の前に思い浮かべる事が出来る。ずっと、あの頃のままでいるはずなどど、どこかで当然の様に考えていたのは紛れも無い事実だ。

（知らなかったんだ）

知る術がなかった。それは、理由になるだろうか。ただただ悔しい。このとめどない怒りは自分自身へのもの。何も出来ない自分を呪いたかった。
（なんでだ！――なんで――なんで！――っ・・・・・・）
無意味な疑問符ばかりを繰り返してしまう以外に、この気持ちを抑える術がない。疑問と、後悔と。
そして・・・・・・・運命を。
（違う・・・・・・“アっくん”は俺だ・・・・・・あいつじゃない）
そう、リゼがずっと待っていたのはアッシュなのだ。もう一度“あの時”の様に見つけてくれる事を信じたのではないのか？あの時も、リゼにとっては奇跡だったのだ。窓から顔を出す自分を見つけて、友達になろうと言ってくれた事。
「アッシュさん」
「すみません、俺が・・・・・・」
リゼはあの“約束”を、ただそれだけを信じていたに違いない。他のどんな記憶が失われても、それだけがリゼの心を支え続けていたのだと、ミンジアはそう言うのだ。
（でも、だから？）
悔しいが、アッシュは分かっている。そうして真実を知ったところで状況は大して変わらない事も。
リゼはアルバを愛している。アルバもリゼを。そして二人は結婚するのだ。例えアルバが名前を偽っていたとしても関係ない。アッシュが遅すぎた、ただそれだけの事。
「・・・・・・本当に、二人が結婚する事になって・・・・・・良かった・・・・・・良かった・・・・・・」
それが答えだった。
真実を知っても、全ては二人が上手くいっていることで解決される。アッシュにとったらなんという皮肉な話だろうか。
（リっちゃんが幸せなら、それでいい・・・・・・充分だ）

祈るように数瞬、瞳を閉じ、ゆっくりと瞼を開く。落としていた視線を上向けた。笑おうとして。
「アッシュさん・・・・・・」
だが、そこにあったのは、一層苦痛に満ちたミンジアの表情(かお)だった。
「・・・・・私には、分からない事が一つだけ、あるんです。どうしても、分からない事が」
沈黙が二人を包む。ミンジアの張り詰めた声音に、呼吸さえ出来なくなるような気がした。
「・・・・・・リゼは本当に、幸せなのかしら、って・・・・・・」
「！」

――リっちゃん・・・・・・君は、今幸せ？――

アッシュは奥歯を噛み締め、両手の拳を力の限り握った。
「すべて話して下さい――お願いします・・・・・っ」
不安は的中した。幸せでないと許せない。
自分自身が、許せない！
ミンジアは暫くして、とうとうその重い口を開いた。

第四章：欠片6

「・・・・・・あの子は、いつも笑っているんです。でも、本当に笑っていると思った事はほとんどありません――・・・・・・」

今の暮らしをリゼ自身はとても幸せだと言う。しかしミンジアにはリゼが無理をしているように思えてならなかった。確かに、幸せだと言うリゼの言葉に偽りはないのだろう。全てを受け入れ、救ってくれた“アっくん”を信じているが故に。

「でも、」

ミンジアは重々しく息を吐いた。

知っているのだ。

アルバに別の彼女がいる事を。

「！？」

アッシュは目を見開く。咄嗟に声が出せず、呆然と空間を見詰める。

（なんだこれは・・・・・・？でも、結婚するって・・・・・・結婚、するんだろ・・・・・・！？）

疑う様なアッシュの視線をミンジアは否定しなかった。

「あの時は、私も、我が目を疑いました」

ミンジアが目撃したその時、物騒だがアルバを殺してやりたいと思うほどはらわたが煮えくり返った。リゼが騙されていた事に、悔しい気持ちでいっぱいになった。とても許す気にはなれなかった。

そんなとんでもない男を信じきっているリゼが可哀相で、その事をリゼ自身にもさりげなく告げた事がある。なるべく傷つかないように言葉を選ぶとしても、どんなに嘆き悲しむだろうかと思うと気が引けたが、それでも伝えなければという思いでリゼに向かった。

しかし、リゼは意外にも表情を変えなかった。それどころか微笑みさえ浮かべてこう言ったのだ。

「“アっくん”は、最後には私を見つけてくれるわ。これまでもそ

うだったし、きっとこれからも。だからそれは私には関係ないのよ、伯母さん」
　もう何も言葉がなかった。ミンジアは「ええ・・・・・・」と相づちを打つので精一杯だった。あの時ほど、リゼの微笑みが悲しいと思った事はない。きっとすでに知っていたのだ。アルバに別の彼女がいる事実を。
　ミンジアは居た堪れなくなって厨房の奥にこもり涙を流した。リゼのためを思うなら、アルバをリゼから奪っては駄目なのだと痛感したのだ。どんなつらい現実もリゼは見ようとしない。もう心がはちきれてしまう寸前で何とか持ち堪えていられるのは、“アっくん”を信じているからだ。それが無くなってしまえば、リゼはきっと生きていけない。そこにすがりつくしか残されていないのだ。
「そんな悲しい事があっていいのかと、私は神様を恨みました。あの子ばかりがなぜこんなにも辛い目に遭わなければならないのか・・・・・私には分かりません。あの子の言う様に、アルバさんが最後に選んだのはリゼだと分かり、本当に嬉しかった。・・・・・・でも、これでいいのかしらって・・・・・・やはり思わずにいられないんです・・・・・・ッ・・・・・・！」
　耐え切れず、ミンジアが嗚咽をもらした。眼前に突きつけられたものをどうやって受け容れたら良いか、両手の拳を握り締め、アッシュはしばし沈黙する。
　神は、人類に等しく・・・・・・
（神？・・・・・・あぁ、そうだ・・・・・・・でも・・・・・・）
　でも、それ以前に絶対に見過ごしてはならないものがあるはずだ。人為的な、力――を。
（これでいいはずがない！最後に見つけるのは――！）
「俺じゃなきゃ駄目なんです・・・・・・」
「・・・・・・え？」
　言葉の意味を解しきれず、間の抜けた声と共にミンジアが顔を上げた。アッシュは確信する。

「俺じゃなきゃ、リっちゃんは救えない！」
まだ間に合う。本当に手遅れになる前に。
アッシュの中にもう迷いはなかった。

「！？」
静寂の中の異変を、鋭くアッシュが捉えた。紛れもない、魔物の気配。
「？アッシュさ――」
がしゃあああん、とガラスの割れる音。
「！！リっちゃん！！」
微かに聞こえたのはリゼの悲鳴だった。
「リ、リゼ！？あの子の部屋の方だわ、一体何が・・・・・・・あっ、アッシュさん・・・・・・！」
「失礼します！そこを動かないで下さい！」
アッシュは嫌な予感に全身が震えた。
（間に合ってくれ！！）
二階に続く階段を途中から魔術で飛び、何の迷いもなくアッシュは走った。もちろんリゼの部屋など知るはずもなかったが、溢れる殺気が居場所を教えているのだ。それは以前にも感じた事のある、恐ろしい程の執念の塊。何のためらいもない殺意。
（間に合え！！）
右手にはいつでも発動可能な魔術。アッシュは突き当たりの扉を蹴り開けた。
「リっちゃん！！」
叫びと共に弾け飛んだ扉の代わりに、目に飛び込んできたのはレーウェイだった。そしてリゼの姿も同時に確認出来た事に、アッシュはザッと血の気が引く音を聞いた気がした。
リゼがベッドの上で苦しそうに声を漏らす・・・・・・レーウェイに掴まれている首周りに手の指を食い込ませて必死に隙間を作ろうとしていた。レーウェイの瞳がうっすらと赤みを帯び始めている。

アッシュに思考する余裕は無かった。右手の魔術が一気に膨張する。
「ラバスッ！！」
レーウェイの顔面にアッシュの魔術が命中する。魔術球で捕らえられたレーウェイは一瞬魔術を封じられ、その動きを止めた。魔術球を解除しようとレーウェイが手を動かしたその隙にアッシュは魔術で飛び、ベッドに転がったリゼをしっかり掴んだ。そのまま後ろに飛びながらさらに魔術を放つ。
「爆っ！！」
至近距離からの衝撃でレーウェイが大きく後退した。リゼを床に寝かせると間を置かず叫んでいた。
「リ＝ガルス！！」
どおおおんという爆発音と共に、巨大な衝撃波が怯(ひる)んだレーウェイを簡単に窓の外へ吹き飛ばした。割られた窓が完全に原形をなくし壁に大きな穴が開く。
アッシュは壁に駆け寄り外を覗き、はっと息を呑んだ。気を失ったレーウェイの横に腕組みをして見上げている男。
「！アルバ・・・・・・おまえ、まさか魔物を――」
「・・・・・・アっくん・・・・・・？」
背後から、掠れる声で呟いたのはリゼだった。
（しまった！）
アッシュが振り返ると、ふらふらとリゼが歩み寄って来ていた。そして外に視線をやったままその場に力なく座り込む。その瞳は真直ぐにアルバへ向けられていた。
（くそ！何がどうなって――）
もう一度アルバに視線を戻す。
「！？」
アッシュは目を見開いた。レーウェイの姿がない。目の前を一瞬黒い陰が横切る。
（しまっ――！！）
次の瞬間にはもう、リゼの姿が無くなっていた。

「リっちゃん！！」
リゼを奪ったレーウェイが暗闇に消える。
「くそっ！！」
アッシュは壁を拳で一撃した。パラパラと土がこぼれる。しかしレーウェイはリゼをこの場で殺さなかった。誰かの命を受けているのだろう。
すぐにでも追いかけたい衝動を堪え、ぎっ、とアルバを睨み付け叫んだ。
「アルバァ！！お前の黒幕は誰だ！？なぜリゼを狙う！！」
じっとアッシュを見上げているアルバから答えは返らない。アッシュがさらに声を荒げる。
「答えろ！！」
そこで、とうとうアルバがあからさまに顔を歪ませた。
「アッシュ・・・・・・お前がなぜいるのか知らんが、とんだ誤算だ！どこまで俺の邪魔をすれば気が済むんだ？」
「何の・・・・・・ことだ・・・・・・」
「リゼは今夜、魔物に襲われて死ぬはずだったんだ」
「！おまえ――」
「リゼを殺すよ」
「！」
「そんなに助けたいなら、ついて来たらどうだ？」
言い終わるかそうでないかという所でアルバが暗闇に走り去って行く。アッシュは床を蹴ると外に着地し、そのまま後を追って走り出した。
向かう先は暗闇――しかし、アッシュはそれ以上に嫌なものを感じ取っていた。何かは分からない。だが、とてつもない悪い予感。
（リっちゃん！無事でいてくれ！）
途切れる事のないアルバの気配を追って、アッシュは導かれるようにそこへ足を踏み入れていた。

＊　＊　＊

ガラスの割れる音がしてアッシュが走り去った直後。
ジュニアとキキもその騒ぎとただならぬ殺気に、はっと目を覚ました。飛び起き、神経を集中させる。
「なにこれ・・・・・・すごい・・・・・・魔物？」
キキは今まで感じた事のない気配に体を震わせジュニアに視線をやる。ジュニアが縦に首を振って肯定の意を示した。
「もの凄い殺気だ。ここの二階か・・・・・・アッシュが行ってるな。派手にやるかもしれない」
おそらくアッシュが発動しているのだろう、微かな魔術の気配を感じ取り、ジュニアは二階に続く階段に視線をやるが、自身は反対に入り口の扉の方へ歩いて行った。
焦燥に満ちた表情でキキも長椅子から立ち上がる。
「二階に行かないの！？アッシュ一人じゃ・・・・・・ミンジアさん！アッシュは上へ！？」
階段の前で心配そうにうろうろとしていたミンジアに声をかけた。ミンジアは「ええ」と首肯する。
「ガラスの割れる音がしたと思ったら、アッシュさんがもの凄い勢いで上に・・・・・・。あの・・・・・・魔物って・・・・・・上にはリゼが・・・・・・っなぜ、こんなにも続けてリゼのところに魔物が？」
「落ち着いてミンジアさん。アッシュが行ってるならきっと大丈夫ですから！」
青ざめるミンジアをなだめる様にキキが言った。ジュニアも頷く。
「家の中は狭い。俺が行ったとしても何も出来ないし、あいつはきっと、とりあえず魔物を外に追い出す」
「・・・・・・なるほど。下でジュニアが仕留めるってことね！」
その時、階上からどんっという音が響き、揺れた。そして激しい足音。立て続けに爆発音。ジュニアは扉に手をかけいつでも飛び出

せるよう体勢を整えた。そして、今度は一番大きな魔術のぶつかる音が響き、どおん、と家全体を揺らした。外でも大きな物音がする。
（今だ！）
ジュニアが扉へかけた手にぐっと力を込めた瞬間、ふとした、何気ないもう一つの気配を捉えその動きを止めた。
「ジュニア？」
「――誰かいる」
「え？どういう――」
言いかけたキキの言葉を左手を掲げて制すと、ジュニアはそっと扉を開け隙間を作った。そこに飛び込んできたのは黒っぽい服を来た男の姿だった。腕を組んだまま上を見上げ、立ち尽くしている。
（魔術師ではないな）
ジュニアは気付かれないよう息を潜め、どこかに転がっているはずの魔物の姿を必死に探した。気絶しているのか、微弱な気配だけでは正確な場所を特定するのは困難だった。しかし、もたついても居られない！
そうして出方を判断しかねたジュニアは、焦る気持ちを持て余しながら状況を見守るしかなかった。
が。一瞬の気配の“ぶれ”。
（しまった！！）
もの凄い速さで魔物の気配が消えた。
「リっちゃん！！」
同時にアッシュの叫び声が耳に飛び込み、リゼに何かあったのだと悟る。ジュニアは自分の不甲斐なさを呪うように奥歯を噛み締めた。
（くそっ！一体どうなってるんだ・・・・・・！）
男の姿を捉えるので精一杯な隙間だけでは状況の把握など出来る筈もない。ジュニアが意を決し、再度飛び出そうと構えた時だった。
「“アルバァ”！！お前の黒幕は誰だ！？なぜリゼを狙う！！」
凄まじい怒りに満ちた声は、その場に居たキキとミンジアにもは

っきりと聞き取れた。
驚くべき男の名を、確かに聞いた。
「アルバ・・・・・・って、まさか――」
はっと、キキは言葉を切り、ミンジアを振り返る。ミンジアは呆然と、ただ立ち尽くしていた。見開かれた瞳が空中を泳いでいる。
さらに荒げられたアッシュの声が夜の闇に響いた。
「答えろ！！」
ジュニアはアルバの姿を捉えたまま息を飲んで見守る。アルバの顔が憎憎しげに歪められるのを見た。
「アッシュ・・・・・・お前がなぜいるのか知らんが、とんだ誤算だ！どこまで俺の邪魔をすれば気が済むんだ？」
（誤算？何だ・・・・・・？）
「リゼは今夜、魔物に襲われて死ぬはずだったんだ」
「えっ――！」
思わず声を漏らしてしまったキキが、慌てて口を塞いだ。しかしあまりの衝撃に体が震え出す。
「リゼを殺すよ」
（こいつ！）
「そんなに助けたいなら、ついて来たらどうだ？」
言い終わるかそうでないかという所でアルバが視界から消えた。
（逃がすかっ！）
ジュニアが勢いよく扉を押し開けると同時に、目の前をアッシュの姿が掠める。アルバを追って暗闇に走り去って行く。
「キキ！ここ頼んだよ！」
それだけ言い残しジュニアもアッシュの後を追って飛び出した。
「え、ちょっと、ジュニア！！」
キキの声もすでに届かない。あまり状況の飲み込めないまま大きく嘆息した。
「大丈夫なのかな・・・・・・」
入り口に歩み寄り、万が一のため扉を閉める。そしてミンジアを

振り返った。
「二人に任せておけば絶対大丈夫ですから！とにかく座りましょうか」
キキが促すが、ミンジアは視点の合わない瞳を泳がせ、震える声で呟いた。
「ア・・・・・・・アルバさんが・・・・・・・リゼ・・・・・・・リゼが・・・・・・」
がたたっ、とミンジアが床に倒れ込んだ。
「ミンジアさんっ！！」
キキが駆け寄り、ミンジアを抱き起こす。ショックからか完全に意識を失っていた。
「うん・・・・・・。あれ・・・・・・俺こんなとこで寝ちまってたのか・・・・・・」
やっと騒ぎに起こされたのか、店の主人が目を覚ました。キキが青ざめた表情で主人を見上げる。
「伯父さん！ミンジアさんが気を失っちゃって！」
「え！？お、おい、大丈夫か！？こりゃ大変だ！とにかくそこ、その長椅子に寝かせよう！ええーと・・・・・・っ！」
焦るあまり主人が椅子に足をぶつけた。いてっ、と飛び跳ねる。
「伯父さん、ここに寝かせますね！」
「お、おお、そうだな・・・・・・！」
ミンジアを安静にさせた二人は床に座り込み、同時に吐息する。
「一体どうしたんだ、ミンジアのやつ・・・・・・」
訳を全く知らない主人がぽつり、呟いた。
キキは悲痛な面持ちで俯く。どこからどうやって話していいのか。キキにも分からない事だらけなのだ。
（とにかく、アッシュとジュニアを待つしかないわね・・・・・・）
カーテンの隙間からのぞく暗闇に思いを馳せ、もう一度溜息を吐いた。

第五章：透明なイト１

「あの子はうちが引き取るわ。私たちにだってその権利があるはずだもの」
「ものすごい遺産なんだぞ？あの子が一人でどうにかできるものじゃないだろう？」
「あなたたちに心はないの？あの子の事を一番に考えるべきですわ！」
「キレイ事だ。金の事は一番に決着付けといた方が、あとあともめんでいいだろう」
「いいえ私が絶対にあの子を引き取ります！あなたたちになんか任せられませんわ！」
「遺産を独り占めするつもりですの？納得いきませんわ！」

ねぇ？
奇跡って、信じる？

「ごめんね、リゼ。伯母さんあなたを連れて行けなくなっちゃったの。何かあったら、いつでも迎えに行くからね」

私は信じない。
だって、奇跡じゃなく、それは必然。

「・・・・・・ばいばい」

私は知ってる・・・・・・

「何でも私に言っていいのよ。分かった？」
「リゼ？変ななまえ！！なんでいっつも泣いてんの？ばーか！！」
「あいつ無視しようぜ。何で父さんも母さんもあいつをここに住ませてんの？俺やだよ！」
「しょうがないでしょ。いろいろあるのよ、我慢しなさい。・・・・・・・リゼも悪いのよ？もう泣くのは止めなさい！」
「このっ、ガキが！！」
「手をあげたらちょっとまずいわよ・・・・・・。やめておいてくださいな」
「はぁ・・・・・。もう限界だわ。しゃべらないし、笑わない。いつも窓の外を見てばっかり・・・・・。あの子、おかしいんじゃないかしら？」

必ず、もう一度。

「引き取るんじゃなかったわ！」

何もなくてもいいの。
あの時とおなじだもの。
そう、きっと、こうやって窓から外を見ていれば・・・・・・

『ねえ、そこで何してるの？』

『今から出ておいでよ！僕と遊ぼう！！』

気のせいなんかじゃない。
きっとまた。
ここから救い出してくれる。

『僕がどこにいても、リっちゃんがどこにいても、絶対に僕はリっちゃんを見つける！！約束する！！』

顔も声も全部思い出せない。
でも“アっくん”はいる。
もうここに居たくないよ。
私はいつだってこうやってあなたを待ってる。
今日かもしれない。明日かもしれない。
だからもう少しがんばって。
がんばって、生きて・・・・・・・・・・・・

――――お父さま、お母さま、おじいちゃま、マグナルせんせい、犬のジョン、マリイせんせい、アニア、シリス、窓から見てた女の子たちも男の子たちも家も鳥も木も空も、みんなみんな消えて無くなった！！

・・・・・・そう、死んでしまった。

恐ろしく大きな魔物が来て、あっという間にみんなを殺してしまった。
・・・・・・だから私は、ひとりぼっち。

・・・・・・なぜ？
なぜ私は一人なんだろう？なぜ？

ねぇ、聞こえる？

今あなたはどこにいるの？
私はここよ。
約束してくれた。見つけてくれるって。
私はここにいるよ。ここに・・・・・・だから早く。

“アっくん”

「君がリっちゃん？・・・・・・もう大丈夫。迎えに来たよ。俺と遠くへ行こう」

待ち望んだ光だった。
きっとこんな声だったはず。
こんな顔だったはず。
そして、そう、こんな温かい手だった。

奇跡を、信じていた。

第五章：透明なイト2

暗闇をどれくらい走っただろう。木々がざわめき、足元は不安定だ。

アッシュはここが森の中だと悟る。生い茂る木々の間からは微かな月の光がちらちらと揺れるだけだった。

薄れる事のない気配を追ってアッシュは森の中のちょっとした空間に辿り着き、足を止めた。大きな一本の木の前にアルバとリゼの姿を見つける。

その背後には静かに佇むレーウェイの、濁った緑色の瞳が不気味に浮かび上がっていた。レーウェイは何者かの指示を受けているのか襲ってくる気配はない。

「そこを一歩でも動いたらリゼを殺す」

アルバの乾いた声。

アッシュはリゼの微弱な呼吸のリズムを失いたくないかのように、意識を鋭敏に研ぎ澄ませていた。

その中に、例え様のない気配を感じ眉根を寄せる。

それははっきりとしたものではない。気配を消しているのだろう、そしてほぼ完璧にそれを行っている。しかしそれをなぜか捉えてしまっている、そんな不思議な感覚だった。

だが今はそれに意識を向けず、ただ真直ぐ目の前を見詰める。

「・・・・・・ここに俺を連れて来たのは分かってる。目的は何だ？」

抑えられた声のトーンではあるが充分に怒気（どき）を伴っていた。

アルバは質問には答えず、気を失っているリゼの髪の毛を掴み引っ張った。リゼは顔を上げた格好になり、苦しそうな声が漏れる。

「やめろ！」

アッシュの叫びが空間を割（さ）いた。

リゼが目覚めたのを確認するとアルバは髪の毛を掴む手を離す。

が、すぐに態勢を変え、リゼの喉元に、持っていたナイフを突きつけた。
「・・・・・・」
アッシュは無言で様子を見守っていたが、すぐにどうこうする訳ではないというのが見て取れた。
「動くなよ。俺は本気だ」
「アっくん・・・・・・なの？」
虚ろな目をしたリゼがそう問いかけた。意外としっかりとした声音にアッシュは少なからず安堵する。
アルバはちらとリゼに視線をやり、ふん、と鼻を鳴らした。
「何も知らなければ楽に死ねたのにな、運のない奴だ。恨むんならあいつを・・・・・・アッシュを恨むんだな！」
「死ぬ？」
アルバの強調した所とは別のフレーズにリゼは反応していた。
「どうして、私を殺すの？おしえて・・・・・・」
「・・・・・・」
それはアッシュの心中を代弁したものでもあった。彼だけではない、恐らく事情を知る誰もが欲しかったもの。欠けていた最後のピースの、答え。
アルバはアッシュを睨んだまま、言葉だけをリゼに向ける。
「お前の財産が手に入るからだ。始めからそれが目的だった。お前に近づいたのも、助けてやったのもな。俺には結婚したい女がいる。リゼが死んで財産が手に入れば、そいつと結婚できる。リゼ、お前が死ねば全てが手に入るんだよ！」
アッシュは思わず「くそがっ！」と吐き捨てていた。
「リゼ・・・・・・お前は俺を“アっくん”と言った。俺は正直何の事か分からなかったが、そいつになりきる事で簡単にお前の信用を得る事が出来た。それから少ししてお前の言うアっくんが誰なのか気付いたんだ、そこに個人的な恨みもあったんでな。ついでにその恨みも晴らしてやったさ！お前は本当に利用価値のある女だった

ぜ！」
　アルバが始めて、笑った。この上なく醜い表情(かお)で。
「・・・・・・ッ！」
　アッシュは奥歯を噛み締め拳を握り、今にも殴りかかりたい衝動を必死で抑えていた。腹の底から湧き上がる嫌悪。本当に自らの意思なのか疑いたくなる程だ。人間はここまで落ちる事が出来るのかと、ただただ怒りが込み上げた。
「・・・・・・アっくん、私を離して」
　ふと、リゼの静かな呟きが闇に落ちた。アルバはぐっとナイフを首に押し付け、否定の意を示す。
「私を離して・・・・・・どこにも逃げないから、」
　リゼは微動だにせず、同じ言葉を繰り返すだけだった。
「・・・・・・黙れ」
「どこにも逃げないわ」
「煩(うるさ)い、」
「逃げたりしない」
「黙れっ！！！」
「“アルバ”さん」
　リゼが呼んだ。
　きっとアルバ自身も始めて耳にしたその一言が、辺りを静寂に包んだ。一瞬アルバの手が緩む。
「お前・・・・・・記憶が？」
「・・・・・・本当は、始めから知っていたのかもしれない。あなたがアっくんじゃないということも・・・・・・ただ、信じたかった・・・・・・あなたがアっくんじゃなくても、私をこの暗闇から救ってくれるなら・・・・・・そうしたら私はあなたを信じて生きていけるって」
　リゼの不自然な程透き通った声がアッシュの心をより悲しみの色に染めていく。
（リっちゃん、だめだ！まだ・・・・・・）

覚悟を、というよりも、それは絶望だった。
リゼの口調は色で喩えるなら、無色。今ある状況を嘆くのでもなく誰のせいにするでもない。ただ、受け入れた。そしてきっと“答え”をも、導き出してしまっている。
何度目かの嫌な感覚にアッシュは大きく頭を振った。そこへもう一度あの透明なリゼの声が耳に届く。
「アルバさん、あの日のプロポーズ、本当に嬉しかった・・・・・・。あの時、もう何も考えずにあなたの事を信じようって決めたの。もしも全てがうそだったとしても、今のこの言葉を信じようって決めたの。それだけが私の生きる意味だから・・・・・・」
リゼが少し笑った。
「アルバさん、一つ・・・・・・・聞いてもいい？」
「・・・・・・」
「私のこと、少しでも好きだった？」
一瞬の沈黙。
「利用したんだ。それだけだ」
冷たい言葉が零れる。それは一体何のための問いだったのか。
リゼは相変わらず穏やかな笑みを湛えたまま微かに視線を傾けた。
「私は・・・・・・あなたにとても感謝してる。理由がどうであれ、あそこから助け出してくれて、あなたとの時間、ミン伯母さん達との時間は本当に幸せだったわ。“アっくん”を、演じてくれてありがとう。私に“アっくん”との時間をくれて、ありがとう」
アッシュはじっと、その言葉を聞いていた。あまりにも悲し過ぎて言葉が出て来ない。
「・・・・・・そうね、私はもうずっとこうしたかったのかもしれない。死んだら一人じゃないもの。お父様もお母様もいるものね・・・・・・。アルバさん、私の命、あなたにあげる」
「リっちゃん！！」
リゼの言葉に耐え切れず叫んだのはアッシュだった。
「リゼを離せアルバァ！！」

ただならぬ怒り任せの声音に、リゼはふっと瞳を向ける。首筋の鋭利な刃物などまるで目に入っていない。自分の身の上は本当にどうでもいいかの様だった。
アッシュはリゼの視線を捉え、瞬きもせずじっと見つめた。光の宿らないくすんだ瞳の色。心に焼き付いている輝くような綺麗な瞳は、もうそこにはなかった。ただ、怒りが込み上げた。きつく拳を握り締める。
（どうして！！）
何もかもが遅過ぎたのか？それでもこの偶然の意味を考えずにはいられない。十年前、出会って、別れて・・・・・・そして今、もう一度出会ったのだ。
しかしその決して短くない年月がお互いをこんなにも変えてしまった。
（なぜ・・・・・君じゃなきゃいけない・・・・・・？）
魔物に襲われて全てを失ってしまった幼い少女が、なぜ、リゼでなくてはならないのか。世の中には汚い奴が平気で暮らしているというのに。ともすれば、そんな奴らほど得をしている――。
（でもこれはきっと“運命”ってやつ・・・・・・こうやって、君と俺は出会う事になってたんだ）
起きてしまった事はどんなに後悔しようと嘆こうと、もう後戻りは出来ない。
（やっぱり、君を救えるのは俺しかいない！）
アッシュに分かる事はこの一つだけ。
「――俺は！俺には！君が必要なんだ！まだ終わっちゃいない！」
アッシュの瞳にアルバの影が映る。じっと睨み据えたまま、アッシュはじり、と間合いを詰めた。
「アルバ・・・・・・俺はお前を殺せる。どうやって攻めて来ても俺は全てをかわせる。もう一度言うぞ――リゼを離せ！」
右手には魔術が連動するように輝いた。
「くそ！」

明らかにアルバが動揺を見せた。じりじりと距離を縮めるアッシュに、アルバは逃げ腰になる。
「う、動くな！！リゼをっ、こ、殺すぞ！！」
首筋のナイフに力が込められた。が、その手は小刻みに震えている。
アッシュは無言でそれを見やると構わずもう一歩間合いを縮めた。
「こっちから行くぞ！」
言い終わるのと同時にアッシュはアルバの背後へ飛んだ。
「・・・――ッ！！」
声にならない悲鳴を上げ、アルバはその場で硬直する。
どれだけ粋がっていてもやはり戦闘馴れしていない素人である。
アッシュは更に叫んだ。
「リゼを離せ！」
アッシュの怒声に体を震わせ、アルバの手が緩んだ。出来た隙間からリゼがゆっくりと体を離し、二人を振り返る。
アッシュは素早くアルバの手中からナイフを奪い取り、生い茂る森の中へ放り投げると、今だ動けないでいるアルバに魔術をかけ拘束してしまう。
「しばらくそうしてろ」
アルバは声さえ発せない。
そうして、アッシュは改めてリゼを振り返った。強い瞳でリゼを見詰める。
「リっちゃん」
アッシュが手を差し伸べた。
が。
「・・・・・・」
リゼはアッシュを見詰めたまま、そっと首を振る。
「リっちゃん・・・・・・」
悲しそうに、アッシュを見詰めるブラウンの瞳が細められた。そして又、首が横に振られる。

リゼのそんな態度に当惑しつつも、アッシュはリゼを瞳に映したまま言葉を待った。
アッシュにとっては気の遠くなる様な沈黙を絶ったのは――――
「お願い・・・・・私を助けないで」
リゼの、透明な一言だった。

第五章：透明なイト3

「・・・・・・何で・・・・・・」
アッシュが静かに問いを返す。
「・・・・・・アっくんが誰であっても・・・・・・もう私には関係ない。疲れちゃった。もう期待なんてしたくない」
「・・・・・・」
僅かに乱れた気がした。その言葉がどんなに語気を増したとしても。捉えている。
アッシュの青い瞳が悲しく細められた。小さな空間にこうして向かい合っている事さえ本当は・・・・・・。
どうしたらいいのかは解り切っているのだ。欲しているのは自分だけではない。
「俺が、リっちゃんの記憶に残る“アっくん”だって、もう気付いてるよね？」
アッシュの声が張り詰めた空間に滑り落ちた。静寂に漂う意外な程穏やかな声の余韻。リゼの瞳がほんの少し揺らいだ様に見えた。
「ご両親の事は全部伯母さんから聞いた。全く知らなかったよ・・・・・・。でも、またリっちゃんに会えて良かったって、本当にそう思ってる」
声音は静かだが確信に満ち溢れていた。少しだけ、しかし今度は明らかに、リゼの眉が顰められる。そして呟くように言葉を零し始めた。
「・・・・・・花・・・・・・見せてくれた、あの時に、あなたが“アっくん”なんだって本当は分かってしまった。でも、その事を認めてしまえば私の信じたものが何なのか、また分からなくなるのが恐くて、分からないふりをしたの」
「・・・・・・」
アッシュの表情を窺い、リゼは軽く肩を竦める。口の端がほんの

少し緩んだ。
「・・・・・・アルバさんにプロポーズされて、初めは確かに戸惑ったけれど、最後に彼が選んでくれたのは私なんだって信じるしかないと思った。・・・・・・ほら、あなたが私を見つけてくれた時みたいに、“アっくん”はきっと、最後には私を見つけてくれるって、そう信じたかったの―――」
二人の髪と木々を揺らす微風がゆっくりと空間をすり抜けて行った。風に奪われたと思った言葉の続きが、はっきりとアッシュの耳に届く。
「・・・・・・・でも・・・・・・・違った・・・・・・・甘かったのは・・・・・・私だった、」
もう何も遮るものが無いのにその声は掠れていた。白い頬にちらりと月光が反射するのを、アッシュはじっと見詰める。
「リっちゃん・・・・・・」
後から後から、涙は止まらなかった。リゼが眉を顰め、思わず両手で顔を覆う。彼女自身なぜ泣いているのか分からない様だった。
アッシュがやっと辿り着いた、リゼの心の奥底に隠され続けてきた本当の気持ち。溢れる涙がそれを物語っている。そうやってリゼは何とか希望を持って生きてきたに違いない。アルバの一言一動に心を揺らしながらも、必死にしがみついてきた。今にも壊れてしまいそうな心を支えてきたのだ。
そして、裏切り。
アッシュはリゼに触れようと歩み寄り、手を伸ばした。が、出来ずに、伸ばした右手はまた元の位置に戻される。リゼの細い肩が小刻みに震えていた。
「・・・・・・まだ、終わりじゃない・・・・・・俺達はまた出会えたんだ」
リゼは涙を拭ってアッシュを見上げ、ゆっくりと首を横に振った。
「もういいの・・・・・・もうやめて」
「リっちゃん！」

「もう遅いの！今更出会ったって、もう・・・・・・・っ私には分からない！」
「俺には分かる！！出会えた意味が何なのか・・・・・・・リっちゃんを救えるのは今しかない、俺しかいない！」
アッシュは必死でリゼの瞳に訴えかけていた。全ての希望の光を見失ってしまった瞳。
「わた・・・・・・・し、本当に・・・・・・・分からないの、どうしていいか・・・・・・分からない・・・・・・・ッ・・・・・・」
また、涙が頬を伝う。
「苦しくて、つらくて、信じても・・・・・・・ッ信じても！答えは見つからない！・・・・・・生きていることが私にはね、地獄と同じなの。これ以上何を信じたらいい？どうしたら心から笑える？・・・・・・もう、楽になりたいっ――」
アッシュはリゼの腕を引き寄せた。その力の限り抱きしめる・・・・・・ずっと、そうしたかったのだと、そう言いたげに。
「もういい・・・・・・・十分頑張って生きてきた。つらかったはずだ・・・・・・でも、だから、また俺はこうしてリっちゃんに出会えたんだ・・・・・・ずっと、信じてくれて、ありがとう」
固く強張っていたリゼの体から徐々に力が抜けていくのが分かっても、アッシュは一切力を緩めなかった。
「もう頑張らなくていい。信じなくていい。そのままでいいよ・・・・・・俺が守るから・・・・・・だから、お願いだから、俺のために生きて・・・・・・！」
リゼの体が震えた。アッシュの腕の中で嗚咽が漏れる。リゼは一度だけアッシュの名を呼んだ。
すべて、なにもかも、ゼロにできたら。リゼがアッシュにぎゅっとしがみついた。強く、強く。もしかしたらここが、自分の信じていた奇跡なのだと、もう一度思ってみてもいいかもしれないと。今だけは何も考えずに、もう一度、そこへ。
「ッ・・・――！！」

それは恐らく、リゼが初めて求めた――救い――だった。

「！」

タイミングを待っていた様な、一瞬の気配がアッシュの神経を尖らせた。反射的に上空へ視線を投げる。微かな“ぶれ”――というよりも、先程からアッシュに違和感を抱かせる奇妙な感覚。

しかしそれを認識するよりも早くアッシュの五感が捉えたのは、知り尽くした感覚だった。聞き紛(まが)う事のない魔術独特の、音。

「ッ！！」

上空から魔術が放たれ地面へ突き刺さった。間一髪で避けたアッシュはリゼを抱きかかえるようにして地面に転がった。

「ここにいて！」

素早く身を起こしたアッシュの目の前に、先ほどまで動く気配のなかったレーウェイが殺気を露わに立ちはだかっていた。そのすぐ後ろでは確かに魔術で拘束していた筈のアルバが数歩後退る。恐れと、狂気の入り混じった不気味な笑みが妙に脳裏に焼き付いた。

（どうなってやがる！？）

アッシュはレーウェイを睨みつけながら臨戦体制をとるが状況がはっきりしない。微かに迷いが生じた。相互が出足を窺っている中、突如目の端に人影が動いた。魔術で拘束していたはずのアルバだ。アッシュは後ろにいるリゼに思い至り、思わずアルバへと視線を動かした。それが一瞬の隙になった。レーウェイが待っていたかの様な俊敏さで魔術を放つ。視線を戻した時には閃光が視界を遮っていた。

「――――――ッッ！！」

アッシュは顔を歪ませ、焼ける様な激痛に呻き声を上げる。――鮮血が滴った。

「――ッく、そっ・・・・・・・ッ痛ってぇな！！・・・・・・っ！！」

腕が吹き飛ばなかっただけ幸運である。直撃を免れた左手を持ち

上げ乱れた呼吸間に呪文を吐き出そうとしたその時。
「アっくん！！」
リゼの悲鳴に似た声が背中に突き刺さった。
「リっ――！」
反射的に振り返ったアッシュの目に、再度アルバに捕えられたリゼが飛び込んできた。森に投げ入れたはずのナイフがアルバの右手で鈍く月光を反射している。背を向けたレーウェイからは新たな魔術の音。
「くそ！！」
アッシュが半身で決断しかねていた一瞬。
「イギ＝ルーフ！」
「ぐあああっ」
アルバがナイフを落とし、身を捩らせた。体がきつく拘束された様だ。見慣れた術剣をアッシュの目が捉えた。
「――ギィィィォォ！！」
背後のレーウェイから魔術の発動された気配と同時に。アッシュはレーウェイに向き直りながら魔術を放っていた。術同士のぶつかり合う爆音が耳を突いた。反動で生じる爆風が木々を揺らす。
すでに迷いはない。立て続けに魔術を三発打ち込み、僅かに怯んだ所へ相手の間合いへ飛び込んだ。レーウェイでさえ捉えられない迅（はや）さ。腰を落とし、レーウェイへ両手を向けた。右腕からは血飛沫が散り、アッシュは奥歯を噛み締め呪文を口にした。
「風塵（ふうじん）」
どんっ、と圧迫された空気が弾けたかと思うと、静かにレーウェイの体が砂へと変わった。風に散ってゆくその身からは、ただ一音も発されはしない。全てが塵と化した時そこには核さえ残らなかった。
一瞬の静寂。
リゼを庇いシールドで保護していたジュニアが声を投げる。
「アッシュ！大丈――」

「動くな！！」
アッシュが制した。
「まだだ・・・・・・！」
目を見開き、アッシュは勢いよく上空を仰いだ。完璧な気の消失を行っているのだろうが、それでも尚、体に流れ込んで来るとてつもなく鋭利で冷ややかな気。そして、きっとあまりに近すぎる生命のオーラ。アッシュの体はそれらを無意識に感じ取っていた。
「出て来い！！」
夜の森に木霊すアッシュの叫びに応える様に視界の中で影が動いた。目の前にある大木の、ある一枝の上。
「・・・・・・やはりお前には隠し切れない様だな。微妙な生気の漏れを感じ取ったか・・・・・・」
「――――っ！！」
アッシュは驚愕のあまり硬直していた。視界に飛び込んで来たその姿は。
微かに入り込む月光に輝く、濁った灰色の頭髪。冷たく細められた双眸はアッシュのそれと同じ深いブルーだった。男は軽く枝を蹴ると、静かに地面へ両足を着地させる。
そうして対峙した男は、あまりにアッシュと似ていた。目線の位置もただ真直ぐに前を見つめれば良い。そして何より、声。話し方こそ違うが、それは明らかに“同じ”だった。
「久しぶりだな、アッシュ」
「・・・・・・“ディル”・・・・・・・・！！」
アッシュの声が掠れた。

第五章：透明なイト４

「リシュディル・・・・・・っ！あいつが・・・・・・！」
少し離れた位置でずっと状況を見守っていたジュニアも驚愕し、身を震わせた。
アッシュとは一卵性双生児だと知ってはいたが、二人の持つ「気」までもがこんなに酷似していることに恐怖さえ覚えた。
二人が纏っているのは明らかに相対的なオーラである。しかし神経を研ぎ澄ませば澄ます程、二人のオーラを判別出来なくなる。ジュニアはぎゅっと拳を握った。
ふと、隣にいるリゼが震えている事に気付く。ジュニアはそっとリゼの肩を掴んだ。しかし震えは治まるどころか発作のように激しくなっていった。顔色は蒼白で、脂汗が吹き出している。リゼはがたがたと体を震わせながら何事か呟いた。
「・・・・・・ッ・・・・・・・・・――・・・・・・ッ！」
「リ――」
ジュニアが問い返そうと言葉を発するより早く、アッシュの声が空間を裂いた。
「ディル！！お前っ・・・・・・・何でここにっ・・・・・・・っ・・・・・・今まで一体っ・・・・・・・！」
「話は後だ」
口を開くのと同時にリシュディルは魔術を放っていた。アッシュは完全に隙を突かれ反応出来ない。魔術がアッシュの真横を掠めて行った。
次の瞬間アッシュの背後で悲鳴が上がる。リゼだ。
「――――っ！！」
振り返ったアッシュの眼に飛び込んできたのは、地に伏したまま動かない相棒の姿だった。魔術をまともにくらったのだろう、アッシュの位置からでは息があるのかどうかも判別出来なかった。

「ジュニアァッ！！」
すぐさま駆け寄ろうとしたアッシュの右手をリシュディルが掴んだ。傷口の強烈な痛みにアッシュは呻き、凄まじい形相でリシュディルを睨み付ける。
「離せっ！！何であいつを狙った！！」
「邪魔だからだ。・・・・・・アッシュ、お前もここでしっかりと見ていろ」
「な、にを――・・・・・・っ！」
状況の飲み込めないアッシュを余所に、リシュディルは又視線を上げた。嫌な予感がして弾ける様にアッシュも背後を振り返る。と、自由の身になったアルバがリゼの両手を後ろで掴んでいた。
「いやっ！離して！アっく―・・・・・・！！」
「くそ！！やめろっ！！」
腕が千切れそうな程の痛みに堪え手を振り払いアッシュが駆け出そうとしたその時、体が動かなくなった。魔術だとすぐに分かったが、遅かった。毒吐こうとするが声も出せない。
「・・・・・・ッ・・・・・・！」
「“ここで”見ていろと言っただろう」
感情のこもらない冷ややかな言葉。
躊躇のないリシュディルの行為に、アッシュは言い知れぬ恐怖を感じていた。それはまるで何も知らない子供の様なのだ。同じ血を分けた兄弟なのに他人よりも遠い気さえした。
（くそ！どうしたらっ・・・・・・！）
ただ一つ正常に働く思考回路をフル回転させて打開策を講じてみるも、リゼの怯えた姿に焦りは加速するばかりだった。
リシュディルはアッシュから視線を外すとアルバに言葉を向ける。
「これで邪魔はなくなった。アルバ＝オートバース、お前の‘願い’を叶える最後のチャンスだ。さあ、その女を殺せ」
（やめろ！！）
アッシュは心中で叫ぶと同時にかけられた魔術の糸口を探す。ア

ルバは微かに笑ってはいたが、ナイフを持つ手は小刻みに震えていた。
「この時を・・・・・・待っていたんだ・・・・・・ずっと・・・・・・！」
アルバは震える手を掲げたままそう呟いた。
「どうした。早く殺せ」
リシュディルの静かな声色が感情を急き立てる。
「わかっている・・・・・・こいつを殺せば、金が手に入る・・・・・・女も・・・・・・すべて・・・・・・俺の望むもの全てが手に入る！！」
アルバは叫んだ。まるで己に言い聞かせるかの様に、震える声で。
リシュディルはそれを見詰めながら隣にいるアッシュに言葉を向けた。
「アッシュ、見ろ。これが人間だ。自己の欲望を満たす為なら同種さえも殺す――汚い生物だ。うんざりするだろう？」
（何を言ってるんだ・・・・・・どういう事だ？）
アッシュは足掻きつつも弟の言葉を反芻する。が、何故の言葉なのか見当も付かなかった。
構わずリシュディルは今だ手を震わせたままのアルバを見詰めながら言葉を続けた。
「まあ、どんな形でもいい。こうやって人間を減らせるならこういうやり方も面白い」
（！！なに言ってやがる！？）
アッシュは耳を疑う。
“人間を減らす”とは、一体どういう意味なのか。
「だが・・・・・・その欲望に最後まで忠実でいてもらわないと困る・・・・・・」
そう呟いて、リシュディルは右手の人差し指をアルバに向けた。
「そろそろ殺れ」
魔術師にも捉えられない、得体の知れない感覚がアルバの脳に侵

入する。途端、アルバの様子が一変した。体の震えも止まった。
「こ・・・・・・ロス！！」
「いやっ！！――あっ！」
全力で逃れようとしたリゼが体勢を崩して傾いた。アルバと二人地面に倒れ込む。地を背に仰向いたリゼの顔面真横にナイフが突き刺さり、声を無くし青ざめた。
「ころス・・・・・・！！」
明らかに正常でないアルバが半身を起こし、改めてナイフを高々と振り上げた。
（やめろ！！）
アッシュがリゼの恐怖に満ちた瞳をその目に捉えた時。
ぱしっ、と何かが弾けた。
「！」
反動でリシュディルが数歩後退さる。そして無言でアッシュの左手の青い光を見詰めシールドを張っていた。
アルバは目を見開き、そして。
「ッシね！！」
叫びと同時にナイフが力の限り振り下ろされる。刹那。
「――ラバス！！」
呪文と同時に放たれた魔術が強烈に発光する。一瞬の内にアルバを捕らえ、森の中へ吹き飛ばしていた。
「リっちゃん！！」
アッシュはすぐさま駆け寄るとリゼを抱き起こす。刺されたかの様に見えたが傷があるのは左肩辺りだ。
「じっとしてて・・・・・・」
アッシュは決して得意でない癒しの術をリゼに施し、左肩の掠り傷はすぐに消えた。
「私より、あの人・・・・・・ジュニアさんが・・・・・・」
「分かってる」
リゼから手を離し、数歩先に血まみれになって倒れているジュニ

アへ歩み寄る。細く息を吐いて見慣れた顔を静かに覗き込んだ。
「ジュニア・・・・・・死んだふりだろ、」
「・・・・・・・う、・・・・・・・ンと、に・・・・・・・死ん、だ・・・・・・と、思っ――――ぐッ・・・・・・・っ！！」
「もうしゃべらなくていい。ほら、あんまり効かないかもしんねぇけど、痛みだけは取れるだろ・・・・・・・」
ジュニアの全身を包む温かい癒しの術。ジュニアは微かに唇を吊り上げて笑おうとした。「楽に・・・・・・・なっ・・・・・・・て・・・・・・きた・・・・・・・とは・・・・・・・」
「わかった」
ジュニアはすーっと眠りに落ちる。安らかな表情を確認して術の手を止めた。ふら付きながら立ち上がると、少し離れた位置でじっと立っているリシュディルに向き直る。彼の表情はやはりどんな感情も表さない。冷たいままだ。
「こんなに隙だらけなのに、狙わないんだな」
「駒がやられればそれまで。意味がないからな」
「・・・・・・全部お前なんだろ。魔物も、アルバも、全部――・・・・・・操っていた、とは言わないけどな」
リシュディルは答えない。アッシュもそれに関して何かしらの回答を期待していたわけではないが。
「よくわかんねぇよ。一体何が目的なんだ？お前に何があったって言うんだ。何でいなくなった？本当にずっとお前を探してたんだぞ、ディル・・・・・・」
約十年前、突然リシュディルは消えた。理由は分からない。それから今日のこの日まで、生きていると信じずっと探し続けてきた。その弟が今、目の前にいる。想像にも及ばなかった姿で。
リシュディルはやはり表情一つ変えず、ゆっくりと口を開いた。
「・・・・・・俺には、声が聞こえる。おぞましい声だ・・・・・・」
「また、それかっ・・・・・・！」

アッシュは歯軋りする。
「声声って、一体何だって言うんだ！？」
問いは思わず呵責の色を含んだ。焦燥に満ちた心では制止し切れないのだ。
同じ青く輝くアッシュの、今は複雑に細められた双眸から視線を逸らす事なく、リシュディルは幾分低めに落ちた声で言葉を紡いだ。
「声・・・・・・救いを求める声、恨み憎しみの声。人間に対する、魔物の憎悪の声だ。そして、魔術師に殺される時の魔物の断末魔。今もどこかで殺されている・・・・・・そんな声がずっと聞こえるんだ」
アッシュは声を発せずに、僅かに目を見開いていた。正気で話しているのか、それさえ疑ってしまいそうになる。
「信じられないならそれでもいい。俺はこの声を止める為にどうすればいいか考えたんだ。アッシュ、分かるか？」
「まさか・・・・・・それがさっきの・・・・・・」
「そう。簡単だろう。誰だってそういう答えになる筈だ。人間を消せばいい。この世界から、全て」
「馬鹿な！！」
リシュディルのあまりの短絡的な考え方に毒吐いていた。そんなもの、子供の発想だ。
「アッシュもやはりそういう風に言うんだな。・・・・・・まあいい。でもお前とは必ず分かり合えると思っている。だから、これからも見ていろ。人間の真実を教えてやる」
「お前は・・・・・・っそんなんじゃなかった。誰よりも優しい奴だった。何でだよ！！声ってなんだ！！」
リシュディルはじっとアッシュを見詰めたまま微動だにしない。アッシュは余計に苛立った。
「ディル、これだけは言っておく。お前が又今回のように人間を殺そうとするなら、俺はお前を殺しても阻止する！！」
ディルが微かに眉根を寄せた。

「アッシュ、本気で言っているのか？」
「ああ、本気だ！容赦はしない！」
ディルは短く息を吐く。
「そうじゃない。“本気で俺を殺せると思っているのか”ということだ」
「――な、に・・・・・・？」
「お前に俺は殺せない。・・・・・・絶対にな」
冷ややかな瞳の奥に何を映しているのか。アッシュは声を荒げていた。
「っ殺せるさ！お前が止めないのなら――」
「分かっていないのはお前だ」
リシュディルがアッシュの言葉を遮った。
無言でアッシュの数歩手前まで歩み寄り、同じ高さで目線が合う。
「アルバさえ殺せない甘いお前に、俺は殺せない」
「！！」
ディルに隠せる事なんてあるのだろうか？見透かされている。全て。
一卵性双生児――こんなにも“同じ”なのに、明らかに違ってしまった。それは一体何だというのか。
「アッシュ・・・・・・いつか、お前も気付くさ」
リシュディルを何も見透かせないまま、アッシュの前から彼は消えた。黒い空間の中へと。　アッシュは何も言葉を見つけられないまま立ち尽くすしかなかった。やっと出会えた弟との距離は想像以上に遥か遠いものだった。何かを期待していた訳ではないのに、とてつもない喪失感がアッシュの胸を支配していく。
同時にこのままではいけないとも心の奥底が叫んでいた。
（ディルを止めないといけない）
いつだって一番近くに居た自分が、何もかも一番近くに在(あ)る自分が、きっと一番ディルの為に何かしてやれると。
アッシュはつい先程までディルの居た空間を見詰め、重々しく息

を吐いた。
振り返ると、そこにはリゼの姿。アッシュはリゼの顔を見て少なからず落ち着きを取り戻すと、傍に歩み寄り左手を伸ばした。
「立てる・・・・・・？」
アッシュは思い出した傷の痛みに堪えながらも微笑んで見せる。リゼはゆっくりアッシュを見上げた。大きな二つの双眸がじっとアッシュの瞳を捉える。
アッシュはそれ以上反応のないリゼへ左手を軽く揺らし促す。が、リゼはいつまでたっても動こうとしなかった。
「リっちゃん・・・・・・・？」
「・・・・・・・・・・・・・にてる、の・・・・・・・」
「え？」
「似てる・・・・・・・どうして・・・・・・・どうして、こんなに・・・・・・」
「似てるって、何が――」
「似てる・・・・・・？ちがう、いっしょ・・・・・・あのひと、と・・・・・・・アっくん、は・・・・・・・ふたご・・・・・・？」
言葉の意味を掴み切れず、アッシュの笑顔が気持ち悪く歪んだ。
「・・・・・・そう、なのね・・・・・・・？」
リゼの問いかける声が掠れた。血の気が引いて青白い頬に、ふと一粒涙が零れる。
「・・・・・・あの人は・・・・・・・ぎんいろで・・・・・・・大きい魔物とやって来て・・・・・・っ私の大切なもの・・・・・・全部こわした・・・・・・っ！」
「――――ッ！！」
心を潰されるような悲痛な言葉。リゼの呟きが、叫びに聞こえた。
差し出されたままの左手が虚しく脱力する。
どこが終わりで、何が始まりなのだろうか？
これがリゼとの結末なのであればどう受け止めて良いのか、もうアッシュには分からなかった。思考回路が完全に停止する。

明けようとする空の綺麗な朝焼けも知らず、森の中は今だ闇に飲み込まれたままだった。まるで二度と明けない闇のように、ただ黒く・・・・・・。

第六章：a　alege1

白い包帯をぐるぐると解き、キキはにっこりと微笑んだ。
「ん、傷は完治ね！調子はどう？」
「いいよ。ありがとう、キキ」
穏やかに答えて、ジュニアは軽く腕を回した。
やさしい太陽の光が差し込むリビングにはいつもと変わらない平和な日常が戻っている。
開け放たれた窓から心地よい風が入り込み、時々二人の髪を揺らした。
今回の様に重症の場合には魔術で回復を補助するには限界がある。多くの魔術師は病院に行くか、癒しの能力を得意とする者ならばある程度術を施してから自然治癒に切り替えるのが普通であった。
幸いにもキキは後者である。更に様々な術薬も彼女なりに作製しており、大部分はお遊びだったが時に驚く程効果の出るものもあった。
「でも、あんまり無理しちゃだめよ？ゆっくり体力を回復しなきゃ・・・・・・」
「俺は大丈夫だよ。それよりもアッシュは？まだ熱が下がらないのか？」
「そうなのよ。ずっと高熱が続いてるの。アッシュが熱出すなんて初めてじゃない？」
「・・・・・・そうか」
ジュニアは静かに呟いた。
あの激闘から三日が経っていた。ジュニアの記憶は途切れ途切れで、気付いた時には自分のベッドの上だった。自分の記憶が途切れてから一体何があったのか、今だ知らずにいる。
それはキキも同じで、夜が明ける頃にアッシュがキキ達の待つ店に帰って来たのだが、彼は力なく微笑んだだけで何も語ろうとはし

なかった。そのまま何となく聞けずにいるとアッシュが高熱でダウンしてしまったのである。
当時キキは勿論、血まみれになってぐったりとしたジュニアを見た途端、それどころではなくなっていた。アッシュ自身も負傷していたが、眠っているジュニアを背負い、気を失ったリゼを抱えて帰ってきたのにはキキも正直驚いた。二人を担ぐのには魔術を使ったとアッシュ本人は言っていたが、相当な体力を消耗する筈である。もしもその場にいるのがアッシュでなかったらと想像しそうになり、キキは首を大きく横に振った。とにもかくにも三人とも生きて帰って来た事をキキは素直に喜んでいた。
「私ちょっとアッシュの様子見てくるね」
「ああ、俺も行くよ」
二人はソファから立ち上がり、アッシュの部屋に向かった。
部屋の前で立ち止まり、返事がないと分かりつつ一応戸を叩いてみる。
「キキよ、入るわね」
戸を開けると、薄暗い中でアッシュの苦しそうな呼吸が聞こえた。
キキとジュニアはベッド脇に歩み寄りアッシュを覗き込む。
「アッシュ・・・・・・大丈夫？」
キキの呼びかけにアッシュは薄く目を開いた。意識がはっきりしている様には見えなかったが、キキは微笑みかけ、アッシュの額のタオルを取って枕元の水に浸した。そしてふと、その脇に白い物体を発見する。
「ん？・・・・・・あっ。薬また吐き出したわね！もう～！薬飲まなきゃ治らないわよー」
「薬嫌いは相変わらずだな」
「熱で朦朧としてても薬だけは分かるのかしら？しょうがないなぁ、んとに」
キキは困ったように眉を顰めた。
水で冷やしたタオルをアッシュの額に乗せ、キキとジュニアは立

ち上がる。
「アッシュ、ゆっくり休んで。また様子見に来るからね」
「・・・・・・・う・・・・・・・」
アッシュが声を発した。キキは何か言いたいのかと、アッシュに顔を近づける。
「何？どうしたの？」
キキの呼びかけにアッシュはゆっくり視線を動かす。視点の合わない目で必死にキキを見詰めた。
「・・・・・・」
アッシュが何事か呟いた。が、よく聞き取れない。
「え？なに？」
キキは更に顔を近づけた。
「・・・・・・・リ・・・・・・・・ちゃ・・・・・・・・」
「え――・・・」
瞬間ぐっと手首を掴まれ、キキは驚く。弱々しくはあるが病人の出せる力ではない。
「アッシュ、ごめん。私キキよ。・・・・・・分かる？キキよ・・・・・・」
「リ・・・・・・・・・・・・・ご、め・・・・・・・・・・・・・・」
「アッシュ・・・・・・・」
キキは返す言葉を失ってしまった。熱のせいか、リゼの幻覚でも見ているのかもしれない。
「どうしよう、ジュニア」
キキはジュニアを振り返った。ジュニアは静かにアッシュに歩み寄ると、何やら魔術をかける。
すると、アッシュはすーっと眠りだした。キキの手首も自由になる。
「・・・・・・・リゼさん、どうしてるのかしら・・・・・・・」
「・・・・・・・」
暫くアッシュを眺めやっていたが、程無くして二人は部屋を後に

した。
　考えてみればあれ以来リゼに会っていない。彼女は疲労困憊(ひろうこんぱい)していたものの奇跡的に無傷だった。それはアッシュとジュニアが必死でリゼを守ったからだという事は容易に想像出来た。
　正直キキは少し違和感を抱いている。だったら、お見舞いぐらい来てもいいのに、と思うのだ。三日間何の音沙汰もないのはリゼらしくもないし、何よりもアッシュのうわ言が二人の間に何かあったのだということを裏付けている。しかもそれはあまり良くない方向に向いているのは間違いない、とキキはふんでいた。が。
「私、じっとしてられない性格だけど今回だけは下手に動いちゃダメな気がするの。まだ、ダメって・・・・・・。アッシュが早く元気になってくれるのを待つしかないわね・・・・・・」
「そうだな・・・・・・」
　ジュニアがぼそっと相槌を打った。
「・・・・・どうしたの？なんか、へん」
「へん？」
「うん、元気ない感じ」
「そうでもないよ、大丈夫」
「・・・・・体調悪くなったらちゃんと言ってよ？」
「ありがとう、大丈夫」
　キキは微笑んでリビングに姿を消した。
　ジュニアは、ふっと軽く息を吐く。時々キキはやけに鋭い。特に何かを口走った訳でもないのに心の中を見透かすのだ。今も漠然と感じている妙な胸騒ぎを見破られそうになった。
　あの日、アッシュの双子の弟であるリシュディルと出会ってから何かが動き出す気がしてならない。アッシュはディルとどんな会話を交わしたのか。アッシュはこれからどうするつもりでいるのか。
　ジュニアにはそれがなぜか気がかりだった。

＊　＊　＊

ディルとは、本当に仲のいい兄弟だった。
一卵性双生児――二人は何もかもが同じだった。
身長、体重、声、そして青い瞳に灰色の髪。ほんの少しの違いもない二人を判別するため、いつ頃だったか父と母は兄のアッシュの髪の色を金色にした。そしてアッシュには左耳に、ディルには右耳にそれぞれシルバーのリングピアスを付けた。
そんな二人の唯一の違いはそれぞれの性格だった。自由奔放で強気なアッシュ、控えめで心の優しいディル。よく泣いているディルの手を引いて、アッシュ達は毎日のように自然を駆け回った。
父と母に魔術の基本を習うと二人はすぐに自分のものにしていった。そこはやはり優秀な両親のＤＮＡのおかげか、目を見張る程の能力を開花させていった。二人に力の差は全くなく、どちらも未知数そのものであった。
ただ性格の違いからかディルは魔物たちを倒す事よりも仲良くなろうとした。そして一般的に手懐ける事が不可能な魔物までディルは共に遊ぶようになっていった。アッシュには到底無理な事だったが、ディルにはなぜかそれが出来た。
そんな平和な日々にいた二人を狂わせたのは、今思えばあの日の夕方。いつものように森の中へ入って遊んでいた時だった。
ディルの様子が、おかしかった。
「アッシュ？何か言った？」
「ううん、何にも言ってない」
「そう・・・・・・？」
辺りの木々は陰を色濃く落とし始め、二人は家路につく事にした。
「今日もけっこう魔物がいたな！おれが魔術でたおさなかったら危なかったぞ！」
アッシュの言う魔物とは小型のものばかりで、森の中に多く生存

するいわゆる雑魚である。
「でもさ、ちょっとかわいそうだな・・・・・・」
「かわいそうなもんか。あいつらはアクイとゾウオのかたまりだから、やっつけなきゃいけないんだって父さんも母さんも言ってただろ？」
「アクイとゾウオって、よくわかんない・・・・・・・」
「まあ、そうだけど、」
「・・・・・・？アッシュ？」
「え？」
「今、何か言った？」
「アクイとゾウオ？」
「ううん、それじゃない。・・・・・・なんか・・・・・・気持ちわるい・・・・・・うわっ！！」
急にディルが立ち止まり、その場へ蹲(うずくま)った。両耳をきつく塞いでいる。
驚いてアッシュが駆け寄った。
「大丈夫かディル！何かいたのか！？」
「ううん、違う・・・・・・こえ・・・・・・こえが・・・・・・あっ」
「声？声って、なんの――」
「うわあっ！ほら！聞こえるよ！気持ち悪い！アッシュ聞こえないの！？」
「え？えーと・・・・・・うん、なんにも・・・・・・ディル、大丈夫か？」
顔を上げたディルの表情は青ざめていた。目には涙が滲んでいる。
「アッシュ、こわいよ・・・・・・こわい！気持ち悪い声が――ほら、まだ聞こえるっ・・・・・・もういやだ！」
「えと、えと、ほら、おぶってやるよ、しっかりつかまってろよ！すぐ家に着くからな！父さんも母さんもいるからな！」
「アッシュ！あああ！」

嗚咽(おえつ)を漏らし泣き続けるディルの体は終始震えていた。何が聞こえるのか、アッシュには皆目見当もつかず、ただ励ましてやる事しか出来なかった。

家に帰り着くと父と母が出迎えてくれた。いつもより帰宅が遅かったからか心配していたのだろう、ディルの様子を見るなり母がしっかりと抱きとめ、二人を家の中に入れた。

ディルはその後泣き止みぐっすりと眠ったという事実が記憶に残っているが、今思えばそれはきっと母が魔術でディルを眠らせたのだろう。

それから数日何事もなかったかの様に日が過ぎ、アッシュはその出来事を忘れてしまった。

ただ時々ディルが遠い目をしている事に気がついてはいたが、さして気にも留めていなかった。

そしてそれから一月経ったある晴れた日。

ディルは急変した。

第六章：a　alege2

その日も、いつものように森に入って二人で遊んでいたが、朝から明らかにディルの様子がおかしかった。冷たい瞳に笑顔の消えた表情。

アッシュはディルが何かに怒っているのかと、話しかけた。

「別に・・・・・・ただ、もううんざりしてるんだ」

「！？ディル、おまえ、何だよその言いかた・・・・・・」

「にんげんって、こんなにも恐ろしい生きものなのかな・・・・・・魔物をへいきで殺していく」

「なに言ってんの――」

「アッシュ、僕は行くよ」

「行くって、どこに？」

「さあ・・・・・・・僕にも分からない。でも、僕は行かないといけない。・・・・・・・伝説の魔物だよ。呼んでるんだ――」

「ディル！！ま、待って！！」

駆け出したディルの後を追うも暫くして息を切らしアッシュは立ち止まった。同じくらい速く走るディルに、反応の遅れたアッシュがどうやって追いつけたのか。

「ディルーッ！！」

やけに太陽が熱かった事を、アッシュは忘れられないでいる。

何が起きたのか全く分からなかった。

一日経ち、二日経ち、そして一週間が経っても、ディルは帰って来なかった。どこに行ってしまったのか。たった九歳という幼さで消えてしまった子供が果たして生きているのか――。

日が経つにつれ不安の色は濃くなっていくばかりで、ある真夜中には、明かりの漏れる扉にそっと近付くと、あの気丈な母が顔を覆って泣いているのを目にすることもあった。

アッシュはただただ悲しかった。いつも当たり前の様に隣にいた

弟が突然いなくなった喪失感と、両親の悲しみ。
なぜ、いなくなったのか――？
アッシュは自分自身を呪った。様子がおかしいことには何となく気付いていたのだ。それなのに自分は何もしなかった。これだけ近くにいたのに、何も・・・・・・！
それから暫く立ち直れなかった。その時も、滅多に出ない高熱を出し寝込んだのだった。
大切なものを突然失ってしまう悲しみ。苦しみ。そして、自分自身への、後悔。
寝込んでいる間、堰を切ったようにアッシュの目から涙が溢れた。
いくら望んでもどうしようもない現実があることを、この時アッシュは痛感した。

それから間もなく全快し、また森に出かけて行くようになった。
一人で何もせず、ただ草の上に座ってぼーっと空を見上げる日々。何も考えていなかった。
ただ、そうしていたかった。
そうして三日目。
空を見上げるアッシュの視界に突如、小型の魔物の群が飛び込んで来た。飛行能力を持つミドル達だ。どこに向かうのか、彼らは何かに引き寄せられる様にただ真っ直ぐに飛び去って行く。
「――――――」
アッシュは思わず立ち上がっていた。
瞳を大きく見開き、口を半開きにしたまま、暫く魔物の群を凝視する。
体が震えた。
「ディル」
声が掠れ、言い慣れたその名は風に流され消える。
しかしそれは確信だった。
目に見えた訳ではない。耳で聞こえた訳でもない。

ただ、感じたのだ。あまりにも、懐かしい感覚。
「生きてる」
この世界の、どこかに。
「ディル・・・・・・」
もう一度呟いて、アッシュは少しだけ笑った。

その日の内にアッシュ達三人は近くの町に移動した。両親が伝説の魔物の情報を集める為に久し振りに移った町だった。
アッシュはそこで、リゼに出会うのだ。
少女は純粋で少し変わっていて、アッシュの心に出来た隙間を少しずつ埋めていってくれた。アッシュにとって大切な存在になるのにそう時間はかからなかったが、心のどこかで、ずっとこのままではいれないのだという諦念があった。
それでも傷ついた心を癒してくれた少女の存在は大きかったのだろう、ずっと心の片隅に、しっかりと温められていた思い。
ディルとリゼ。
アッシュにとってはどちらもかけがえのない存在なのだ。
(選ぶとしたら、どっちをとる・・・・・・?)
例えば、そんな難題に直面してしまったとしたら。
以前ならそれは比べる対象にもなり得ていなかったかもしれない。大切な弟と、“女”というだけの選択。
しかしリゼは・・・・・・偽りではないのだ。気休めでも、同情でもない。本物なのだ。リゼは運命の人なのだ。そう自信を持って言える。
(運命か・・・・・・何が“本当の”運命なんだ?)
リゼの疑心に満ちた表情が生々しく蘇る。
見開かれた瞳を直視出来ずに、顔を背けてしまった。

『・・・・・・あの人は・・・・・・・ぎんいろで・・・・・・・大きい魔物とやって来て・・・・・・・っ私の大切なもの・・・・・・全

部こわした・・・・・・っ！』

リゼの言葉が意味するのは、ただ一つ。

（ディルがやったんだ）

昔からなぜか魔物を手懐ける事が出来た。伝説の魔物を追って消え、それから間もなく伝説の魔物が暴れ出す。そして最近の不可解な魔物たちの行動。

全てが繋がるのだ。リシュディルが、伝説の魔物を操っていると――。

リゼが見たのは、きっとディルだ。そうだとすればアッシュということで辛い記憶が蘇るに違いない。

忌々しい男の顔。

（一緒にいない方が、彼女にとっては幸せなんだ・・・・・少なくとも、思い出さなくて済む）

そう、結論づける。

どんなに望んでもどうしようもない現実はたくさんあるのだと。

しかしそれは諦念ではない。

確かな、選択だった――。

＊　＊　＊

アッシュが寝込んでから五日目の朝。若しくはあの激闘から同じく五日目。

朝七時きっかりにキキとジュニアがリビングに顔を出した。

「おはよ」

先客が振り向き、二人に微笑む。

「アッシュ！！もう起きて大丈夫なの！？熱は引いてたけど、まだ全快じゃないんじゃ・・・・・・」

「んー、大丈夫。いつまでもじっとしてらんねーよ。ちょっと体動かさないとな」
アッシュが大きく伸びをして言った。
「無理はするなよ。依頼は断れば済むんだ」
「さんきゅー。まーでも、寝てるだけってのも案外しんどいもんだな！何年ぶりだろうなぁ、熱出たの」
「私が知ってる限りでは今回が初めてよ。学生の頃もアッシュが風邪引いたとか一回も聞いたことないもん」
いたずらっぽく笑うと、キキは何か食べるもの用意するわね、と言ってキッチンに消えた。　ジュニアはキキの後姿を目で追ってから、アッシュの向かい側に座り込んでふっと、息を吐いた。
「アッシュ・・・・・言うのが遅くなったが、すまなかった。あの日、お前の足を引っ張ってしまって・・・・・」
ジュニアが少し視線を落とす。あの時の衝撃は今もはっきりとこの体が覚えている。
「そこから先の記憶も曖昧だ・・・・・ただ、お前がいなければ俺は確実に死んでたな・・・・・ありがとう」
「・・・・・」
真剣な眼差しを向けるパートナーから、アッシュは少し視線を外す。そして嘲笑気味に唇を歪めた。
「・・・・・俺はあの時、あいつを止めることが出来た筈だ。なのに油断し切ってた。そのせいでお前に大怪我負わせたんだ、俺の失敗だよ。それに、ジュニアが来てくれなきゃ、リっちゃんだってどうなってたか・・・・・俺には自信がないんだ。あの時本当に自分一人でなんとか出来たのかって・・・・・だから、俺の方こそ、ほんとは」
いったん言葉を切ったアッシュが、視線を落としたまま「ごめんな」と呟いた。ジュニアが黙ったままでいるとアッシュが顔を上げ、口を開いたまま何かを言いかけた。が、それはいつまでたっても音になる事はなく、ただ沈黙が続いただけだった。

ジュニアは目を逸らすことなく言葉を待ったが、アッシュは苦笑を浮かべると、何でもないといったように首を振る。
「お待たせ！今日の朝食はスペシャルシリアルよ♪」
タイミング良くキキがリビングに戻ってくると、ミルクとシリアルの箱を無造作にテーブルに置いた。そしてもう片方の手に持っていた皿とスプーンを広げる。
シリアルの箱をながめていたアッシュが首を傾げた。
「スペシャル？」
どう見てもいつもと変わらない、市販のシリアルなのだが。
しかしキキは、ふふふと得意げに笑うと、シリアルの箱を掴み皿へ盛る。
すると、星やハートといった可愛らしい形にピンクやグリーンの色がついたシリアルが出てきたので、ジュニアとアッシュも「おおー」と声を上げた。
「これは新発明の体力回復用シリアルなの。病み上がりの人達には丁度良いでしょ？」
三人は揃って合掌し、キキの心のこもったスペシャルな朝食を堪能する。
「うまい！」
アッシュは本当に、嬉しかった。
このジキアというチームは最高だと改めて感じる。胸が詰まるような思いの中で、アッシュは心から失いたくないと思った。
あの日のように、自分のミスでジュニアを危険に曝さないように。キキがこれ以上心配などしなくて済むように。
大切な人達だからこそ思うのだ。
（“最悪”よりは“まし”を選びたい）
嫌という程考えた結果の、選択だった。

第六章：a　alege3

アッシュは食べ終わった皿にスプーンを置くと真っ直ぐ二人を見つめた。
「あのさ、話があるんだ」
「？」
いつになく神妙な態度のアッシュに何かを察したのか、二人は黙したまま微かに首肯する。
アッシュがゆっくりと口を開いた。
「何から話していいか困るんだけど・・・・・・結論から言うと、俺、これからディルを探そうと思う・・・・・・ああ、キキには話してなかったな。リシュディルっていう双子の弟が、俺にはいるんだ・・・・・・」
話している間、二人がどんな表情で聞いていたのかアッシュは知らない。二人はただ黙って耳を傾けていた。
「・・・・・・ディルはあんな奴じゃなかった。何があいつを変えてしまったのか、突き止める事が出来たらあいつを助けてやれる・・・・・・そんな気がするんだ」
アッシュは言葉を切り、少しの沈黙の後、何かを決意するように瞳を上げた。二つの視線とぶつかる。
しかし。
「――――」
言葉が、出なかった。
なぜなら、あまりにも“ふつう”だったからだ。
驚き、怒り、悲しみ・・・・・・そのどれにも属さない、いつもの表情(かお)。
「え・・・・・・っと、だから・・・・・・」
しどろもどろにやっと言葉を発してみるが、言うつもりだった言葉が見つからない。

「アッシュ」
困り果てているアッシュの名前をジュニアが呼んだ。ぴくりと反応するも、返事さえ出来ない。
「アッシュ」
聞き慣れた低音が繰り返す。
二人の視線はじっと合ったまま。アッシュは唾を飲み込んだ。
「・・・・・・・やー・・・・・・・・だから、ディルのことは、ものすごく危険だから・・・・・・・今回みたいなのは、避けたい、から・・・・・・だから、何もわざわざ、危険なこと・・・・・・・に、巻き込みたく・・・・・・・ない、とか、思って・・・・・・・だから・・・・・」
「だから？」
ジュニアの少し尖った返しに。
アッシュは口を引き結ぶ。

（だから、さ）
（失いたくないんだ）
（大切だから・・・・・・・怖いから）

「・・・・・・・だから・・・・・・・・さ、」

（俺ひとりで、行く）

思いを言葉にする前に、ジュニアが大きく息をついた。
「まったく・・・・・・・お前らしくない」
「・・・・・・」
「“一人で何を恐れてる”？」
強い眼差しだった。何も言い返せずに、唾を飲み込む。
「チームなんてそんなものだろう？それに、命が惜しいなら始めからお前と組んだりしない」

「ふふっ！ほんとよね！」
笑い声を上げたキキが可笑しそうに同意する。
「・・・・・・・・・・・・は、・・・・・・・なんだ、ソレ・・・・・・・」
そう答えるので精一杯だった。
思えば、退治屋を始めると言うアッシュに賛同したこの三人で、いつしかチームを作っていた。アッシュにとって本当に居心地の良い場所を二人は与えてくれていた。
だからこそディルやリゼのように、やはりこの二人もいつか失ってしまう日が来るのではないかと疑わずにはいられなかったのだ。
きっと、もうずっと、そうやって怯えていた。

『何を恐れている？』

ジュニアの言葉を心の中で反芻してみる。
お前が恐れる必要はないと、ジュニアはそう言いたいのではないのか。
（俺は馬鹿だ・・・・・・・ずっと逃げてた）
「あー・・・・・・・」
アッシュから呟きが零れる。ソファへ凭れると右手で両目を塞いだ。
（そうだ、何を弱気になってんだ。失くしたくないなら守ればいい）
「アッシュ？」
キキが呼んだ。
右手の隙間から二人を覗くアッシュの表情は明るい。
「ごめん、どうかしてた」
体を起こし正面から向き合った。
きっと何も言わなくても全て分かっているだろうけれど。
「チーム・ジキアは旅に出るぞー。賛成なら挙手！」
顔を見合わせた三人の、躊躇いのない手が真直ぐ天に向けられる。

新たな出発への誓いだった。
「で、いつ出発するのアッシュ？」
「三日で全部片付けるぞ。早い方がいい」
「三日ね。うん、分かった。依頼はどうする？」
「あれば行く」
「じゃあ調整しとくね」
「それで、向かう場所は？」
キキに続けてジュニアが言った。
「とりあえず西の方へ向かおうと思う。ディルが消えた時にいた町に行けば、何かつかめるかもしれない」
「了解」
何でもいいから情報が欲しかった。ディルのことは何もかも疑問だらけなのだ。
（魔物の声が聞こえる、か）
一体どんな感覚なのだろうか？
魔物は人間の悪意と憎悪が実体化したものであるという。誰が解明したのか、それが一般論だ。
（細かい事はわかんねぇ。でも、そんなものに“声”なんてあるのか？・・・・・・“声”って、何なんだ？）
結局また、疑問符で終わる。この繰り返しだ。
アッシュは一つ溜息を吐いた。ソファから立ち上がると大きく伸びをする。
「・・・・・・アッシュ」
どことなく控えめなキキの声に振り返ると、案の定、気まずそうな顔がそこにあった。
「うん？」
アッシュが軽く返事を返す。
「あのね、この町でお世話になった所には旅に出ること伝えようと思うんだけど・・・・・・うーん、その、リゼさんには・・・・・・連絡しないのかなっと思って！ほら、向こうからも何も連絡ないし、

どうしてるのか心配だしっ・・・・・・・」
「・・・・・・」
アッシュから返答がないのでキキはさすがに困ってしまった。聞いては駄目だったかと、眉間に皺を寄せる。
「えーと・・・・・・ごめん。余計なお世話だったかも・・・・・・・うん。でも、ほんとに何か、あったのかなって気がして」
「いや、いいよ。連絡するかどうかは任せる」
「あー、うん！分かった――」
アッシュは理由を語らなかった。そのままリビングを出て行ってしまう。
しかし、キキにはそれが答えだった。アッシュとリゼはこのまま離れようとしている。どんな理由がそこにあるのかは想像だに出来ないが、少なくともアッシュはそのつもりなのだ。
でも、とキキは思う。
（私には二人がどんな関係なのか分からないけど・・・・・・少なくともアッシュはリゼさんの事・・・・・・）
もしかしたら、リゼも？
それは直感でしかないが、もしも、リゼがアッシュと一緒に行きたいと言ったら？
キキはぐっと両手を握り天を仰いだ。
（よし！ダメでもともと。伝えるだけ伝えなきゃ！）
キキはその日の午後、久しぶりにリゼの店へ向かった。

＊　＊　＊

リゼの店は相変わらずの盛況で、店の前には多くの客が列をなしていた。
最後尾にならんでみるもののリゼがいるのかどうかも分からない

まただ時間だけが過ぎていくような気がしたキキは、どうにかして中の様子が分からないものか、列を離れないようにうろうろとしていた。
五分くらいそうしていただろうか。ふと店のドアが開き、食べ終えたらしい客が数人出て来た。その後を見送るように笑顔を湛えた女が一人顔を出す。「あ、」と、キキは呟いていた。
女と目が合う。
「リゼさん！」
「！キキさん・・・・・・・――あ、次の方どうぞ！四名様ですね？お待たせしました――」
いったんリゼは店に入っていったが、間もなく出てくるとキキに歩み寄った。
「お久しぶりです・・・・・・あの、少し時間をもらってきたので、近くの公園にでも行きませんか？」
意外にもキキが誘われ、面食らったように慌てて頷いた。
そうして二人は店から数メートルほどの場所にある公園に行き、ぽつんと佇むベンチに並んで座る。
沈黙を避けたいキキが先に話題を振った。
「もう体調はいいの？」
「あ、はい。もうすっかり元気です・・・・・・」
「そっか、うん、ならいいの！」
「・・・・・・」
「・・・・・・」
結局気まずい沈黙が降りた。キキはどうやって本題を切り出そうか、内心焦りながら言葉を探す。しかしまたしてもキキの憂慮はあっさりと霧散する。先に口を開いたのはリゼだった。
「ごめんなさい・・・・・・」
「え？」
キキは思わずリゼを振り返る。
「・・・・・・あれから一度も、お礼に行かなくて、失礼な事して

るって分かってはいたんです。でも・・・・・・どうしても、怖くて・・・・・・わたし・・・・・・」
長くきれいな睫毛が伏せられた。キキは驚きつつも安堵感を覚え、細い吐息と共に言葉を紡ぐ。
「・・・・・・実は、その事について私聞きたくて、あなたを訪ねたの。・・・・・・そうね、確かにあれだけの傷を負ったアッシュとジュニアを一度もお見舞いに来ないのは、リゼさんらしくないなって。何かあるんだと思ったの。良かったら話してもらえないかな？怖いって、何のこと？」
「・・・・・・一体何から、話していいか・・・・・・」
戸惑うリゼを見詰めながらキキが続ける。
「私今回の事を詳しくは知らないんだけど、リゼさんとアッシュの関係がどんなものなのか、それが分からないわ。リゼさんはアッシュの事・・・・・・好きなんじゃない？」
キキの言葉を受けて、リゼはなぜか悲しそうに微笑む。
どこか遠くを見つめる様に顔を上げると、しっかりとした声で語り出した。

第六章：ａｌｌｅｇｅ４

「キキさんには全部話します。・・・・・・私、十年前に、伝説の魔物に両親を、殺されたんです」
「えっ！？・・・・・・って、もしかしてあの、町がひとつ無くなったっていう――」
「はい。私の故郷です。何が起きたのかは全く・・・・・・その時の記憶が曖昧で。数年前まで完全に記憶を失くしてたんです。今はもう大分、話すのも平気になってきてはいるんですけど、時々、発作のように苦しくなるんです」
　キキはかける言葉が見つからず、黙したままでいた。
　リゼは淡々と話を続ける。
「一人になった私を引き取ってくれたのは、母方の叔母さん達でした。でも、もともと両親と仲の悪かった叔母さん達は、ただ私に遺された財産が目的で、私自身は受け入れてもらえなかった・・・・・・本当に、つらい日々でした。何度死んでしまおうかって考えもしたけど、でも、そんな私を支えてくれた存在があったんです」
　ふと、表情が和らぐ。自身の言葉を証明するかのような素直な反応だった。
「“アっくん”、は・・・・・・私、記憶をなくしてたから、彼の顔も声も何も分からなかったけど、その名前だけはずっと私の心の中にあった・・・・・・いつでもそこにいて、力をくれてたんです」
「もしかして・・・・・・それって」
「はい。アッシュさんです。実は、アッシュさ――・・・・・・アっくん、とは、十年前に出会ってるんです。彼は、友達がいなくて独りぼっちだった私を見つけて、遊ぼうって言ってくれたんですよ。そんなの初めてだったから、本当に嬉しかった。窓辺でぼーっとしてる私を見つけてくれるなんて、奇跡だと思ったんです。実際、後にも先にも、アっくんだけ・・・・・・」

「へぇ・・・・・・」
アッシュの話をするリゼはいきいきとしていた。キキにはそれがとても新鮮に映る。思わず、つられて笑顔になる。
「あの頃は二人ともまだ子供だったからかもしれないけど、少なくとも私はアっくんの事が大好きでした。アっくんはそれからまた引っ越していく事になって、お別れの前に、夜中にこっそり秘密の場所へ二人で行ったんです。そこで、魔法のようなもので一面に花を咲かせてくれて、しかも虹色に光り輝くんですよ。今でも忘れられないくらい、幻想的だった」
「あ！！それってこの間パーティーでアッシュがやった演出じゃない？」
「ああ、そうでしたね」
（やっぱり）
キキは確信した。
（やっぱりアッシュはリゼさんのことが好きなんだ）
そう確信すると同時にとくとくと心臓が脈打ち出す。
キキは今まで見たことがなかったのだ。こんなにも深く、誰かを想うアッシュというのを。
本当の恋が出来ないなんてとんでもない思い違いだった。出来ないのは当然だったのだ。他の誰かが入り込む隙間さえすでにないほど、アッシュの心の中にはリゼがいたのだから。
「アルバさんの事も話しておきます。彼は、結果的には私の財産が目的でそこに愛情なんて全くなかったかもしれないけれど、それでも今ここに私がいるのは彼のお陰だと思ってるんです」
「あんな奴だったのに？・・・・・・なんで？」
「叔母さんの家での、つらい生活から助け出してくれたのが、アルバさんでしたから。なぜそうしてくれたのかは分かりません。でも、私は差し伸べられた手を握るしか道はなかった・・・・・・そして本当に起きた奇跡から、彼を記憶の中の“アっくん”だと信じ込んでしまったんです。それでも親しくなるにつれてアルバさんには彼

女がいる事を知ったけど、私はそれを現実として受け入れられなかった・・・・・・アっくんという存在をなくしたら、私は生きていけないと思ったから・・・・・・」
リゼが息を吐いた。つらい記憶を語る事は相当な負担になるのだろうが、それでも話し続けた。
「あの事件のとき、もう死んでもいいと思いました。現実を受け止めるしかないって、諦めがついたんです。・・・・・・でも・・・アっくんは・・・・・・諦めずにいてくれた・・・・・・必死で私を守ってくれた・・・・・・本当に嬉しかったんです。また信じれるかもしれないって」
「・・・・・・リゼさん、それならどうして？何があなたを邪魔してるの？」
そこで初めて、リゼの表情から余裕が消えた。きつく目を閉じる。
「わたし・・・・・・知ってしまった・・・・・・。両親を、大切なものを奪った人と、アっくんは双子なんだってこと・・・・・・！」
キキは一瞬真っ白になる。リゼの肩が震えた。
「何がなんだか分からなくなって・・・・・・私の一番憎い人は、私の一番大切な人の兄弟・・・・・・私、アっくんの側にいたら、どうなってしまうか分からない。アっくんを見つめるたびその人を思い出してしまうかもしれない。つらくて、苦しくて、アっくんさえ憎んでしまうんじゃないかって、それがすごく怖くて・・・・・・っ！」
「リゼさん・・・・・・」
両手で顔を覆って静かに嗚咽を漏らすリゼの体を、キキは優しく抱き寄せた。キキが抱いてみても感じる、リゼの体の細さ。この小さな体に背負うものはあまりに大きすぎる。今にも潰れてしまいそうだった。
キキもリゼ同様、この事実をどう受け止めていいか分からずにいるのは確かである。しかし、それではあまりに・・・・・・。

（リゼさん、つらいと思うわ、思うけど、それじゃあ駄目な気がするの。それだけ好きな気持ちがあるのに、・・・・・・だからもっと・・・・・・）
この湧き上がる様なもどかしさをどうしたら上手く言葉に出来るのだろうか。
リゼの苦しみを否定する気はない。
だが・・・・・・だから、これではあまりにも・・・・・・！
（あ、だめだ。どう考えてみても全部違う気がする）
キキはそっと息を吐いた。
きっとこれらはリゼ自身が自分で答えを見つけなければ意味の無いことなのだと気付き、やっとキキ自身の気持ちも僅かに落ち着きを取り戻す。
（三日後・・・・・・伝えるべきかな・・・・・・？）
伝えたところで、リゼにとってはどちらもつらい選択になるのは分かっている。しかし、黙っている事は到底出来なかった。
震える肩を撫でながら静かに口を開く。
「リゼさん、聞いて？私たちね、中央の町を出て旅に出る事にしたの・・・・・・」
キキの言葉にリゼが顔を上げた。幾筋もの涙が頬をつたったまま。
「うそ・・・」
キキは首を横に振る。
「いつ？どこへ・・・・・・行くの？」
「行き先はアッシュ次第、私も分からないわ。出発は今日から三日後」
「そんなに早く・・・・・・」
リゼは呆然とキキの言葉を聞いている。キキは更に続けた。
「リゼさん、私たちね、リシュディルを・・・・・・あなたの仇を探し出すために旅に出るの。アッシュにとってはやっぱり大切な弟だからなんとかしたいのよ。・・・・・・アッシュ、あなたに告げずに行くつもりだったわ。あなたのそんな不安を見越してたんじゃ

ないかって私は思う。じゃなかったら、アッシュならリゼさんをさらってでも連れて行く筈だもの。あんなにもリゼさんのこと好きなんだから・・・・・でも、だからアッシュはあなたを一番に思ってそれを選んだのよ。リゼさん、あなたと一緒。アッシュだってどっちを取ってもつらい選択に変わりない筈だから」

「・・・・・」

「リゼさんは、どうする？」

リゼはただキキを見つめていた。答えなど見つかるのだろうかと、そう言いたげな瞳で。

第六章：a　allege5

その日の夜、リゼは月明かりに照らされた窓際にいた。魔物によって破壊された壁はすでに補修されていたが、所々にあの日の爪痕が残っている。継ぎ目の部分を見やり、リゼは眉を顰(しか)めた。

七年前、大きな魔物が町を襲い全てを失ってしまったあの日。覚えているのは大きな魔物と銀色に輝く髪の少年。リゼにとって七年という時間は決して長くはなかった。本当に心から落ち着く日はどれだけあったのだろう、来る日も来る日も悪夢にうなされ続けてきた。

本当にいつか救われる日が来るのか、また以前のように笑える日が来るのか？

そうやって繰り返し問いかけつつも、なんとか生きてきたのだ。

（“リシュディル”）

仇の男の名を、キキはそう言っていた。これからリシュディルを探す旅に出るのだと。

（探して、どうするの？助けるって言ってたけど、私はどうしても許せない・・・・・・。でも、アっくんとリシュディルは兄弟なのよ？）

リゼはぐっと吐き気を催し、右手で口元を押さえた。洗面台に走り、胃液を吐き出す。大きく咳込んだ。呼吸は荒く、目には涙が滲む。

（なんで・・・・・・こんな・・・・・・）

瞳から、次々と涙が零れ落ちてくる。

リゼには全く分からない。どうしたらいいのか。

どうして、こんなにも苦しいのか・・・・・・？

「アっくん・・・」

リゼは知らず、そう呟く。

次の日もリゼは店に立っていた。やさしい伯父と伯母の笑顔に背中を押されるようにして、その日も笑顔を絶やさずに働く事が出来た。
陽気な常連客との何気ない会話。昼時の猫の手も借りたい忙しさ。外に出れば、見慣れた景色に気持ちのいい風が、束の間の安らぎを与えてくれた。
閉店後、ゴミを抱え外に出たリゼは、真っ赤な夕日に顔を上げた。手に持っていたゴミの袋を地面に置き、綺麗な景色にしばし佇む。
「きれー・・・・・・」
思えばこうやって毎日を過ごして来た。とても幸せな日々だ。
夕焼けは徐々に細くなって、夕闇が辺りに影を落とし始める。
（これで、いいんじゃないかな・・・・・・？）
沢山の優しさに囲まれて、守られて、これ以上何を求めるのか・・・・・・。
（わたしは、今でも十分幸せなんだ。だから、アっくんとは・・・・・・）
夕焼けが滲んだ。リゼは泣くまいと唾を飲み込む。別れにはもう充分、慣れているはずだ。
リゼは瞳を手で拭うと笑顔を作った。「よし！」と気合を入れ直し、ゴミを捨てに行こうとした、その時。
背後からミンジアがリゼを呼んだ。
「リゼ！大変よ！リゼ！」
「私はここよ！どうしたの？」
「ああ、外にいたのね。リゼ、大変なのよ！私びっくりしてしまって・・・・・・！」
「伯母さん落ち着いて。何があったの？」
ミンジアは深呼吸をするが、顔色が冴えない。リゼを気遣うような口調で言った。
「今、キキさんから連絡があって、アッシュさん達、明日の朝この

町を出発するんですって・・・！」
　リゼの鼓動が一瞬高鳴る。しかし、微笑んでみせた。
「・・・・・実はね、もう知ってるの。昨日キキさんから聞いたわ。寂しくなるけどしょうがないよね・・・・・・」
　リゼの言葉にミンジアは眉根を寄せる。
「リゼ、あなた・・・・・このままでいいの？今度はいつ会えるかも分からないのよ？長い旅になりそうですって、そう言ってらしたわ」
「良いも何も、だって、どうしようもないわ。寂しいから行かないでなんて言えないし、それに私には、伯母さんたちと一緒にいることが一番幸せだもの！」
「リゼ・・・・・・」
　ミンジアが言葉を詰まらせた。
　リゼはふふと笑って、ゴミを持ち上げる。そのまま大通りのゴミ捨て場へと足を向けた。しかし、数歩も歩まぬリゼの背中へミンジアの声が届く。
「リゼ、あなたは、もう逃げてはダメよ」
　リゼは足を止めた。
　ミンジアが溜息を吐くのを背中で聞く。
「私はね、リゼ・・・・・・お前の本当の、心から笑った顔が見たいの。私たちはお前の幸せのためなら何だってしてあげたいと思っているわ。だけど、私たちでは限界がある。誰か本当にリゼを心から癒してくれるような・・・・・・幸せにしてくれるような人が現れないかって、ずっとそう願ってきたわ」
　リゼはゴミ袋を手から滑らせた。どさっと地面に触れる音。ミンジアからリゼの表情は窺えないが、構わず言葉を続ける。
「アッシュさんの事を話す時、あなた本当に嬉しそうな顔をするわ。全然表情が違うのよ、気付いてたかしら？以前アッシュさんがリゼと会った時の事を話して下さったの。お前の言う“アっくん”とは、アッシュさんのことでしょう？どんなにつらい事があっても、支え

てくれていた人なんでしょう？私は、彼しかいないと思ったわ。リゼ、あなたを幸せにしてくれる人は、アッシュさんしかいないって・・・・・・」

リゼは突然、ミンジアを振り返った。にっこりと笑う。

「私は、伯母さん達と一緒にいたいの！ここにいて、今日みたいにいっぱい働いて、それだけで幸せだって私分かったから！だから――」

「じゃあ、どうしてそんな顔してるの？」

「！」

「幸せなんだったら、なぜ泣いてるの、リゼ？」

「・・・・・・ッ！」

笑ったつもりだった。精一杯笑ったつもりだった。

なのに、どうしても、止まらない。笑おうとすればする程、涙は次から次へと溢れてくるのだ。

「泣いて・・・なんて・・・・・・ない・・・・！」

「リゼ」

ミンジアは歩み寄ると、そっとリゼを抱き締めた。

「現実から逃げてはダメ。運命を嘆いたままじゃ、何も変わらないのよ？もうあの日に囚われるのは終わりにしましょう。幸せは自分で捕まえなければ・・・・・・ね？」

リゼの手がミンジアの服を掴んだ。

（分かっていたの、もうずっと前から）

ミンジアの腕の中で嗚咽をもらす。泣いても泣いても、涙は枯れない。

「アっくん・・・・・・は・・・・・・リシュ、ディ・・・ッ・・・の、兄弟・・・・・・私、どうしたら・・・・・・いいの・・・・・？」

「・・・・・・」

ミンジアにはリゼの言っている意味は分からなかった。何かまたつらい事情を抱えていることは分かっても、ただこうして、聞いて

あげることしか出来ない。
願いはただ一つ。
「幸せになって、リゼ・・・・・・」
そっとミンジアは呟いた。

第六章：a　alege6

静かな夜の闇を、リゼは開け放した窓からずっと眺めていた。
いつにも増して月が皓々と輝いている。
リゼは時々ほっと溜息を吐き、ただ黙って考えていた。
（私はずっと、逃げていた・・・・・・現実を見るのが怖かったんだ）
起きてしまった悲劇。それはもう取り返せない、それが現実。
だから、嘆いてばかりいる事はもしかしたら勿体無い事なのかもしれない。それならば同じ時間を過ごすのに、勿体無くない過ごし方とは何だろうか？
リゼは少し頭を傾げた。
（後ろ向きな考え方ばかりしてたのね、わたし・・・・・・。そういえば、良かったこととか、嬉しかったこととか考えたことあったっけ？）
例えば単純に、今生きているということ。あの日助かったのは、まず一番の奇跡なのだから。
まだ沢山ある。
伯父さん伯母さんと一緒に暮らす事が出来た事。幸せな日々を過ごせている事。町の人がとても温かい事。
（この間、商店街の福引で二等賞を当てたんだったわ！あれは嬉しかったなぁ）
ふふ、とリゼは思わず微笑んでいた。
それから、と、大好きな人の顔を思い浮かべる。
（アっくんに出会えた事、本当に本当に良かった。伯母さん、私、こんなにも幸せだったのね・・・・・・）
少し考え方を変えてみただけなのに心は軽くなっていく気がする。
見えなかったものがどんどん見えてくる。
もう泣いては駄目だ。真っ直ぐ前を向いて、歩き出さなければ。

つらい記憶が消える事はなくても、今を見つめて明るく生きていく事は出来るのだ。もう七年も、それをする事を諦めていた。
（お父さま、お母さま、リゼの事心配でしたか？）
心地よい微風を感じながら、リゼは目を閉じた。
（リゼは強くなります。もっともっと笑って、空の上のお父さまとお母さまに笑い声が届くように。そしたらきっと、安心して下さるでしょ？）
父と母の面影がやさしく微笑んだ。リゼの目に涙が滲む。目を開け零れそうになったのを手で拭うと、大きく息を吐いた。
さあ、それから？
どうするのか。自分はどうしたいのか？
明日になればもう、アッシュはいなくなるのだ。
（リシュディル・・・・・・彼はアっくんの兄弟・・・・・・でも、違う人。アっくんはアっくんなのよ・・・・・・）
顔が同じでも、声が同じでも、それでもやっぱり違う人間。考え方も行動も違う、別個の人間。
確かにリシュディルを許す事は出来ない。出会ったら、どうなってしまうかも分からない。　それでも、そこに囚われてまた大切なものを失ってしまうところだった。もうリシュディルに何も奪われたくはない。
見るべきは自分の気持ち。何を信じ、どう生きて行くのか。
（私は・・・・・・アっくんを信じたい。彼は必死に私を信じてくれた。生かしてくれた。何も隠さず、真実をぶつけてくれた。私の全てを、受け入れてくれた・・・・・・！）
生きる意味がない、と言った自分が情けない。「俺のために生きて」と、アッシュはそう言った。ここまで全力で向きあってくれる人のために、生きればいいのだ。一歩踏み出せばこんなにも幸せは溢れている。
（まだ間に合うかな・・・・・・やっぱり私、一緒にいたい）
正直な気持ちだった。

しかし、リゼはやはり弱気になる。
キキが言っていた。アッシュはリゼに黙って去るつもりだと。リゼの不安を、心中を思った末の決断ではないかと。
（アっくんは私のこと、・・・・・・）
彼の気持ちは痛いほど分かっている。疑いなどあるはずがない。しかし、期待する事を恐れてしまうのだ。アッシュの決断が、もしも気持ちの消失であったならと、考えずにはいられないのだ。アルバの時にそれは少なからずトラウマになって残っている。
（だめだな私・・・・・・）
苦笑して、もう何度目かの溜息を吐いた、その時。ふと、真夜中の闇に小さな影が動いた。　リゼはびくっと体を震わせ反射的に体を潜ませる。心臓が高鳴り、恐怖感が全身を包む。
（魔物！？）
窓を閉めて逃げてしまいたかったが、恐怖で体が動かなかった。どれくらいそうしていたのだろうか、魔物が襲ってくる気配もなく、見間違いだったかとリゼは恐る恐る窓の外へ視線をやる。そこで目にしたものは――
「ッ・・・・・・！！」
思わず叫びそうになり何とか声を押しとどめた。
そこにあったのは、壁に凭れ掛かってこちらを見上げているアッシュの姿。
何かをする訳でもなく、じっとこちらを見つめている。月明かりに照らし出された表情が心なしか悲しく揺れている様に見えた。
リゼは思い返していた。
あの戦いの中で、アッシュがリゼに語りかけた言葉を。

『・・・・・・もういい・・・・・・・・十分頑張って生きてきた。つらかったはずだ・・・・・・でも、だから、また俺はこうしてリっちゃんに出会えたんだ・・・・・・・・ずっと信じてくれて、ありがとう』

『もう頑張らなくていい。信じなくてもいい。そのままでいいよ・・・・・・俺が守るから・・・・・・だから、お願いだから、俺のために生きて・・・・・・！』

『俺のために生きて』

リゼは部屋の壁に凭れ、静かに泣いた。
泣いて泣いて、どれくらいの時間が過ぎたのか分からない。
（この涙が枯れたら、もう泣かない。もう迷わない。だから、おねがい――・・・・・・）
リゼはいつの間にか眠っていた。真夜中のひんやりとした風にカーテンが揺れる。
窓の外には見守るようにアッシュがいた。
ずっと、ずっと。

エピローグ

「アッシュ！　この辺の荷物はどうする？　持ってく？」
「いやいい。置いてく」
「そう。気に入ってたんだけどなー、このキッチン道具。くすん」
「あんまり料理しねーのに……」
「うるさいわね！」
「もう荷物ないか？　車閉めるけど」
「あとは全部置いてくって！　見事に必要最低限ね」
「まあ道中必要になればその都度買い足せばいい」
「そっか。ん、じゃオッケ！」

ばんっ、と荷物を入れた車の後部部分の扉が閉められる。
出発の朝、早々に準備を終えた三人は、住み慣れたアパートを眺めた。

「また帰ってこれたら、ここに住みたいわね……」

キキがしみじみと呟いたが、アッシュは気のない返事を返す。

「そうか？　もっといい家にしろよ。おんぼろだぜ、ここ」
「もう、あんたは！　雰囲気読みなさいよ！」

キキの怒声にジュニアが苦笑した。

「さ、出発しようか、アッシュ？」
「おう」

三人はそれぞれ運転席にジュニア、後部座席にキキが乗り込み、

最後にアッシュが助手席へ乗り込んだ。
天気は快晴。抜群の旅立ち日よりだ。
ジュニアがエンジンをかけた。勢いよくふかす。
「安全運転でよろしくっ！」
「了解！」
次の瞬間急発進し、キキもアッシュも軽く悲鳴を上げた。
「どこがだっ！」
必死で手すりにしがみつきながらアッシュが呻く。
「！！」
と、ジュニアが急ブレーキを踏んだ。
反動でキキが前の座席に鼻をぶつけ、「いたぁい！！」と声を震わす。
驚いたアッシュは「おい、」とジュニアを振り返るが、ジュニアはただ無言で前方を指し示してみせた。
訝しがりながらその方向へ顔を向けたアッシュの目に飛び込んできたのは———
「あーっリゼさんっ！？」
「リっ——」
あまりの驚きでアッシュは言葉を失くした。
リゼが大きく両手を開いて車の前に飛び出して来たのだ。
「うっそ……ほんと！？　うわぁー……っ！」

キキは驚愕と歓喜がごちゃ混ぜになったように、興奮を押さえ切れずにいる。
ジュニアは内心、轢(ひ)かなくて良かったと胸を撫で下ろしつつアッシュを見た。
アッシュは「何してんだ」と呟き、車を降りるとリゼの前に立った。
表情は険しいまま、アッシュがリゼを見下ろす。
「あぶないだろ！　急に飛び出すなんて――」
「ごめんなさい！　でも、間に合った！」
荒い呼吸の中、リゼが言った。
余程急いで走って来たのだろう、よく見ると額にはうっすらと汗が滲んでいる。
アッシュの冷ややかな視線をリゼは真っ直ぐに見つめた。
「あの、私、アっくんに、会いに……っ今日、旅に出るんでしょう？　私全部知ってるわ。キキさんから聞いたの。何の旅なのかも全部！」
「……そう。で？」
「っだ、だから……だから……アっくんに会いに！」
リゼは何とか食い下がる。
両手を握った。
「このままもう会えなくなるなんて嫌だと思ったから……だからっ……だからっ……っ！」
本当に伝えたいことがあるのに中々言葉が出てこない。

リゼは痙攣しそうになる喉の奥から必死に言葉を紡ごうとする。
「……だから、ね……私……だから……」
「リっちゃん」
アッシュの、どこまでも冷たい響きを持った言葉に落としていた視線を上げる。
リゼには次の言葉が分かっていた。それよりも前に、言わなければいけない。
本当に言いたいことを。きちんと。
弱気になりそうな心を奮い立たせるように大きく息を吸った。
「私も、連れてって！！」
「！？」
アッシュは目を見開く。
予想外の言葉に返す言葉さえ見つからない。
「私はっ……やっぱりアっくんと一緒にいたいから！　だから一緒にっ――」
「駄目だ！」
「！？」
強い口調でアッシュはそう叫んでいた。
リゼは唇を引き結び、立ち尽くしている。
アッシュは真っ直ぐリゼの瞳を見つめ、冷淡な態度を崩さない。
「ごめん。連れて行くことは出来ない。帰ってくれ」
「な、んで？」
「何でもだ。帰って――」

「そんなの、納得出来ないも――」
「帰ってくれ！！」
「！！」

リゼがびくっと体を震わせた。
泣きそうな表情で、アッシュを見つめる。

（リっちゃん……ごめん。もう決めた事なんだ。俺と一緒にいたら君はずっと苦しむ。もうこれ以上つらい思いはさせたくない！）

そしてそれは自分自身にも向けた言葉。
自信がなかったのだ。
自分の傍で、自分のせいで苦しむリゼの姿に耐えられるのかどうか。
傷はあまりにも深いのだと、嫌でも知らされている。

「あいつらも待ってるから、もう行くよ」

硬い表情のまま車に戻ろうとした時、リゼがアッシュの腕を掴んだ。
少なからず驚いて、アッシュはリゼを振り返る。
そこには、頬を染め、必死に引きとめようとするリゼの姿があった。

「アっくんのこと、好きなの！　どうしようもなく好きなの！　リシュディルと兄弟だってそんなの関係ないくらい、アっくんのこと大好きだから！　離れたくない――足手まといにならないように頑張る！」

リゼの気持ちをアッシュは痛いほどに感じていた。

嬉しくないはずがないのだ。これまでの決心などいっぺんに吹き飛びそうになった。

（でも、いいのか？　それでいいのか……？）

アッシュは返す言葉に詰まり、必死に平常心を装おうとする。

「アっくんも私のこと好きでしょう？」

「……違うよ」

「違わないよ！　……私、分かってるもの」

「……何だよ、それ……」

そう返すことが今のアッシュには精一杯だった。分かっている。無茶苦茶な返答だということも。

けれどそれ以外に何も方法が見つからないのだ。

顔を背けたままのアッシュに向かって、リゼは突然シュッ、と何かを吹き付けた。

「？　何……」

「知ってるの。昨日だって、ずっと、側にいてくれた。私ほんとに嬉しかった」

「……！」

リゼはアッシュの手を離した。

戸惑うアッシュの目を見つめ、少し微笑む。

柔らかい風が二人の髪を撫でると、微かに花の香がアッシュの鼻をくすぐった。

「何の……」

「ほら、やっぱり、うそついてた……！」

確信と共に、リゼはアッシュの腕に飛び込んでいた。
その時、親指ほどの小瓶が地面に触れて弾ける。
それはキキがリゼにプレゼントした“ＬＯＶＥ？　ウォーター”だった。

「私、もう迷わない。アっくんを信じたい。だから……一緒にいさせてください……！」
「リっちゃん……――！」

アッシュはもう気持ちを抑えられず、ぎゅっとリゼを抱き締めた。
心の底から湧き上がる、言葉に出来ない想い。
胸が締め付けられるようで、息苦しい。

「負けた……。何か、色々考えてたけど……全部見抜かれてたんだな。もういいや……」

リゼの髪を撫で、耳元に囁きかける。

「危険なこともあるかもしれないし、嫌な思いもさせてしまうかもしれない。でも、守るから。俺が守る。一緒に行こう」
「うん……ッ！」

リゼは何度も頷いた。
こんな幸せが来る日を、ずっと待ち望んでいたのだ。
ほんの少しの勇気で新しい道が切り開けることをリゼは知った。
強くなりたいと心から思う。
アッシュがリゼの肩を掴み、ゆっくりと遠ざけた。
二人の視線と、微笑みがぶつかる。

「泣かないんだな？」
「うん。泣いてたら、アっくんが見えなくなるから」
「はは……！」

リゼから飛び出た答えに思わず笑う。
いい顔をしていると思った。これまでとはまるで別人のようなのだ。
アッシュは、ぽん、とリゼの頭を優しく撫でる。

「手ぶらで来たんだろ？　伯父さんと伯母さんには？」
「ちゃんと言って来たわ。伯母さんがね、行って来なさいって……」
「そっか。じゃあ……」

アッシュの言葉を遮って、車から声が投げられる。

「リゼさん！　待ってたわ！　早く乗って！」
「キキさん……」

アッシュとリゼは顔を見合わせ、車に乗り込んだ。リゼはキキの隣に座る。
運転席のジュニアがミラー越しに語りかけた。

「まずは、荷物を取りに行こうか？」
「ジュニア！　今度こそ安全運転徐行運転だぞ！　リっちゃんびびらすなよ！」
「リゼさん！　しっかり掴まった方がいいわよ！　口だけなんだから――っ！！」

キキが言い終わる前に、ジュニアは得意の急発進で走り出した。
リゼの悲鳴が車内に響く。

「は、は、速い……」
「ごめんねリゼさん！　我慢してねっ」
「でも、あはは、楽しい！」
「！」

悲鳴はすぐに笑い声に変わっていた。
ジキアはメンバーを一人加え、一路目的地に向かう。
この先に何が待ち受けているのか、リシュディルを探す旅は、期待と、不安と、危険を連れて。
長く果てしない旅が、始まった。

～ＦＩＮ．～

エピローグ（後書き）

『ジキア』完結です。
ここまでお付き合い頂いた方がおられましたら、本当にありがとうございました^^
更新も不定期&遅々としてしまいどうなるやらと思いましたが、無事（笑）とても嬉しいです。

実は終わり方を見て頂いたらわかるかと思いますが、ジキアは続きます。いつかアップできたらいいなと思ってます。

本当にありがとうございました☆

２００８．６．１３　露露

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4840d/

ジキア

2010年11月5日14時10分発行